

整合騎士達と捻くれ者のソードアート

ゆつくりblue1

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはゲームであっても遊びではない。総武高校の2年生である比企谷八幡は生徒会選挙での依頼にて奉仕部との関係がギクシャクしている中で、心の整理と息抜きが目的で買ったゲーム、ソードアート・オンラインに閉じ込められてしまった。デスゲームとなつた世界で八幡はある2人の少女と出会い、デスゲームを終わらせてやり残した事がある現実世界に帰る為に攻略することを選ぶ。しかし、奉仕部と何人かの総武高校の生徒も巻き込まれていて――――

## 目 次

整合騎士達と捻くれ者のソードアート	1
デスゲームの始まり	8
進む者と止まる者	24
人間の恐さ	38
第1層攻略会議	52
面影は消えず、されどそのものに非ず。	76
現実	93
彼は進んで灰を食い、彼女らは見失う	110
アリアは続き、コーラスへと	126
不穏な影は何処までも続く。	141

## 整合騎士達と捻くれ者のソードアート

パリインツと言うガラスが割れるような音が辺りに響く。その音の正体は剣を振り下ろした少年が出した音である。藍色に光る片手直剣を腰にある鞘に納める。レベルアップのファンファーレが鳴り、少年は空中に手を振つて、振つたことで出てきた電子画面を見て今さつきに倒した敵モブから落ちた戦利品を確認している。

少年は藍色のローブを身につけており、その中も灰色のジャケットに黒緑色のインナー、腰ベルト付きの黒い長ズボンを履いている。今は顔にローブを被つていらない。

そうこの流れでもう分かつたと思うが、ここは普通の現実世界ではない。此処は自分が創り上げたキャラクターを操作して、敵を倒し、クエストを行い、人を集めてギルドを作つてこの世界を攻略していくゲームの世界。しかし、このゲームは通常のMMORPGと違う点がある。大きく分けて2つ。1つ目はこのMMORPGは従来のMMORPGとは違い、画面上のキャラクターを操作するのではなく、自分自身でキャラクターを操作する。つまりはこの世界で**仮想肉体**は自分の半身とも言えるものだ。

これが出来る理由、現実世界での自分自身の身体はベッドで寝ている。そして頭に『ナーヴギア』——機器に脳から送られる五感やその他諸々の電子信号を接続して、電子世界に投影する『フルダイブ』を可能にした物——を被つている。そしてその電子世界内で動かす仮想肉体を作つて送られた五感やその他諸々の電子信号をその身体に投影する。そうして電子世界で自分自身が動くことを可能にしている。

2つ目は——そう俺は改めてこの世界についてのことを考えていると、後ろから声が掛けられた。

「……そろそろ時間ですし、合流したら戻りましょう。割とスムーズにレベリングが出来ましたね」

後ろを向くと、白いローブを身につけた人物がいた。頭にローブを被っていて顔は見えないが、金髪の長いサイドテールが見える。声は落ち着く静かな声の少女だ。腰には金色の鞘に納められた片手直剣を携えている。俺は驚くことなく平然として言う。

「まあ、ここら辺は穴場だしな。割と効率よく稼げて、敵モブも多い。レベリングには持つてこいの所だな」

俺の言葉に驚くような仕草を見せる。顔にローブを被っているので表情は分からぬ。白いローブを身につけてる人物は言った。

「貴方がレベリングに持つてこいだなんて……毒状態にでもなりましたか？ 毒消しポーションならありますけど」

「どんだけだよ……俺もそれくらい言うこともあるわ。お前の中での俺つて一体どうなつてんの？」

かなり失礼な物言いに突っ込みを入れると、白いローブから蒼い宝石のような眼を半目にして覗かせる。その眼は所謂ジト目だ。そして呆れるように言葉を紡ぐ。

「いつもいつも部屋のベッドでだらけて、何事も面倒くさそうにしていると言ふイメージですが？ この前なんて起こしに行つて後5分つて言つたから寝かせてあげてたのに1時間経つても起きてこなかつたでしょ？」

「ぐつ……人間の三大欲求なんだから仕方ないだろ。久しぶりの休暇なんだからよ」

正論で返され、苦し紛れにそう零す。すると溜息を突かれた。

「本当に偶にならそれも仕方ありませんが。貴方の場合はいつもだからです」

良いじやねえか。最前線はしんどいんだし、自分のことを労わる位させてもらえませんかねえ。俺もジト目になつて言い返した。

「お前だつていつも遅くまで迷宮区に俺を付き合わせてんだろうが。それに攻略の時、あのDKBとかALSと衝突するし、抑えんの大変なんだぞ」

胃が痛いし、大半の奴はなんか知らんけど生暖かい目で見てくるんだからな。俺がそう言うと、白いローブから覗かせる顔の頬が赤くなつた。そして捲し立てるように言う。

「それとこれとは話しが別でしょう！それに、貴方だつて割と容赦ないことを言つてるじゃありませんか!!」

「言いがかりをただ正論で返してるだけだ。お前の方がもつと容赦ないと思うんだが」

そんな言い合いをしていると、おーい。と言いながら薄赤色のローブと腰に白い鞘に収まつた片手直剣を身につけた奴がこつちに來た。

「まーた、2人で言い合ひしてゐの？毎回毎回、本当に仲が良いよね♪」

そんなことを言われ、俺は溜息を突いて、白いローブを着た奴はもうじもじしている。頬が更に赤くなつてゐるのが視界の端に見えた。

「……それよりもこの気候めっちゃ暑いのにローブ被つて熱くねえの？」

咳払いをして閑話休題し、この地獄のような暑さの中、未だに頭にローブを被っている2人に言う。

「……私たち以外居ませんし、大丈夫かしら」

「……隠してもしようがないか。結構煩わしかつたしちょうど良いかな」

そう言つて2人は素顔を見せる。白いローブから、金色の長髪に力チューシャ、そして蒼眼の美少女。薄赤いローブからは暗めのブラウン色の髪を後ろで束ねた長髪に、頭にアクセサリーを付け、先程とは対照的な紅色の眼を持つた美少女だ。

「転移結晶は持つてるか？」

2人に確認すると持つてないと被りを振った。俺も転移結晶は持つてないため、歩きになる。そして歩き出した俺たちは他愛も無い会話しながら帰る。

「それにしてもここに閉じ込められてからもう1年も経つたんだね……」

そう呟かれるように言われた言葉には確かに重みを感じた。俺はその言葉に反応する。

「やつとこさ2／5の40層まで来たしな。このまま行けば一年半位かには終わるだろうが、そんな甘く設定されてねえだろうしなあ」

「そうですね。敵モブのアルゴリズムも複雑化してきますから、上手く被害を出さないように立ち回らなければいけません」

俺、否俺を含めた1万人がこの世界に閉じ込められた。『リセツト』が出来ないこの世界は、一度HPを全損すればナーヴギアに脳を焼かれて死ぬ。これが従来のMMORPGと違うもう1つの点。

そしてこのデスゲームをクリアするには今俺たちのいる場所は浮遊城『インクラッド』の上だ。その城の1層から100層までのフロアボスを倒さなければならぬ。

「後どれくらいかかるのかなあ・・・」

「どれだけ掛かつたとしても現実世界に帰りたいです。あつちでやり残した事はまだありますから」

そんな2人のやり取りに俺も続くように言つた。

「さつさと帰つて小町を愛でたいなあ」

「システム」

なんでやッ！この2人は俺の時だけ反応が冷た過ぎる。ついには泣くよ？・・・うん、俺が泣いてもキモいだけだわ。

そんなことを考えながら、帰り道を歩いていると急に後ろからする足音が止んだので怪訝に思いながら振り向くと2人が止まつて何やら考え込んでいた。何してんだ？彼奴等。

「おい、どうした？」

俺が聞くと、2人は何やら思い当たることがあつたのか、納得した  
様な表情をして俺を見る。な、何だ？

「さつきから思つてたけど。私たちのプレイヤーネームを呼んでない  
よね？」

そう言われ、名前を呼ばないようにしているのは何故なのかと2人  
に問い合わせられる。ちょっとずつジリジリと近寄つてくんのやめて  
下さい。つて近い近い近い良い匂いい！

「ち、近いから、離れろ。呼ばない理由は特にな「嘘だ（です）ね」…：  
い、つて腕掴んでくんna！分かった、理由を言うから離れてくれ!!」

早々に降参する。ここでノーと言える日本人でありたかったが、2  
人のA.Tフィールド破りに負けてしまった。俺は溜息を付いて言つ  
た。

「だつてお前等のプレイヤーネームつて名前じやん。ボツチの俺には  
ハードルが高過ぎるんだよ」

此奴等、オンラインなのに本名を登録しているからどつかの閃光様  
と同じで、必然的に名前を呼ぶことになつてしまふ。俺は名前を変え  
ているので問題無い。

「別に問題無いと思うんだけど。ほら、『ヤハト君』呼んで？」

「貴方はどれだけ照れ屋なんですか。『お前』とか言われるのは嫌です  
から呼んでください。ヤハト、早く」

・・・・・、ここは戦略的撤退「そんなことしたらヤハトの黒歴史

をインクラッド全域に広めますよ?」ちくしょう・・・悪魔みたいな所業しようとしやがる。俺はローブ被つて顔を見られないようにして、か細い声で言つた。

「さつさと帰るぞ・・・アリス、イーディス」

そして俺は、顔を見られないようにして走りだす。2人を垣間見ると、とても嬉しそうな顔をしていたのが今日の夜まで離れなかつた。

この物語は本来ならありえない邂逅を果たした少年少女が、この世界——『ソードアート・オンライン』の中で生き、様々な人物達と関わりながら攻略を目指すお話。

## デスゲームの始まり

城廻先輩と一色が持ってきた依頼を終えた後、奉仕部の空気は戻るかと思いきや険悪な空気ではないが、まだ空気が重かつた。分からぬ、雪ノ下のあの言葉を聞いてから俺が奉仕部にいる意義、何をしたのかがわからなくなつた。

「分かるものだと思っていたわ・・・」

あの言葉が頭の中から消えてくれない。一体雪ノ下が何を俺、俺達に望んだのか。俺は部屋の中でベッドに寝そべつて考えていた。あらわす方法が俺にとつては最善だつた。そう、『俺にとつては』。あの後も由比ヶ浜が空気を良くしようと奮闘してくれたが、ほとんどが空回りだつた。前なら俺を罵倒していた雪ノ下だが、今ではそれもなくなつた。

嬉しいことの筈なのに、俺は素直に喜べなかつた。小町にも『理由』を貰つて今まで行動とは別の事をした。雪ノ下と由比ヶ浜に否定された解決方法でなく、誰も不幸にならない手段を取つた。なのに空気は良くなるどころか、更に重くなつた。

「何なんだよ一体・・・はあ・・・」

浮かんだ考えを何度も思考し、自分の中で咀嚼しては否定しを繰り返す。やがて何度も同じ考え方と結論に行き着き、苛立つたため、俺は一度身体を起こした。そして自分の部屋に置いてある大きめなダンボール箱に視線を移した。

ダンボール箱の中を開けると、入つていたのは今年発売された世界で史上初の仮想空間フルダイブ体験型ゲーム「ソードアート・オンライン」のソフトと専用機器のナーヴギアだ。1万人の数量限定で、抽

選で当たつてしまつた物だ。そして今日の土曜がゲームサービスの開始日で、午前12：00から始まる。

「……息抜きにやるかね。今はつて11：55分かよ。準備するか」

俺は急いで必要な手順を踏んでプレイの準備を整えた。キャリブレーション？とか必要か？と疑問に思うものもあつたが気にしなくて良いだろ。そして頭にナーヴギアを被つて、ベッドに横になる。どんなものなのかと俺にしては珍しく昂つた気持ちになつていた。此処に彼奴等がいたら……いや、考へないでおこう。そしてカウントが10秒になつた。

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・

そして俺は静かに呴いた。

## 「リンク・スタート」

目を開けると、広がるのは野原だった。俺は辺りを見回して、自分の身体である設定したアバターを見る。そしてゆっくり動かす。そして感嘆の声を洩らした。

「すげえ・・・」

暫くそうしていたが、とりあえず移動しよう。と決め、走つて進む。完全に現実世界での身体の感覚だ。肌を吹き付ける風も、気温も踏み込む地面の感覚も全てが本物だ。茅場晶彦は凄いと心から思える。そしてふと、止まって右手を横に少しスライドする。するとメニュー画面が出現して《ステータス》などが映った。プレイヤーネームは《Y a h a t o》ドイツ語の8のアハトの『ハト』八幡の別読みであるやハタから『ヤ』を取つて、『ヤハト』と付けた。そして《装備》をクリッ

クして、今の自分の持ち物を確認する。武器は片手剣の初期装備『スマールソード』回復アイテムは初期の回復ポーションが5個か。通貨は0コル。レベルはもちろん1だ。

完全に俺は初心者なので『βテストター』——抽選1000人限定にソードアート・オンラインを体験出来る機会があり、その体験をした人の事——の戦い方や行動を見れたら良いんだが。えつ、普通に聞いたら良いじゃないかって?エリートボッチの俺にリア充がやるような行動が取れるわけないだろ。

そして武器を装備して周りに敵モブがいるかを確認する。とりあえず走つて人がいるところまで行つてコツを盗み見するか。そして敵モブとのエンカウントに気をつけながら移動する。

そうして暫くすると、ある2人組を見つけた。黒髪イケメンアバターに赤髪の陽キャラのアバターがいた。黒髪イケメンが赤髪に戦い方を教えているようだ。相手はイノシシの『フレンジャー・ボア』と言う敵モブだつた。赤髪は動き回るモブに翻弄されているのか、攻撃が全く当たつてない。

「全然攻撃が当たんねえよお、キリト」

「そりゃあそりゃあ、MMOなんだし。カカシじゃないんだからな。クライン、ソードスキルはモーションだよ」

黒髪イケメンのキリトと赤髪陽キャラのクラインとやらの漫才みたいにやり取りを聞いていると、重要な事を聞いた。モーション、溜め状態みたいなもんか。クラインはその言葉を聞いて、モブを落ち着いて見据える。そして敵モブは突進してくるので、剣を構える。そして突進攻撃に合わせるようにキイインと音と色が加わった剣を振るう。その攻撃は敵モブの顔に当たると、敵モブは横に倒れ伏して青いボリ

ゴンエフェクトとなつて発散した。

クラインは成功した事を喜んで、キリトはこのモブがスライムレベルの雑魚だと言うとクラインは落胆していた。当たり前だろ。レベル1で倒せるボスモンスターなんているわけが無い。まあ、知りたかったことは知れたしさつさと別の所に移動しようかね。移動するときにキリトと目が合つた気がするが気の所為だ。うん、気の所為。そして移動していく。

そして移動して、敵モブとエンカウントする。そしてさつきの事を参考に敵モブの攻撃を落ち着いて見据えて回避したら攻撃直後は直るのでその隙にソードスキルを叩き込む。

「ふつ！」

そして攻撃が当たり、HPバーが削られていくのでそれを繰り返す。そして最後の一撃を入れると、敵モブは青いポリゴンエフェクトになつた。回避はしていた為、こちらのHPバーは満タンのままだ。

「こんな感じか。 . . . もうちよいやつて完全にコツを掴むか」

俺らしくない積極的な姿勢に自分自身で驚く。柄にもなく興奮しているみたいだな。そうして敵モブをポップするところに移動していった。

狼型の敵モブの爪での切り裂きを潜り抜けるように回避して、懷に入り込んで片手剣横垂直斬りソードスキル『バーチカル』を放つて倒す。レベルアップのファンファーレが鳴り響く。俺はステータスにステータスを上げるポイントを振り分ける。筋力性と敏捷性などが主で、俺は1・4で敏捷性を優先している。耐久が不安だが敵モブの攻撃が当たらなければ良いので優先して上げる。かなりハイペースでやっていたせいか、5時間くらい経つて、レベルは4まで上がっていた。途中から急所ばかりを狙つて攻撃していくほぼ1撃で仕留めていたからだ。しかしポーションも3個使い、武器もイエローゲージからレッドになりかけている。

「とりあえずコルは稼げたから武器とポーションだけ買つたらログアウトするか……ん？」

ふと、横を見ると、何やら敵モブに囮まれている2人のプレイヤーがいた。何とか捌いているが、ジリ貧になつていっている。といつても俺には関係無いのでそのまま街に向かつて走り出す。どうせログアウトするし、何よりこれはゲームだからやり直しが効くしな。

「……」

そんな思いとは逆に俺の足は止まる。おい、俺には関係ねえんだからほつといた方が良いだろ。安直な正義感で首突っ込んで後悔するつて学んでるだろうが……！俺が首突っ込んで良くなるとも限らないし、身の丈にあつた行動が最善なんだよ。そしてプレイヤーの

1人に敵モブの攻撃が直撃した。そしてゲームとは分かつっていても恐怖してしまつたのか、か細い声で言つた言葉が俺の耳に届いた。

「誰・・・か・・・」

「・・・!!」

俺は走り出した。今の自分が出せる最高速度で敵モブに迫り、片手剣刺突ソードスキル『レイジスパイク』を敵モブに放ち、吹き飛ばして周りにいる敵モブも巻き込んで吹き飛ばす。急な出来事に囮まれていたプレイヤーは茫然となる。戦闘中にジツと突つ立つてたら死ぬぞ。現に未だプレイヤーに狙いを定めた状態の奴が攻撃を加えようとしている。俺は人生で1番声を張つて言う。

「ボーッとすんな！ 攻撃が来てるぞ!!」

俺の声を聞いてハツと我に返つたプレイヤー達は迫り来る攻撃を何とか回避した。俺は1匹1匹確実に急所を突いて一撃で仕留めていく。あと3体か。そして何とか調子を戻したのか2人も冷静に攻撃を加えていく。そしてついに最後の1体を倒した。

「・・・はあ、終わつた」

俺は周りに敵モブが湧いていないことを確認して息を吐く。何度か攻撃が掠つてるのでイエローゲージ寸前まで減っていた。もう働きたくねえな。と思つているとプレイヤーが声をかけてきた。

「あの、わざわざ私たちを助けてくれてありがとうございました」

その声に振り向くと、金色の長髪蒼眼の美少女と暗めのイエローブラウン色の長髪を縛つた紅眼の美少女がいた。集中していて気付か

なかつたが女性アバターだつたのかよ……。金髪の少女は俺に頭を下げるお礼を言つた。紅眼の少女も頭を下げるお礼を言つた。

「貴方のお蔭で死なずにすみました。本当にありがとうございます。何かお礼します」

「いえ……勝手に俺が突っ込んで巻き込まれに行つただけなんで。別に礼はいいです」

「いえ！ゲームとは言え助けてもらつたのにお礼をしないなんてことは出来ません。何かお礼をさせて下さい」

俺は別に恩を売るために助けたわけではないので遠慮したのだが金髪少女は眞面目なのか引き下がらない。紅眼の少女も意見を譲る様子は見せない。俺は立ち去ろうと動くが、さりげなく回り込まれる。俺は頭を悩ましたが、ログアウトすれば良いや。と思い、メニュー画面を開いてログアウトボタンを探す。しかし――――――――――――――――――

「……ログアウトボタンがない？」

思わず呟くと、2人も俺の言葉でメニュー画面を開いて見てみる。やがて驚いた様子で言つた。

「本当ですね」

「何で……？」

サービス初日にこんなバグとか運営は何を考えてんだ？こんな致命的なバグ残したまま売つたら大問題だろ。俺はそう考えていると、急に鐘の音が辺りに響く。

「何だ？」

俺はすっかり夕焼け色に染まつた草原を見渡して警戒する。2人も周りを気にしている。すると急に青い光に身体が包まれた。俺だけじやなくこの場にいる全員が。

「うおっ！？」

「「えっ!? な、何!?」」

そして青い光に俺達は包まれ、この場から消えた。

青い光が消えて思わず瞑つてしまつていた目を開いた。目に入ってきたのは街の広場だつた。辺りを見渡すと大量の人人がいた。多分SAOサーバー全員を集めている。ふと、隣から声がした。

「こんな数のプレイヤーを集めて一体何をする気なのかしら?」

「運営側が全員をこの場でログアウトさせるのではないですか?」

さつきの2人も一緒に転移してきたようだつた。俺は少し驚きながらも顔には出さずに周りを観察する。この場にいる全員が混乱している。俺はある一つの集団見つけて瞠目した。

運営側の説明があるとほぼ全員が信じている。しかし10分経つても説明どころかアナウンスすらなく、プレイヤー達は苛立ちと不安の声を挙げ始める。俺は直感的に嫌な予感を感じ始めた時、突如空が紅く染まつた。

「な、何だ!?

「何これ!?

そんなプレイヤー達の声が響く。そして広場の中央のオブジェクトから巨大なフードットケープを着た人型のNPCが現れた。運営側の奴か。プレイヤー達は戸惑いながらもやつと説明があると安堵の混ざつた声を洩らした。しかし、やつとログアウト出来ると思つていたプレイヤー達の心を絶望の淵に叩き落としてくるとは思わずに。

「S A O プレイヤー諸君。私の世界へようこそ」

渋い男性の声だつた。この異常事態に場違いな程の落ち着き、そして機械を思わせる抑揚のない声に思わず背筋がぞくりとした。そして続けて言つた。

「私の名前は茅場晶彦。現在、この世界をコントロール出来る唯一の人間だ」

茅場晶彦。その名前を聞いた瞬間、プレイヤーたちに再び動搖が走つたが、当の本人は意に介す様子もなく話を続ける。

「プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気づいていると思う。しかしこれはゲームの不具合ではない。繰り返す。これはゲームの不具合ではなく、ソードアートオンライン本来の仕様である。……諸君はこのゲームから自発的にログアウトすることは出来ない」

何でもないことのように語る茅場晶彦。淡々としたその口調に、俺はかえつて茅場晶彦の狂気を感じていた。

「また、外部からのナーヴギアの停止、または解除による強制ログアウトもありえない。もしそれが試みられた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる」

雰囲気に呑まれ静まり返っていたプレイヤーたちが、話が続くにつれてざわついてくる。俺は理性を総動員して冷静に状況を分析しながら耳を傾ける。

「しかし残念ながら、警告を無視してナーヴギアの解除を試みた例が少なからず存在し、既に213名のプレイヤーがこのソードアートオンラインの世界から、そして現実世界からも退場している」

そう言つて、茅場は空中に幾つかのウインドウを出現させた。そこにはナーヴギアによる死亡者のニュース映像が流れている。両手で顔を覆つて泣き崩れる少女と、それを支えながらも涙を流す母親が映つていた。茅場の発言が単なる狂言ではないことを否が応でも理解させられてしまう。三つ編みを一本に結び纏めた金髪外国人の少

女もいた。その少女も泣き崩れている。そんな映像に横から声が聞こえた。

「セルカ……！」

そしてその横に映った人物が涙を流しているのを見て俺は目を見開く。茅場は続けて言つた。

「だが諸君が、向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要はない。様々なメディアが繰り返しこの事実を報道したことを鑑み、これ以上ナーヴギアの強制解除による被害者が出る可能性は低くなつたと言つていいだろう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま2時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他準じる施設へと搬送され、厳重な介護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心してゲーム攻略に専念してほしい」

ざわめきはさらに大きくなり、多くのプレイヤーが茅場に対しても抗議するべく喚きたてていた。しかし茅場がそれを取り合ははずもなく、そいつは悠然と語り続ける。

「諸君がこの世界から解放される方法はただ1つ。この始まりの街の存在するインクラッド第1層から第100層までの迷宮を踏破し、その頂点に存在するボスを撃破してこのゲームをクリアすることだけだ」

そんな言葉にプレイヤーは、出来る訳がないだろ！と口々に言う。しかし淡々と次の言葉を言う。

「最後にプレイヤー諸君にプレゼントを渡す。アイテムストレージに入っているので出してみると良い」

困惑しながら俺を含めた全員がアイテムストレージに入っているアイテム《手鏡》の欄を確認して押した。そして手鏡を手に持つと、鏡が光り出し、身体を包んだ。

そして光りが止んで、眩しさで瞑った目を開く。そして手鏡に自分の顔が映つた。そして驚きの声が周りから上がり、俺も、そしてその隣からも眩きが洩れる。

「…………現実世界の俺の顔になってるじゃねえか」

「アバターの顔じゃなくなってる……!?」

「姿を戻して何をするつもりなの……!?」

いつも朝見る目の濁りとアホ毛が特徴的な顔に戻されていた。人もこつちを見たようで目を見開いて驚きの声を挙げた。  
2

「貴方、目が濁つて（ますね）るわね!」

「おい、最初に言う言葉がそれか……よ……」

隣の少女達を見ると、俺は思わず目を見開く。アバターの顔パーツは割と少ない為に似通つてしまふので最初は驚かなかつたが、アバターの顔より美人つて何だよ。雪ノ下以上かも知れない。髪色と瞳の色は同じだが、髪型が少し違つていた。金髪少女は長髪に白いカチューシャ、両サイドの髪は三つ編みになつている。紅眼の少女はスカーフで髪を結んでいる。体型もさつきのアバターよりも抜群なプロポーションになつていて。

「やっぱり全員が元の姿に戻されているようね 《アリス》」

「ええ、そうみたいですね《イーデイス》」

そうお互いを確認し合う2人。金髪蒼眼はアリス、暗めのイエロー  
ブラウン色の髪の紅眼はイーデイスと言う名前のようなだ。見た目か  
らして2人とも外国人か？凄い流暢な日本語を話しているが。そして  
茅場がまた話し始める。

「諸君らは今、何故、と思つてゐるだろう。何故茅場晶彦はこのよう  
ことをするのか、と」

俺はその言葉に神経を集中させた。この大規模なテロ行為を交渉  
して止める余地があるのではないかと。しかし、そんな希望的観測は  
次の言葉によつて粉々になる。

「しかし、既に私に目的は存在しない。私が焦がれていたのは、この状  
況、この世界、この瞬間を作り上げること。たつた今、私の目的は達  
成せしめられた……」

満足げにそう語つた茅場はゆっくりと広場を一望する。

「それでは長くなつたが、これでソードアート・オンライン正式サービ  
スのチユートリアルを終了とする。プレイヤー諸君、健闘を祈る」

言い終えると、巨大なアバターは耳障りなノイズを立てながら崩れ  
去つていつた。同時に空を覆つていた紅い表示も一瞬にしてなくな  
り、霞みがかつた夕暮れの空が視界に戻つてくる。しかし不気味な演  
出が消え去つても、広場を支配する言い知れぬ不安だけは決して消え  
ることはなかつた。

泣き崩れる人、怒鳴り散らす人、座り込んで動かない人と様々だつ  
た。俺もそうなつてもおかしくなかつただろう。現に足が震えてい

る。しかしこの世界<sup>デスゲーム</sup>に閉じこめられたと知った瞬間、向こうの世界にいる両親と小町の姿が思い浮かんだ。そして恩師である平塚先生の姿。そして映像に映つていた雪ノ下さんが。

そして先ほど見つけた同級生の戸塚や川崎、材木座、先輩である城廻先輩にあざとい後輩の一色、葉山グループと奉仕部の雪ノ下と由比ヶ浜が。再び見てみると葉山は皆を宥めているが、女性陣は泣いている。特に由比ヶ浜が声を挙げて泣いている。その光景に思わず手を固く握り締める。

家族の元へ帰らなければ、彼奴等を生き残らせて無事に帰さなければならない。俺は静かに決意して足の震えを止めた。彼奴等と俺の現状を考えれば関わる訳にはいかない。戸塚に会えないのは寂しいが。

ふと、周りを見るところの場を離れていく人が何人かいた。その中に俺がコツを盗み見した奴の装備を着た奴がいた。装備からしてキリトと言う奴だ。クライインと言う奴がないということは別れたようだ。彼奴は間違いなくBテストスターだろう。彼奴を追えば生き残れる可能性がぐんと上がる。俺は後を追いかけようとした時、隣から声が掛かった。

「待つて下さい」

「……何だ？」

「私達も貴方に付いて行つていいかしら？ 足手まといにはならないから」

そんな言葉に俺は静かに言う。見捨てる選択もあつたが、そんな事をすれば小町に、家族に、奉仕部の彼奴等にも顔向け出来ないからな。

「・・・好きにすれば良い。ただ、面倒は見ないからな」

「分かっただわ。それと、出来ればプレイヤーネームを教えて欲しいんだけど良い?」

「・・・『ヤハト』」

「ありがとうございます。よろしくヤハト君」

「よろしくお願ひします。ヤハト」

そんな言葉に軽く頷き、俺は2人とキリトの後を追いに広場を出た。未だ混乱している彼奴等の事を尻目に。

## 進む者と止まる者

私は一体何がしたかったのだろう。修学旅行から帰つてきてから、私は、私達はどうしていけば良いのか分からなくなつた。

『貴女のやり方、嫌いだわ。うまく説明出来なくともどかしいのだけれど、とても嫌い』

そう言つて私はその場から去つていった。それからと言うもの、私は彼、比企谷君のやり方を拒絶してから彼とどう接したらいいのかが分からず、由比ヶ浜さんと気まずげに話していた。そしてある日、一色さんと城廻先輩が依頼に来た。その内容は『生徒会長に無理矢理されそうなので如何にかして回避させて欲しい』というものだつた。

私は、奉仕部の空気を変える事と、彼が文化祭と修学旅行での嘘告白で蔓延している悪い噂と評価を変える為に生徒会長になろうと決心した。姉さんがやつていなことをやる為でもあるのだけれど。

そして由比ヶ浜さんもどう思つたのかは分からないが、生徒会長になる。と言つた。恐らく、私達との繋がりを消さない為なのだろう。彼女はとても優しい。いつも私達を案じてくれる。最初の頃は欠点だと思い、集団の空気に流される子だと断じていたが、少しずつ接していくうちに私達にはない美点だとも思い始めた。奉仕部の空気を元に戻す為に私達は依頼の解決へ動き始めた。

しかし、またもや比企谷君は動いた。動いてしまつた。彼は最初こそ、一色さんを応援演説で落とすという自己犠牲に思える方法を提示して私達は却下したのだが、どう言う訳か一色さんを説得してしまつて生徒会長にさせてしまつた。

どうして?どうして私達には何もさせてくれないの?比企谷君、私

達は貴方にこれ以上――――――――――あんなり方をしなくて  
も良いと証明したかつただけなのに。

依頼を受けたのは私なのに、先に解決されてしまったのが悔しかつた。また1人で抱え込ませ解決させてしまったことが悲しかつた。そして何よりも彼に私の気持ちが通じなかつたことが寂しかつた。

依頼が終わつた後、彼が部室に来たときに思わず言つてしまつた。

『分かつてくれるものだと思つていたわ・・・』

私は失望と落胆の思いを抱きながらそう零した。その言葉を聞いた時の彼の顔は表情こそ変化はなかつたが、眼の奥に見えるものが揺れていた。困惑と焦燥だつたと思う。私は由比ヶ浜さんと違つて感情に疎いから定かではないけれど。

そして奉仕部の空気は変わらないまま空虚な、まるで自分の心に穴が空いたような虚無感を抱いたまま日々を過ごしていた時、休日に平塚先生から学校に呼び出された。問題行為を起こした訳でもないのでは呼び出される理由は全く想像がつかなかつた。

呼び出されたのは何故か保健室だつた。そして扉をノックして開けると、私は目の前の光景に驚きが隠せなかつた。

「由比ヶ浜さんに姉さん、戸塚君、財津君に川崎さん、城廻先輩、一色さん、それに葉山君達まで・・・・一体何が？」

私はその場にいる人達の名前を呟き、そして呼び出した張本人である平塚先生に視線を向けて聞いた。

「ああ、今から説明する。君達に来てもらつた理由はある依頼がある

からだ。陽乃」

依頼・・・？奉仕部部員でもない人まで集めて、一体何をするというの？それに姉さんが居るのも気になるわね。そして・・・彼だけが呼び出されていないことも。そして姉さんは軽い返事をして私達へ説明し始めた。

「はーい、今から説明するんだけど、先ずこれを見て欲しいかな」

姉さんは後ろの閉まつた状態のカーテンを開けていく。するとそこにはベッドの上に置かれているヘルメットの様な物があった。その機械に見覚えがあつたため、私達は目を見開いて言つた。

「マジ!? これはつべーしょつ！ 葉山くーん」

「ああ、これは驚きだな・・・」

「姉さん、これつて・・・」

「そう、皆も知っている通り、これは次世代型フルダイブ体験機器『ナーヴギア』だよ」

姉さんが言うには『ナーヴギア』の開発プロジェクトの資金を雪ノ下家が少ない額を支援したのでそのお礼として『ナーヴギア』とそのソフトである『ソードアート・オンライン』を大量に送つてきただし。雪ノ下家を繁栄させる為に支援しただけだと思うのだけれど。私はこのお礼の量が些か多過ぎるようと思えた。

「で、皆にはこのナーヴギアでソードアート・オンラインを遊んで体験して貰いたいの」

「もちろんこれは依頼だ。内申点などの報酬もある」

姉さんと平塚先生の言葉に集められた人達は驚いた。もちろん私も含めて。それはそうだ、ゲームで遊べる上に内申点まで加算されるなんて、彼がいたら何か裏があるのでないかと間違なく疑うだろう。

「・・・そう言えばヒツキーには伝えてないんですか？」

私が彼の事を考えていると丁度、由比ヶ浜さんが聞いた。平塚先生は答える。

「彼にも連絡は入れたが、見ていないだろうな。千葉村の時は小町君に頼んで無理矢理連れて来てもらつたが、こんな方法は2度は使えないし、何より教師として使つてはならない方法だからな。私も反省している」

その言葉に私は不思議と納得した。彼が休日を返上してこの学校に来るとは思えない。しかしこの時平塚先生がその言葉に含んでいる本当の意味を姉さん以外の全員が分かつていなかつた。

そうして私達は『ソードアート・オンライン』をやることに同意した。一応学校側で私達と判断しやすくする為に名前でプレイして欲しいと言われた。

普段の私ならゲームはしないが、心の整理と息抜きには丁度良いだろうと思つたから参加した。今後の私達の事、そしてこの場にいないう比企谷君の事を考えていた私には丁度良かつたかもしれない。準備を済ませて保健室のベッドに皆が横たわつた時にはサービス開始前の10秒を切つた。

1  
0  
·  
·  
·

9  
·  
·  
·  
·

8  
·  
·  
·  
·

7  
·  
·  
·  
·

6  
·  
·  
·  
·

5  
·  
·  
·  
·

4  
·  
·  
·  
·

3  
·  
·  
·  
·

2  
·  
·  
·  
·

1  
·  
·  
·  
·

そして私達はゲームの世界に飛び込んだ。

### 『リンク・スタート』

目を開くと私達は街にいた。私は目の前に映る光景に思わず声を洩らしていた。此処まで現実世界と相違無いと思わせる程の完成度の物が作れる人がいるとは。そして周りを見ると由比ヶ浜さんや他の人も揃っていた。そしてどんどん他のサーバーもログインして来て人が増えてきた。

「凄いね。本当の現実世界みたいだねゆきのん・・・！」

「ええ、本当に・・・！」

「ふつはつはつはつはー！遂に我の眠らせていた力を解放する時が来たようだなっ！」

「うるさい・・・」

「あはは・・・でもテンションが高くなるのも仕方ないと思うな。だって本当にゲームの世界に飛び込んでみたいたのもん」

三者三様に感心の声を洩らしていると葉山君が私達に言った。

「じゃあ皆、一旦別れて各自で自由行動を取ろう。そして5時になつたらこここの広場に集まろう」

私達はその言葉に頷き、それぞれ行きたい所に目指した。私は由比ヶ浜さんと一緒に街を巡り始めた。

そして5時間後、由比ヶ浜さんと色々見て回っていると、私はある異変に気付いた。そのある異変とは街にS A Oのサーバーが集まり始めたことだつた。そして葉山君達もこの異変に気付いたのか私達の所に合流した。何やら葉山君は焦つている様に見えた為に私は葉山君に聞く。

「葉山君、この騒ぎは一体……？」

「雪ノ下さん、落ち着いて聞いて欲しい……まずメニュー画面を開いてくれ」

その言葉に私は訝しみながらも従い、メニュー画面を開く。1番下の画面を見てくれ。と言われた為に下に指をスライドさせていく。するどある物が無い事に気が付き、思わず声を洩らした。

「えっ……？何故、ログアウトボタンが無いの？」

ログアウトボタンが無ければこの世界から出ることが出来ないということだ。葉山君はやはりと予想していたような声を出した。

「やっぱり雪ノ下さんも無いか。……今日発売されて世界中で期待されているゲームのサービス開始初日からこんな欠陥を残したまま

発売なんてしたら大スキヤンダルだ。いい加減運営側の説明がある  
てもおかしく無いんだけど」

広場に集まつた私達は混乱しながらも運営側の説明が来るのを待つていた。そしてしばらく待つていると急に空が紅く染まって巨大なN P Cが現れた。運営側のものなのだろうか。深紅のフードツトケープで表情が伺う事は出来ない。多くの人が混乱しながらも何やら説明があると思つていてるようで安堵している様子だつたが、私は嫌な予感が頭の中から離れなかつた。

そしてその予感は的中することになる。まず言われたのは、ログアウトボタンが無い事はこのゲームの本来の仕様だと言う事。外部からの情報は入つてこない事。そしてアバターのH Pが0になり、アバターが消滅すると、現実世界でベッドに横たわつている私達の身体もナーヴギアが致死量のマイクロ波を脳に放出して破壊――――つまり、生命活動を停止されるということ。

そしてフードツトケープを着た巨大なN P C、茅場晶彦は最後に『手鏡』というアイテムを配布して私達はその鏡で元の世界の身体に戻された。と言つてもかなりアバターを似せて作つたのでそこまで変化は感じなかつたのだけれど。

「私達、帰れないの・・・？」

やがて理解が追いついたのか、由比ヶ浜さんは呆然とした様子で呴く。そして、私の顔を見て痛々しく、今にも泣き出しそうな顔で聞いてくる。私は目を伏せてしまう。

「こんなのは、夢だよ！本当はまだ私達は家で眠つてるんだ」

「結衣っ・・・」

「そして起きたら明日から学校で皆いつも通りに登校して、授業を受けて、休み時間を過ぎて、放課後に部活に――――――」

「由比ヶ浜さん！」

私は見ていられなくなつてしまつて、抱きしめて由比ヶ浜さんに呼び掛ける。そして、由比ヶ浜さんはまるで風船が破裂したように感情を爆発させた。

「こんなのがって……こんなのがってないよお……何で私達がこんな目に遭うの……うう、わああああああああああああああ……」

そして泣き崩れた。私も含めた女性陣は泣いてしまう。男性陣は俯いて拳を握り締めたり、天を仰いだり、ぶつけようの無い怒りを建造物に手を殴りつけたりした。

さつきの映像に姉さんと平塚先生も映つていた。あの姉さんも顔を手に覆つて泣いていた。平塚先生も拳を握り締めて泣いていた。

そして思い浮かんだのは関係性に溝を深めたままの彼――――比企谷君の顔だつた。もう、あの濁つた目とアホ毛のある顔を見ることも、あの言い合いみたいな会話をすることも、紅茶を飲んでもらうことも、そして、私の想いを伝えることも出来なくなつた。

こんな事になるなら、私は弱々しく夕焼けに染まつた空を見上げて呟いた。まるで自らの行いを懺悔するように。

「伝えておくべきだつたつ……！」

自分達の事で一杯一杯だつた私達は氣づくことは出来なかつた。

この騒動に紛れて広場から離れていく4人のプレイヤーに。

広場からでた俺達は前方30メートルを走っている少年——キリトを追っていた。幸いこちらから攻撃をしない限り、敵モブは襲いかかってはこないので見失うことはない。俺は気付かれないように注意しながら暫く走っていると、金髪少女のアリスが聞いてきた。

「如何して彼に声を掛けずに追っているのですか？」

「……あ、それはそうか。別に声を掛けても良いじやん。とアリスの質問に俺は気付いた。そして間を入れず続けてイーデイスが言つた。

「……私達がやつてる事つてストーキングなんじやない？」

そう言われた時、急に前を疾走していたキリトが止まり、此方を振り向くことなく言つた。

「いつまで追つてくるんだ？気付かれてないと思つてゐるみたいだけど、《隠蔽》スキルを使ってないみたいだから《索敵》スキルを使って直ぐ看破出来たが」

チツ、悪手だつたか。声をかけとくんだつたな。俺は慎重に言葉を選んで敵意が無い事と、自分達の目的について話した。

「・・・ストーキングのような真似をして済まん。俺達はニュービーでな、広場の騒動に紛れて走つていつたあんたについて行けば情報が得られると思つたんだ」

その言葉を聞いて此方を向いたキリトは俺達を見て驚いた。キリトは高校生にしては幼げな童顔だつた。背丈も成長期の段階か？中学生か。

「あんたはあの時の・・・それに一緒について来てたのは女の子だつたのか」

「ああ、申し訳ないが、ついて行つてもいいか？もちろんお前の邪魔はしない」

俺は聞くと、キリトは事情を知つて安心したのか心良く返事をくれた。キリトからあの葉山みたいなザ・ゾーンを感じる。しかし、初対面でついて来て良いつて言うつて此奴はお人好しだな。俺だつたら捲いて逃げるまである。取り敢えず自己紹介を済ませた俺達はそのまま走つて目的地に向かつている。

俺はこれから向かう場所に武器屋や回復アイテムが売つてゐる店はあるのかを聞いた。ぶつちやけもう武器を変えないとヤバい。耐久値がレッドゲージの数ドットくらいしかない。

「今向かってる場所に武器屋つてあるか？」

「ああ、それにしても武器屋を探しているつてことは耐久値が無いのか？」

「ん、ずっとレベリングしてたしな」

そう言うと、キリトにレベルを聞かれたので4だということを言うと驚かれた。キリトが言うには現時点ではテスターでも5人といないうだろうと言われた。キリトもレベル4で、アリスとイーディスはレベル3だつた。

そして目的地『ホルンカ』に着いた。俺は武器屋で新しい『スマールソード』と回復薬を限界まで買った。それを済ませると何とキリトが宿を取ってくれた。しかも人数分。此奴、俺と同じボツチみたいな雰囲気出してるのにそんな気遣いも出来るなんて……やっぱ此奴リア充側では？と俺は思つた。俺はコルの表示を見てキリトに払おうとする。

「……宿代、幾らだつたんだ？」

「良いよこれくらい。この程度なら直ぐに稼げるからさ」

「いや、払わせてくれ。俺は養われる氣はあるが、施しを受ける氣はない」

貸しを作つたまま後で面倒な事になりそうだしな。するとアリストとイーディスが呆れたような表情で言つた。

「一緒ではないですか？というか理由が格好悪いですよ」

「普通、『他人にそこまでしてもらう理由はないから』とかなんじやないかな？」

うつせ、そんなリア充の出来る気遣いをボッチの俺に求めんな。そんなこと出来てたら友達の1人は出来てるわ。そう思いつつ、俺は2人に言つた。

「……それは置いといて、お前らはフリー テッド ケープは買ったか？」

俺の言葉に對して2人は怪訝そうな顔をしていたが、キリトは、ああ。と察した様な声を洩らした。俺は説明する。

「……いいか？この世界で女性は少ないんだよ。こういうゲームは興味が無い人も多いからな。ただでさえ少ないと女子高生は更に希少なんだよ。んで変にはつちやけちやつた男にお前らみたいな美少女は声を掛けられやすいし、最悪の場合痴漢とかもされるかもしれない。だから身に付けといた方が……つて、どうした？」

説明している途中で急に2人が顔を赤らめながら俯き氣味になつたので不思議に思つて聞くと、2人は何も言わず更に顔を赤らめ、キリトは俺を呆れた顔を向けてくる。

「……何だよ？」

「無意識なのか……」

顔を俯かせている2人を頭を捻りながら見ていると、キリトが咳払いした。

「んんっ！今からこの層で手に入る最強の武器のクエストがあるから

それに挑むけど、どうする？」

此奴、その情報を躊躇いなく開示出来るつて本当にお人好しだな。俺は改めて戦慄して、行く。と答えた。2人も落ち着いたのか元の状態に戻つて頷いた。そしてキリトは続けて言つた。

「武器を手に入れる為に『リトルネペント』って言う敵から1%程度の確率で出現する『花付きリトルネペント』の胚珠が必要なんだが、そこで注意して欲しい事がある。頭に実が付いたリトルネペントの実を壊すと敵モブが大量に出現するから実は絶対に破壊しないでくれ。それと、このクエストで『スイッチ』と『POTローテ』の練習もするからな。じゃあ行こう！」

その言葉に俺達は頷き、クエストに挑む。キリトはこの世界の希望になるかも知れないと俺らしくないことを思いながら。

## 人間の恐さ

クエストを受けるにあたつて俺達は役割を決めていた。俺とキリト、アリス、イーデイスの4人なので男組と女組で別れて戦闘する事になる。キリトが言うには基本的には乱戦では無く、スイッチ——パーティで戦闘する時、プレイヤーがソードスキルで硬直した場合に他のプレイヤーが硬直時の隙を補つて攻撃すること——を活用してヒットアンドアウエイの戦法が良いらしい。

俺はそこまでの話を聞いてキリトに言つた。

「パーティを組まないといけないのか？」

「いや、パーティを組む組まないは自由なんだけど、パーティを組むと自分が敵を倒さなくとも他のプレイヤーが倒してくれたら経験値が入つてくるんだ。組んだ人の数の分は分割されるんだがな」

何それめっちゃサボれるじゃん。動かずして経験値が入つてくれるつて最高じゃね？この世界は実は理想を叶えてくれているのは……と思つていると俺の心を読んだかのようにキリトが言つた。

「言つておくがサボるともらえる経験値は下がるからな。敵モブに与えたダメージが大きいほど経験値も多くなるし」

全然理想的ではなかつたわ。戦つた方が良いな、うん。戦うのでそんなどまないでください。

そして2人ずつ、俺とキリト、アリスとイーデイスで組むことになつた。クエストがある建物に入るとN P Cの女性が暗い顔で立つてゐる。そして声をかけられた。キリトが話しを聞くと頭部に表示されている？が！に変わつた。

話としては女性には小さな子供がいて、病気でその子は動くことが出来ず、市販の薬も効果を示さない為、森に生息している【リトルネペントの胚珠】を薬にして飲ませたら治るのでとつて来て欲しいとのこと。そして取つてくれた報酬がキリトから聞いたのだが片手直剣の【アニールブレード】らしい。全員で受けることになり、クエストが始まる。

森に移動する間、『スイッチ』と『POTローテ』の実践をやり、森に着いた。固まつて戦うとフレンドリーファイヤが起こる可能性がある為に少し距離を置いて戦うことになった。

リトルネペントは範囲攻撃を持つので注意が必要らしい。薦をムチの要領で攻撃してくるので、搔い潜つて交わしながら攻撃を加えて行く。

俺はキリトの方に視線を移す。キリトは見た限りではかなりのSTR型のようで一撃で半分以上を削っている。普通なら極振りはリスクが大きい。それでもキリトは危なげなく戦えている。極振りのステータスでも戦っている理由は恐ろしいまでの反射神経だ。多対1の状況で戦っているが全ての殆ど攻撃を受けていない。俺は速さ極振りなので躲せているのだが。

「ハツ！」

「セイツ！」

アリスとイーディスは絶妙なコンビネーションで敵モブを着実に狩つていている。アリスがパワー、イーディスがスピードのようではバランスが取れている。

俺は2体のリトルネペントの鞭攻撃を躱して擦れ違いざまに攻撃を加えて行く。基本的にはソードスキルは使わない。硬直が怖いからだ。そしてクエストを受けてからかなりの時間が経つた。もう100以上は狩っているのだが、まだ花付きが出ない。レベルも6になつてもうちよつとで7に差し掛かつた時、あるプレイヤーが来た。

「僕も入つて良いかい？」

「良いぞ！独占しているつもりは無いしな！但し、実付きのリトルネペントの実の部分に攻撃を加えないでくれ！」

話しかけてきたのでキリトが攻撃を加えながら返事をする。戦つての最中で喋ること出来るって凄えな。そしてそのプレイヤーは丁度アリス達の近くで戦い始めた。しかし、なんだか嫌な予感がする。今まで自分が浴びてきた惡意の経験が僅かに頭の中で訴えかけてきたからだ。俺は鞭の攻撃を躱し、剣を振りぬいてリトルネペントを倒したところで一度キリトの方へ行く。

「おい、キリト。あんな簡単に許可してもいいのか？」

俺の言葉にキリトは訝しげに言つた。

「良いと思うぞ？別に独占したいわけじゃないし。それにそんなことをしたらフェアじゃないだろ」

お人好しが過ぎる。少しは疑いにかかる方が良いだろうに。俺は思つた事を口にする。

「・・・少しは疑つた方がいいぞ。もしも妨害目的で罠を仕掛けたり、トチ狂つた奴が殺そうとしてくるかも知れないんだから」

大袈裟に言つたが、この世界がデスゲームと思つていない奴が悪い  
だけでプレイヤーを攻撃するかもしれない。もしくは愉しむ為に  
ヒールの役を演じて他のプレイヤーを殺そうとするサイコパスがい  
る可能性がある。此処では現実の法律が適応されないのでそういう  
ことする奴が出てくる筈だ。1万人もいるんだからな。俺の言葉に  
キリトは緊張した面持ちにはなつたが何処か疑つているのか否定し  
てきた。

「妨害目的はあるかもしれないが、流石に殺人は……」

そう言うキリトから件のプレイヤーを見る。すると、そいつの近く  
に実付きのリトルネペンントが出現する。そのプレイヤーは実が付い  
てないリトルネペンントを倒した後、実付きのリトルネペンントを倒そ  
と斬りかかった。しかし攻撃しようとした部分は実が付いていると  
ころだ。俺は走り出す。キリトも気がついたのか声を張り上げて止  
めようとする。

「おい！止める――――――

その静止は虚しく届かず、俺もタゲを取つていたリトルネペンントに  
妨害されて止められない。クソッタレツ、こんな時に……！破裂し  
た実からガスが噴射される。そのガスは周りに充満すると、大量の敵  
モブが湧き始めた。

「不味い……30以上はいやがる」

俺はソードスキル【ホリゾンタル】を放つ。そして敵モブを蹴散ら  
す。実を破ったプレイヤーは逃げた様で此処には既に居なかつた。  
チツ、最初からそのつもりだつたか。ガスの効果は自動タゲ取り効果  
もあるのか不幸にも近い位置にいるアリスとイーデイスにタゲが集  
中してしまつたようだ。

「クツ！」

「アリス！く、邪魔よ！」

右からの薦の攻撃を身体を逸らして避けるも後ろからの攻撃に当たり、吹き飛ばされるアリス。イーディスは助けに向かおうとするが敵モブに阻まれて助けにいけない。俺の身体は弾かれるようになりスの方へ全速力で向かい出す。進行方向のリトルネペントが入ってきた。左から迫る攻撃を身体を前傾姿勢に低くして躲し、「レイジスピーカー」を放つ。ソードスキルの硬直があるが、初期のソードスキルなので1秒もない。吹き飛ばしたリトルネペントはポリゴン化する。俺はそれには目もくれずにアリスの方へ走る。アリスの所には4体程のリトルネペントがいた。

「アリス！しゃがめ！」

アリスは俺の言葉に従い、しゃがむので俺はリトルネペントの背後からレイジスピーカーを放つて他の奴も巻き込み、吹き飛ばして人1人が通れる隙間が出来たのでアリスの所に入り込む。アリスの隣に立つて言つた。

「ポーションを飲め。体勢を立て直すぞ」

鞭の攻撃を剣で流しながら会話する。アリスは直ぐさまエローゲージに入ったHPを回復する為にポーションを飲む。

「分かつてます。それで、どうしますかこの状況」

「取り敢えず何体か倒して、隙が出来たらこつからダッシュで逃げるぞ。必要最低限の攻撃、範囲攻撃とかノックバックの攻撃は回避に徹

しろ」

「分かりました。ヤハトは攪乱をお願いします。私が攻撃を加えるのでで」

俺は頷いて、リトルネペント達が殺到して来るので俺はタゲ取りの為に攻撃を加える。パチカルを放ち、ある程度のタゲを取る。左右方向からの攻撃を俺は跳んで躰しながら攻撃を加えていく。

アリスはパワー型なので2、3回ソードスキルを打ち込んで敵を削っていく。レベルは7に上がった為にある程度の攻撃なら受けても良いので余裕はある。そして俺もゲージを途中まで削つたりトルネペント達を倒す。しかし、タゲを取っていくがやはり攻撃力が足らない所為で時間がかかる。

鞭の攻撃を剣で受け流して、その隙に2連撃ソードスキル【スネークバイト】を放ち、アリスに声を張り上げて言つた。

「アリス、スイッチだ！」

「了解！ ハアアツ！」

俺はアリスと入れ替えるように突撃してソードスキル【ホリゾンタル・アーク】を放つ。そして一気に残りのHPを削りきつた。俺はその鮮やかさに魅入る。

そして、周りにいるリトルネペントは倒し終えてある程度活路が開けたのでイーディスとキリトと合流する。

「アリス、ヤハト、無事？」

「ええ、ある程度の攻撃は受けましたが大丈夫です」

「ああ、お前らも無事みたいだな」

「無事で良かった。取り敢えずホルン力に帰ろう」

そしてダッシュでこの森を抜ける。森を抜けるとフィールドを移つたからか敵モブは来ない。そこは良心的な設定だつたようだ。俺達は一息を吐いた後、アリスがポツリと言った。

「あのプレイヤーは一体何のつもりだつたのでしょうか・・・」

「さあな。だけど、キリトの言葉を無視して実を攻撃したんだ。しかも最初に実の部分を攻撃したつてことは――――」

「私達は狙われたつてことね」

イーディスの言葉に俺は頷く。キリトは申し訳なさそうに頭を下げて言つた。

「・・・皆、済まない。俺がちゃんとした判断を下していれば」

「・・・これからは初対面の奴には疑つていけよ。こんなことにもなるんだしな」

アリスとイーディスは俺の言葉に頷く。キリトは頭を上げ、ありがとう。と言つた。そしてイーディスは呟く。

「でも、どうして私達を狙つてきたのかな?」

「・・・推測なんだが、あのプレイヤーは最初からそのつもりでやつ

た気がする。多分デスゲームになつた事で治外法権になつたこの世界で抑えてきたものが外れたんだろ。狙われたのは偶然だな」

ヒーローが好きな奴のように、悪役が好きな奴もいる。ヒールを演じて注目を浴びたいのかもしれない。事件だつて目立ちたかつたら起こしたつて理由を言う奴もいるしな。

「何も生まないのにこんなことをするなんて理解出来ません」

アリスは怒気を隠さずに言う。イーデイスも頷く。キリトは考え込んだ様子を見せた後にこう言つた。

「少なくとも、この世界では敵はモンスターだけじゃないって事が。攻略に支障が無いように早めに対策を講じられたらいいんだが」

「……その話は追々だな。それよりも花付きのリトルネペントは狩れたか？」

俺はクエストの事に話を移す。アイテム欄を確認する。すると「リトルネペントの胚珠」があった。どうやらあの状況で気が付かなかつたが、リトルネペントの中に花付きが混じっていたらしい。

「……私は無かつたです」

「俺は持つてる」

「私も持つてるよ」

キリトとイーデイスが持つていてアリスは無かつたようだ。まあ、そんな都合良くはいかないか。アリスは残念そうな顔になつたが、元の表情に戻してこう言つた。

「残念ですけど、また行けばいいですから気になせんよ」

俺はその言葉に少し考える。そしてメニューを操作してアリスに向けて言った。

「……これ、やるよ」

俺の言葉に対してアリスは驚き、そして首を振つて慌てて言つた。

「それはヤハトが取つたものでしよう！それにヤハトが助け出してくれたのにドロップ品まで貰うなんてこと出来ませんよ」

「いや、お前の力は攻略に必要になつてくる。お前のパワーを強化するのを先にした方がいい。俺の武器は後で手に入れればいいしな」

正直に言えば、俺はスピード型なので攻撃力が余りない。しかしあリスはパワー型だ。武器が強ければ強い程相乗効果が出る。それに此奴は天性の戦闘センスがある。恐らく攻略を牽引していくはずだ。

アリスは納得がいつてないのか困つたような顔をするので俺は頬を搔いて言つた。

「……あー、その代わり条件がある」

「何ですか……？」

「……出来るだけ早く妹を安心させてやりたいんだよ。だから強くなつてこの世界を攻略してくれ」

その言葉にアリスは驚き、そして真剣そうな顔で頷いた。

「分かりました。必ず果たします」

そしてアリスは胚珠を受け取る。俺達はクエストを発生させているNPCの女性の元に戻る。そしてクリア条件を満たしたので話しかけるとクエストストーリーが進行する。女性は胚珠を薬にして、それを奥の部屋に持つて行つた。

そして女性は俺達の元に戻つてきた。病気だつたであろう子供を連れて。

「すっかり娘が元気になりました。ありがとうございます。お礼として村に伝わる秘剣を差し上げます」

そして俺以外は【アニールブレード】を受け取り、クエストクリアとなつた。そして子供が笑顔で言つた。

「私の病氣を治してくれてありがとう！お兄ちゃん、お姉ちゃん」

「ツ・・・」

思わず現実世界で待つてゐる小町と重ね合わせてしまう。キリトもアリスも表情は寂しげだつた。イーディスも何処か暗い。俺達はクエストを終えると建物を出た。そしてキリトが言つた。

「クエストも終えだし、明日には解散だな。3人はどうするんだ？」

その言葉に対しても俺はアリスとイーディスを見る。2人は悩んでいる様子だつた。俺はポツリと言つた。

「・・・俺はソロでやつていくつもりだ。煩わしさもないしな」

その言葉にキリトは驚いたような顔をした。アリスとイーディスはジッと俺を見つめている。注目されるのはやだなあ、辛いなあと思つて いるとキリトが聞いてきた。

「アリスとイーディスとは行動しないのか？」

「ああ、正直女性2人と行動していると目立つし、それに・・・」

「・・・それに、何だ？」

「・・・いや、何でもない」

――――――――繋つてしまいそうになる。とは言えなかつたらだ。思い出すのは学校のクラス教室や部室で毎日のように顔を合わせていた2人。関係が上滑りしている状態で、心地良いとはお世辞にも言えない冷え切つた空間。俺が黙り込んだのを見て何かを察したのか、キリトは聞く相手をアリスとイーディスに移す。

「2人はどうするんだ？」

「・・・私はヤハトかキリトに付いて行きたいです」

「私も同意見かな。ヤハト君とキリト君と行動出来たらいくらか安心だから」

何その期待。そんな主人公みたいな属性はないんだけど。俺は口を挟む。

「付いて行くならキリトの方が良いだろう。此奴は $\beta$ テスターだから色んな情報持つてるだろうし」

俺はちやつかり押し付けるように言うとキリトが焦つたように言い返した。

「ちよつと待て。流石に女性2人と一緒にいるのはきついぞ」

顔を僅かに赤らめつつ、遠慮の言葉を口にするキリト。そういえば思春期真っ盛りだもんな。するとアリスが口を開く。

「出来れば、私はヤハトに付いて行きたいです。貴方には恩がありますから。それにアニールブレードの借りも出来ましたし、助けになります」

「別に気にしなくていい……」

「アリスもこう言つてるし、何より私も恩があるから付いて行くよ」

俺は遠慮しようとするとイーデイスが被せ気味に言つた。短い間ではあるが分かつたことがある。此奴らは頑固でお人好しだ。最早何を言おうにも勝手に付いて来そудだし、押して駄目なら諦めろが座右の銘の俺は溜息をついて言つた。

「はあ……、分かった分かった。付いて来るなら別に止めん。ただ前にも言つたが面倒見ないぞ」

そう言うとアリスとイーデイスは僅かに顔を綻ばせる。止めろよ、俺と一緒に良いみたいに解釈しちゃうでしょうが。勘違いしない、此奴らは俺に恩があるだけ。恩を返したら離れて行くんだ。八幡偉い子勘違いしない。

「キリトに押し付……任せてゆっくりボツチライフを送ろうと思つた

のにどうしてこうなつた」

誰にも聞こえない程の声で呟く。葉山なら喜んで受け入れるだろうが俺はそんなイケメンな行動は取れない。ボツチの皮を被つたりア充キリトなら取れるだろうが。

俺はホルンカでキリトが取った宿に戻りつつ考えていた。前を歩いているアリスとイーディス、俺の真横を歩くキリトを気にしながら。

宿に戻つて俺はキリトの部屋に行き、聞いた。アリスとイーディスは部屋にいる。

「キリト、此処以上のレベリングに適したところて何処だ?」

「レベリングなら、この先のドールバーナつてところの眠りの森つていうところだな。敵の平均レベルは5だから準備して行けばいいと思う」

「・・・・そうか、サンキュー」

この世界ではレベルが高ければ高いほど安全になる。モンスターはもちろん、人からも。それにレベルが高ければ精神的にも余裕が出る。此奴らみたいに俺は天性の戦闘センスは無い。だからせめてレベルだけは高くないと攻略出来ない。俺はそう思いながら、アイテム欄を確認していた。

そして部屋に行こうとした時、ノック音が鳴った。俺とキリトは互いに顔を見合わせる。アリスかイーディスか?そんなことを考えているとキリトがドアを開ける。そこにはベージュのフードゥトケープを被つた小さなプレイヤーが立っていた。そしてキリトに話しか

ける。

「やつぱり此処にいたカ、キー坊」

「お前は、アルゴか！久しぶりだな」

キリトの反応を見ると知り合いらしい。俺は警戒しつつ、キリトに聞いた。

「知り合いらしいが、誰なんだ？」

「ああ、悪い。此奴は情報屋の一ーーー」

「アルゴだ。よろしくナ」

そう言つてフードを取つて顔を見せる。金髪で顔には鼠のような  
髭があつた。この先の未来で長い付き合いになるであろう人物と邂  
逅したのだつた。

## 第1層攻略会議

キリストから紹介を受けて、アルゴという女性プレイヤーと邂逅して話を続ける俺達。アルゴは俺がニュービーと知ると感心したような声を洩らした。

「キー坊について行つて正解だつたナ。キー坊は $\beta$ テストで最前線を行つてたから、ニュービーのハトつちには大分楽になつたと思うヨ」

最前線というのは攻略した階層の中で一番上の事だ。その最前線にいたキリストが案内してくれたお陰で此処までは順調だつた。そこで俺は聞く。

「……キリストが最前線で行けたのは何処までだつたんだ？」

攻略のペースはどのくらいなのかは聞いておかなければならぬ。目安にもなるし。するとキリストは俺の言葉を聞いて重苦しげな表情になつて口を開く。

「……2カ月で行けた階層は7階層までだ。しかも $\beta$ テストでは死に戻りが出来たからな」

キリストの言葉に俺は思わず言葉を失つてしまつた。2カ月で7階層、数学の苦手な俺でもこの計算はできる。仮にこのペースで行けたしても2年4カ月以上はこの世界で閉じ込められたままだ。しかも死に戻りが出来る状態でそのペースだ。

「下手をすると3年、いや……もつとかかるかもしないのか」

俺の呟きにキリストは目を伏せる。そしてアルゴが静かに言つた。

「しかも一度死ねば2度目はないカラ、慎重に動くしかないしナ」

そうこの世界はリトライが出来ない。最初の1層を攻略するのも相当な時間がかかるだろう。攻略に参加する人数自体も限られるからだ。俺はこの階層の攻略レベルの目安を聞く。

「第1層の攻略した時のレベルは幾つだ?」

「いくつかのパーティでレイドを組んで挑んだ時は5だった。でも何回も死んで攻略法を知った状態でだ」

レベル5・・・今の俺はレベル7だが、レイドを組んで物量戦で挑んでやっと勝てた時の数値だ。安心とは言えない。そしてアルゴがキリトの説明に補足した。

「しかもβテストと動きが今回は違う可能性があるからナ。最低でも今回はレベル7程度はないと厳しイと思うゾ。安全マージンはレベル10以上は必要だらうナ」

安全マージンとは、ゲームで攻略する所の目安のレベルを大幅に超えていて物資も万全な状態のこと。後3も上げねえと行けねえのか。やだなあ。面倒くさいなあ。働きたくないなあ・・・と、思っていると気付いたことがあった。

「そう言えば攻略に出ない奴の身の安全はどうするんだ?」

俺の言葉にアルゴとキリトはハツとなつた。攻略する前提で話を進めていたが、そんな奴らは少数だ。大概の場合、『圈内』で過ごしても不思議ではない。フィールドに出ないプレイヤーはモンスターに襲われたら1発でアウトだ。身の安全を確保する上で狩りの仕方や暮らしていく上でのコル稼ぎは教えていかなければならぬ

のではないか。ちらりと頭に浮かんだのは始まりの街で見かけた雪ノ下達だ。

「そうだな。下層で攻略に出ない人もいるし、どういう風にやつていくのかを教えといた方が混乱することもないから良いと思う」

「最低限の安全を保証すれば、下層から上がつてきてもある程度は余裕も持テルだろうからナ。新聞や本とかで出回せば良イカ」

そう言つて2人は早速この世界での過ごし方を本に出そうと計画を立て始めた。ニュービーの俺がいても話しさ変わらないので部屋を出て宿の廊下を歩いてフィールドに行こうと決意した。アニールブレードをゲットする為に。

辺りはもう夜だった。不気味に見える森に入るには億劫だが、生き残る為に必要な事だ。俺はクエストを受けている途中なのでそのまま行つても問題はない。

今回はキリトともパーティは解消しているので経験値は半減されない。装備を整えているのでレベルアップも出来る。花付きのリトル

ネペントは1%以下で出ることは分かつてるのでレベリングも兼ねて戦闘技術も磨いておく。

リトルネペントの鞭攻撃を身体を逸らして避ける。そして今の武器【アイアンソード】で袈裟斬りを放つ。そしてそのまま後ろから迫るリトルネペントにくるりと一回転して水平に回転斬りを放つ。

リトルネペントをポリゴン化させて次の敵モブの出現を待つ。そして敵モブが出現する。俺は目を見開く。

「リトルネペントじゃない……？」

現れたモンスターは『コボルド・ヘンチマン』。頭部のカーソルは赤黒い色だ。カーソルの色は普通のN P Cが緑、敵モブが赤。敵モブのカーソルの色が濃ければ濃い程敵モブのレベルが高い。恐らく敵モブのレベルは7以上。この階層の中では恐らく最強クラスの敵モブ。完全なイレギュラー。

「おいおいマジか……こんなの聞いてねえぞ」

数は3体程、正直困まれば死ぬ。俺はフイールドを出ようとするが、後ろに振り返るとタゲを俺に向けたリトルネペント5体。然も実付きも混ざっている。

「チツ、マジで洒落にならん……」

『グルアアツ！』

早速と言わんばかりに俺に狙いを定めてコボルド達が飛び掛かって来た。手に持った銅の剣を振るつてくる。幸いスピードは見切れないので速さではない為横に跳んで躰す。しかし、回り込んだのか

もう1匹のコボルドが迫つて来た。

『ガアー！』

「つく、掠つた……」

剣を振るい落としてきたので体を捻つて躲したが少し掠つたようで微量にＨＰが減る。これが続けばいずれ死ぬのは確実だ。だから・・・・

俺はコボルドから離れてリトルネペントのいる方向にあるフューリードの出口に向かう。幸いスピードでは俺が速いのでコボルトには掴まらない。しかし進行方向にはリトルネペントがいる為に攻撃を回避しつつ、最短で向かわないと行けない。俺は「レイジスパイク」を放つてリトルネペントを吹き飛ばす。僅かに硬直するがまだコボルド達との距離はある。俺は突つ切つて進む。

1体のリトルネペントの鞭攻撃を姿勢を低くして躱し、2体同時に鞭を振るい落としてくるのでジャンプして飛び越える。そして出口に差し掛かつた時、俺は僅かに緊張を解いた。解いてしまった。

出口へ僅か2メートルも無い所で入り込んできた影があつた。3体目のコボルドが回り込んできたのだ。銅の剣で单発袈裟斬りソードスキル【スラント】を放つてきた。

ガキイイン！

咄嗟に武器で受け止めてダメージは最低限に留められたが、吹き飛ばされたせいでまた出口が遠くなつた。俺は何とか着地してコボルドを睨む。どうやつても逃す気は無いようだ。やだ俺、人気者じやん。・・・・モンスターに群がれるとか誰得だよ。

そんな硬直状態が続いている間に他のモンスターも追いついてしまった。さつさとやることやつて帰りたいのにどうしてこうなった。俺はそう思つて溜息を吐きながらアイアンソードを構える。

とりあえずスピードで勝つているから撹乱しながら囮まれないよう1対1に持ち込んで立ち回るしかない。リトルネペントの弱点は分かっているがコボルドの弱点を探るか。俺はコボルドとの間合いを詰める。

相手は咆哮して、剣を振り抜いてくるが、俺は拳動から予測して迫つてくる剣をAGI極振りのステータスを頼りに躱す。キリトみたいに反射神経お化けじゃないから見てからの回避は間に合わないからだ。

そしてコボルドを思い切り蹴り飛ばす。囮まれのを防ぐ為である。STR型じゃないので言うほど飛ばせなかつたが、1度ではなく3度くらい行えば充分に距離を稼げる。ダメージにはならないようだつたが、そこまで気にしていない。

そして1対1に持ち込んだ1体目のコボルドに向かつて間合いを詰めて、肩に向けて上から下に剣を斜めに振るう。当たつたのでHPが少し減り、吹き飛ばされるが、直ぐに雄叫びを上げて反撃をしてくる。

反撃を潜り抜けるように躱して俺は【スネークバイト】を放つ。1発目は胸に、2発目は喉元にかけて斬りつける。するとコボルドは大きく仰け反つた。弱点は喉元か。そして俺はそのまま追撃を放つとHPが3割から4割削れる。それでも直ぐに反撃で剣を横に振るうので剣で弾き返す。すると相手も弾かれるので、その隙に【ホリゾンタル・アーク】を放ち、更にダメージを与える。

そんなやり取りが続き、やつと1体目のコボルドを倒した。そして経験値が入る。俺は何か攻略法を掴んだので迫る次の敵モブに備える。

そして2体目のコボルドが攻撃を仕掛けてきた――――――

そしてコボルド達やリトルネペント達も倒した。しかし花付きは出て来ることはなく、胚珠は取れなかつた。俺は森を出ると、アリストイーディス達がきた。俺を見ると焦つたように近寄つてきた。

「ヤハト、無事ですか！」

「1人でこの森に行つて戦うなんて無茶し過ぎだよ」

「・・・別に無茶ではないだろ。余裕を持つてやつてるよ」

俺は言うとアリストイーディスは溜息を吐いて、呆れた顔をしたが直ぐに話題を変えて聞いてきた。

「それで胚珠は手に入れる事は出来たんですか？」

俺は否定する様に首を振ると、2人は頷いて言つた。

「だつたら私達と狩りをしましょう」

「3人でやつた方が早いしね」

「……俺は施しを受ける気は無いぞ。別に無理に俺を手伝わなくてもいいんだが」

俺の言葉に2人はムツとした顔になるが、悲しそうな表情になつてこう言つた。

「……そこまで私達が信頼出来ないの？」

「私達は私達自身が貴方を手伝いたいと思つてついてきただけです」

「……別に信頼出来ないってわけじやないが」

俺はバツが悪くなつて顔を逸らす。この2人を見ていると奉仕部での空間と重ねてしまふ。それがどうにも苦しく思つてしまふのだ。俺は来た道を戻つていく。アリスとイーディスも黙つて後をついて來た。

本当、何でこんなに苦しく思つてしまふんだろうな……俺は内心、溜息をついて泊まつてゐる宿に戻つた。

あれから1カ月が経つた。俺も糺余曲折がありつつもアニールブレードをゲットすることが出来た。ホルン力を出た後、俺、否俺達はキリトとアルゴから貰った情報にあつたトールバーナに来ていた。つつても1カ月前からレベリングに来ているので道もほぼ覚えてしまつたが。

この日までに全プレイヤーの内の1／5である2000人が死んだ。主な死因はゲームに閉じ込められてしまつた絶望での自殺がかつた。モンスターに殺されたというのもあったが、キリトとアルゴが発行した攻略本のお陰で被害は少ない。ニュービーのプレイヤー達は。問題はβテスターが大勢死んでしまつたこと。恐らくはβテストでのアドバンテージがある事で生じた油断でしくじつてしまつたのだろう。

この世界で貴重な戦力と成り得るβテスター達が少数になつたことに残つたプレイヤー達は不安を募らせることになるが、およそこの3日前に吉報が舞い込んだ。

『ボス部屋に到達』。あるパーテイーが、この階層の迷宮区のボス部屋までのマッピングを終わらせたという情報が出回つた。そして今日、ボスを攻略する為の会議が開かれることになった。

トールバーナの中央は円状に広がつていて階段状になつてゐる。

そこに何十人というプレイヤーが集まつてきている。俺はその円状の端でボーツとしていた。俺は欠伸をしながら呟く。

「眠てえ……」

正直に言うと早く帰りたい気持ちで溢れている。現実世界での日いちで今日は土曜日だ。一応ヒーロータイムとプリキュアを見る時間には起きているが、今日はその1時間も前から起きているのでかなり眠い。下手に遅れていざこざに巻き込まれるよりはましだが。そう思っていると隣にグレーのフードマスクを身に纏ったアリスとイーディスが座つてくる。そして呆れた様子で言つた。

「だらしないですよヤハト。これから攻略会議なんですから気を引き締めて下さい」

「本当に朝にヤハト君を起こしに行つて正解だつたわ。寝坊してそのまま会議をすっぽかしそうだし」

失礼な。流石に寝坊して攻略会議に出席しないなんてことはない。遅れて参加の可能性は高いけどそこまでではない。ないよな？俺は2人を見つつ、講義するように言う。

「いや、お前らのレベリングに俺が付き合わされたんだからね？ダラダラ過ごそうと思ったら毎日10時間以上も外に連れ出された挙句、やる事がレベリングつて何、お前らは戦闘狂なの？キリトなの？」

俺がそう言うと気まずげに顔を逸らす2人。レベリング10時間以上つて労基法やばいよな。キリトから聞いたが凄い時は竪りつきりでレベリングすることもあるらしい。それを聞いた時まじで引いた。レベリングホリックつてキリトの為にある言葉だよな。

しかしその陰で俺のレベルは13、アリスとイーデイスは12と  
多分全プレイヤーの中で最高クラスの位置にはいる。トールバーナ  
の眠りの森というフィールドでレベリングした結果だ。因みに1カ  
月前に発生したようなイレギュラーは無かつたが。キリトにも聞い  
たが、そんなことには遭遇した事がないと言われた。高くてもレベル  
6の敵モブがこの階層の最大らしい。

俺がそう回想していると、中央に青髪の甲冑を装備した如何にもど  
いうような爽やかイケメンが立つた。そして周りを見渡して言つた。  
「今日は、オレの呼びかけに応じてくれてありがとう！知っている人  
もいると思うけど、改めて自己紹介しどくな！オレは『ディアベル』、  
職業は気持ち的にナイトやつてます！」

俺は一瞬耳を疑つた。声が材木座に瓜二つだつたからだ。思わず  
材木座!? と言いかけそうだつた。雰囲気が葉山みたいな奴で声が材  
木座とか、本当に居たのかと思つた。周りのプレイヤーは緊張が解れ  
たのか、どんなジョブねえよー。と笑いながら突つ込みをいれてい  
た。

「何が面白いんでしよう？」

「さあ・・・？」

笑う要素がどこにあるか分からなかつたのかアリスとイーデイス  
は首を傾げる。俺は感心しながら小さく咳く。

「警戒心を持たせない為にやつたことだろうな。まじで葉山みたいな  
ことすんな」

気さくな面を見せることで相手の警戒心を解し、信用を持たせる。

そして自分の意見に耳を傾けさせやすくする。イケメンリア充の専用技みたいなものだ。そしてディアなんとかは話を続ける。

「今日、オレ達のパーティーがあの塔の最上階へ続く階段を発見した。つまり明日か、遅くとも明後日には辿り着くってことなんだ。第一層のバス部屋に！」

あ、此奴等のパーティーが見つけたのか。偶に迷宮区の方にも入っていたが、レベリング目的であり、マッピングはしていなかつた。主に目立ちたくないという理由でだが。

そしてディアなんとかの話がそのまま続けられるかと思いきや割つて入る声が聞こえた。

「ちょおー待つてんか！」

声が聞こえた方を見るとトゲトゲした髪の男が立ち上がり声を挙げた。え、何あの髪型、どうやつたんだよ。思わず笑いを洩らしそうになるがギリギリ耐える。

ディアなんとかの方へ行くと周りを睨むように見渡す。そして戸惑つた様にディアなんとかは聞く。

「えーっと、君は？」

「ワイはキバオウつてもんや。ナイトはんの話しを聞く前に1つ言わせてもらわんと気が済まんもんがある！此処にこそおるであろうβテスター共になあ！」

憎しみの様な感情を乗せて周りのプレイヤー達を睥睨するキバオウ。その言葉に周りのプレイヤー達がざわつき始める。アリスト

イーデイスも怪訝そうな様子だ。そしてキバオウは叫ぶ様な事を言う。

「 $\beta$ テスター共が抜け駆けして、ニュービーの左右も分からん状態なのに見捨てて死んでいった二千人にや。狩場の穴場、上手いクエストの情報、奴らが何もかんも独り占めしたから、一ヶ月で二千人も死んでしもうたんや！せやろが!!」

その言葉に凍りついた様に場が静まつた。アリスとイーデイスはキバオウの叫びを聞いてキバオウを睥睨する。

「勝手な物言いですね……！」

「 $\beta$ テスターだけに全部の責任がある訳がないでしょ……！」

尚もキバオウの主張は続く。

「だからワイは $\beta$ テスター共に命は預けへん！ちよろまかした装備とコルを置いて、ワイ等ニュービー達に謝罪しない限り協力はせんからなあ！」

「ぶふつ……」

キバオウの主張を聞いてこの場に潜んでいるであろう $\beta$ テスターを周りのプレイヤー達は糾弾し始めた。俺はその様子を見て、この場にいるであろう全プレイヤー達に聞こえるように吹き出し笑う。その予想外の俺の反応を見て全員の視線が集まる。キバオウは俺をヤンキーみたいな態度で睨んで言った。

「……何やワレ、何がおかしいねん！言うてみいや！」

「いや別に……この場に置いて全くの見当違いな事を言つてたから笑つただけだ」

「何やとお……？」

俺は、立ち上がつて周りのプレイヤー達を見ながら言つた。キバオウの主張の粗を。

「キバオウ、アンタが逆に $\beta$ テスターだつたとして9000人のニュービーの面倒を見切れるのか？」

俺の言葉にキバオウは言葉を詰まらせる。俺はその様子を見て続ける。

「それに $\beta$ テスターはこの世界の先駆者、謂わば貴重な戦力だ。情報も持つてるしボスとの戦い方も知つてゐる。そんな奴等の身包み剥いで、 $\beta$ テスターに嫌われて情報もボスの対処法も教えないって言われてみろ。ニュービーの俺達の中から死人続出だ。誰が責任取る？そりやあ迫害を言い出した奴、キバオウ、アンタになるぞ？」

その言葉にキバオウは顔を青ざめさせる。大量殺人者の汚名を被りたくないだろう。人間誰しも重い責任は負いたくないってことだ。そして俺はメニュー画面を操作して本を取り出す。その本はキリト達 $\beta$ テスターが発行した攻略本だ。俺はその本を片手で持つて言つた。

「……この攻略本、多分此処にいるほぼ全員が持つてるとと思うんだが」

「……それがなんや」

「この攻略本は $\beta$ テスター達の経験が載っているんだよ。これに助けられた奴もいるんだろ。死んだ2000人の800人くらいは $\beta$ テスターだ。その命の結晶がこれなんだよ」

プレイヤー達はざわつき始める。 $\beta$ テスターの8割が死んでいるとは思わなかつたのだろう。俺は最後にこう締めくくつた。

「ぶつちやけ $\beta$ テスターの吊し上げは他所でやつてくれ。攻略会議が無いなら俺は帰つて寝たいんだよ」

そして場に静寂が訪れる。キバオウは静かに元の席に戻つていった。デイアなんとかが気まずげな空氣な中で再び喋り始める。

「・・・ $\beta$ テスターに恨みを抱いている人もいるだろう。でも、此処に居る人達は $\beta$ テスター達の情報で助けられた人もいる筈だ。この世界を攻略する為に、互いに認め合つていこう。俺の意見に賛同してくれるかい？」

デイアなんとかの言葉にポツポツと拍手が起ころ。そして大喝采になつた。良いとこだけ持つていきやがつたなあのイケメン・・・俺は溜息を吐いて座ると隣のアリスとイーデイスが言つた。

「少しヒヤヒヤしましたよ、全く。ヤハトも煽り過ぎないでください・・・でも私的にはとても良かつたですよ」

「少しきりしたよ。ヤハト君、GJ」

その様子に俺は頬を搔いて言つた。

「言いたい事をただ言つただけだ」

「「捻デレだ（です）ね」

「おい、変な言葉作んの止めようね。妹の作った言葉を何で知つてんだよ・・・」

俺はげんなりしていると2人はクスリと笑う。デイアなんとかの話は進んでパーティーの事になった。

「よし、今から2人1組になつて3組に集まつてレイドを組んでくれ！連携を確認したいから組んだ人と一緒に戦つて欲しい」

「・・・・余りますよね」

・・・・まじか、此処に居るプレイヤーは総勢で45人。1人があぶれる。俺達が考えていると声がかけられる。

「おーい、ヤハト！」

そんな声を掛けて近づいてきたのは廃ゲーマーボッヂことキリト。そしてその隣に赤いフードットケープを着たフェンサー。格好的に女っぽい。俺は面倒くさい雰囲気を醸し出して言つた。

「・・・・大声はプロボッヂにはキツいから止めろキリト」

「悪い悪い。ヤハト、さつきはありがとな。俺の立場じや何も言えなかつたし」

キリトの礼に俺は視線を逸らして言つた。

「・・・別に、攻略に支障をきたしたら面倒と思つただけだ。さつさと終わらせたかつたしな」

「……そうか。んで、そつちのグレーのフードツトケープを着た2人は？」

「……お久しぶりです。キリト」

「1ヶ月ぶりだね」

2人の声を聞いてキリトは納得し、フエンサーは驚いた様子を見せた。まあ、こんな眼の腐った男の近くに女性プレイヤーが2人いるんだから驚くのも無理はない。自分言つて悲しくなってきた。止めよ。

「できれば俺達と組んでくれないか？知り合いがヤハト達位しかいな  
いんだ」

「……別に構わんけど、そつちの奴は良いのか？」

俺はフエンサーの方に聞く。するとフエンサーが静かに言つた。

「……別に構わないわ」

俺は横にいる2人にも視線を持つていく。2人も頷いた。

そしてキリトがパーティー申請を送つてきたので受諾する。そして表記されたのはキリトの名前と『アスナ』と言う名前だった。

「……んじゃまあ俺は帰る」

俺はそう言うと、キリトも苦笑しつつ言つた。

「面倒くさがりだな。まあ俺も戻るよ、風呂に入つてすつきりしたいし」

キリトの言葉を聞いた瞬間、目にも留まらぬ速さでガシツと言う効果音が聞こえてきそうな感じでアスナがキリトの肩を掴んだ。その様子は鬼気迫るといった感じである。何、キリトの奴早速フラグ建てたのか？

「お風呂……ですって？」

「な、何？少し怖いし近いから離れて『お風呂の入れる宿に連れて行って』・・・へ？」

アスナの言葉にキリトは素つ頓狂な声を洩らしたのだつた。・・・何このギャルゲーイベント、フラグ回収早過ぎじゃね？

それからキリトと別れようとすると、キリトが『女子との2人きりはきつすぎるからヤハト、付いてきてくれ！』と割とマジトーンで言

われ、1回は断るも、5000コル払う。という事を条件に俺はキリトの泊まる宿に付いていくこととなつた。するとアリストとイーディスも男性2人に女性1人ではあれだからと付いていくことになつた。そして広場から出ようとするとガタイの良いスキンヘッドの黒人に、何故か礼を言われた。そして俺達は宿に行く間、アスナに『スイッチ』と『POTローテ』について実践しながら教えていた。まあ、教えるのはキリトなんだけどね。

「ハアアツ！」

緑の流星が敵モブにヒットし、見事にポリゴン化する。刺突ソードスキル「リニア」を放つたアスナにキリトは感心していたが俺も感心している。スイッチとPOTローテも知らない時点でニュービーだと分かつていたが、そうは思えないほどの正確さと速さのリニアだつた。フエンシングでも習つてたのか？

キリトのレベルは12、アスナのレベルは10。俺のレベルがキリトより上だつたことに俺は驚いたが、装備の強化に力を入れているらしいので納得した。キリトは【アニールブレード+6】攻撃力と頑丈さに+3ずつと、バランス良く強化していた。武器には強化回数の名目があり、倒した敵モブから落とされた素材と合成し、強化してポント振り分けて銳さ（攻撃力）や頑丈さ（重量）、器用さ（クリティカル補正）を上げるのである。俺はAGI極振りステータスで攻撃力が足りないため、銳さ+4と頑丈さ+1、器用さ+1と偏っている。

そして、宿に到着した俺達。俺とキリトは部屋に行き、女子3人は風呂に入った。特にアスナは一直線で風呂場に向かつて行つた。風呂への執着が凄いな。多分INの宿にばっかり泊まつてたから入れてなかつたんだろうなあ。俺とアリストとイーディスは風呂付きの宿に泊まつてるのでその辺は問題無い。

女性を連れ込んだことにキリトは緊張が凄く、ソワソワしている。まあアスナの外見は知らんがアリスとイーデイスは美少女なので分かる。しかしあれである。緊張しても覗きに行けば即黒鉄宮行きになるし、そもそも覗きに行く勇気さえも無いので緊張するだけ無駄なのである。よつて俺はキヨロキヨロと周りを見てボーッとしていた。あれ、俺が1番無駄に緊張してるんじゃね？こんな時は素数を……1つて素数だつけ。と脳内で巫山戯ていると、ふと聞きたいことがあつたのでキリトに聞く。

「…………おい」

「な、何だ？」

「1層のボスの戦い方やボスの使用武器はどんな感じだつたんだよ」

「あ、ああ。1層のボス……『イルファンング・ザ・コボルドロード』は最初は斧型の武器で取り巻きの『ルインコボルド・センチネル』と一緒に攻めてくる。取り巻きがいる間はボス自体の攻撃はそこまで激しくないけど、取り巻きの攻撃が激しいから先に取り巻きを倒す。倒した後にボスの攻撃が増すからタンク役のプレイヤーを中心にして、ボスのHPがレツドに差し掛かつたらタルワールって言う曲刀でソードスキルを乱発してくるから注意しながら一気に撃破つて感じだつたかな」

コボルド、弱点は分かっているので攻撃面は大丈夫だとして、重要なのはβテスト時と何か変化がないかどうかだ。まあ、そこらへんは最大限警戒するしかない訳だが。そう思考しているとコンコンコンとノックが鳴った。もう風呂を上がつたのだろうかと思つているとキリトがドアを開ける。

「おつと、やっぱり此処にいタカ。キー坊とハトっち」

そこには情報屋である『鼠』のアルゴがいた。今更だが、ネーミングセンスがお団子頭のアホの子並みなんだよなあ。俺は呆れているとキリトが聞いた。

「今日はどうしたんだよアルゴ。ボスの重要な情報とか見つけたのか？」

「違ウ、違ウ。今回はキー坊に他の奴から依頼が来たから言いにきたんダヨ」

キリトに依頼つて何だ？ キリトも心当たりが無いのか首を捻つているとアルゴが話しだす。

「キー坊の剣を買いたいって依頼……今日中なら、39800コル出すそーダ」

「さ……39800コルウ!?」

キリトが叫んだ。俺も驚いて、思わず言つた。

「……そんな大金一人じゃ稼ぐの難しいだろ。俺でも2万5千くらいしか持つてないぞ」

俺の言葉にキリトは考える様子を見せて言つた。

「……アルゴ、クライアントの名前に1500コル出すから、それ以上積み返すか、確認してくれないか？」

「……わかッタ」

・・・・ん？名前公表するだけで金取んのか。当事者のキリトにもただで教えるのかと思つたがやはり情報を扱うだけあつてその辺りは厳しいらしい。

「・・・・教えて構わないそーだ」

何が何やらといった顔で、キリトはアルゴに1500コルをオブジエクト化して渡す。

「で、アルゴ、クライアントの名前は？」

「・・・・二人共、もう知ってるハズだヨ、昨日の会議で大暴れしかけたかラ」

そう言つて『鼠』は俺の方を見てくる。大暴れつてまさか・・・

「まさか、キバオウ、か？」

そう言うとアルゴは頷く。反ベータスターのキバオウが元ベータスターのキリトの剣を欲しがつてゐる。絶対何かあると、推理するまでもない。

「ん？ そりいえば何でヤハトも聞いてるんだ？」

「宿に行く間に連絡してキバオウの周辺を調べておいてもらつたんだよ。5000コルでな」

情報がないとあるとではこの世界では他のプレイヤーと大きく差が出る。フレンド登録しておいて正解だつた。しかし揶揄いにくるのはやめて欲しい。そのキャラは魔王で間に合つてるしな。・・・なんか悪寒がしたからこれ以上のこの話題への考えは放棄しよう。

「キバオウには断つておいてくれ。いくら金を積まれても売る気は無いと」

「わかッタ。連絡しておくヨ……ちょっと着替えたいから隣の部屋借りて良いか?」

「つと、ヤバいイベント発生しちやつたよ。この部屋の隣は風呂場なので今は……」

「待て、アルゴ。今使用している奴がいるんだよ」

「俺の言葉にアルゴが一瞬考える様子を見せた後、ニヤリと口を歪めたのを俺は見逃さなかつた。あ、嫌な予感。

「ふーん、わかッタじやあ帰ル。……と見せかけテ!」

「あ、馬鹿!止めるおおお!」

キリトが捕まえようとするがアルゴは器用に躱し、隣の部屋に入つていった。俺はいち早く窓から脱出を試みる。呆然としているキリトを置いて。キリトはまあ……良い奴だつたよ。そして……

『きやああああああああーーー!!』

女子3人の悲鳴が上がつてドタドタと音が聞こえてきた。は、早くしなければ俺が社会的に死ぬ。まだマイスウイートエンジエル小町と戸塚に合わない限りは死ねないんだ。窓を開こうとするがガチャンと言う金属音。鍵かかってるううううううう!

「ぶへ!?」

乾いたバチンという音とキリトの短い悲鳴が聞こえた後、俺の後ろに気配がした。そして底冷えする声がした。

「こつちに振り向いたら……分かるわよね？」

俺は後ろを振り返ることがないようによつくり頷いた後、静かに呟いた。某幻想殺しの台詞を。

「不幸だ……」

面影は消えず、されどそのものに非ず。

お風呂から出た女性陣に俺達男性陣は説教されていた。アルゴはいつの間にか逃げていた。俺にも悟られぬ様に逃げるとか、もしかしたら彼奴は俺以上のボツチの可能性が微レ存？そんな思考をしていると顔を覗き込まれて栗色の瞳に冷たく睨まれる。

「……本当に反省しているのかしら？」

「……いや、俺は一応止めた立場なんだけど。怒るならアルゴに怒つてくれ」

いや、正直なとこ期待もしてたよ？俺も一応健全な男子高校生だからな。ていうか何気に此奴……アスナの顔を初めて見たけど、此奴も相当ルックスのレベル高いな。

「……まあ、何も見られてないから今回は不問としてあげるわ。でも、次はないわよ？」

次とか想定してねえよ。ていうか俺は元々キリトに頼まれてきたから一緒に絶対いないとと思うんだがな。

そして俺は正座から解放された。因みにキリトは見てしまつていいるので現在も正座中だ。ぶっちゃけ俺は見てないのに何で正座させられたのか。

俺は部屋を出て外で待機していたアリスとイーディスと合流した。2人はアスナほどは怒っていない。羞恥はしているよな？余りにも肝が座りすぎじゃないのん？俺は不思議に思つたので聞いてみた。

「……なあ、2人は怒つてねえのか？」

俺の問いに2人はアスナの阿修羅如きの顔を思い出したのか、苦笑していた。そしてアリスが言う。

「彼女みたいに身体を見られた訳ではないのであそこまでは思つてしませんよ。元はと言えばあの情報屋の『鼠』が悪いんですよ」

アスナの様に身体を見られた訳ではないので大して気にしていないらしい。運が良いというかなんと言うか……。そして2人を見ていると先程の出来事の所為か、2人の身体を想像してしまった。そんな様子から見抜いたのかイー・ディイスがジト目になつて言つた。

「顔赤いけど、もしかして私達の裸を想像したんじゃないの？」

「……い、いや？ しょ、そんな事ないじよ？」

詰問された動搖のせいで思わず噛んでしまつた。アリスとイー・ディイスが俺をジト目で睨むので俺は閑話休題と言わんばかりに話題を変える。

「つと、それはそれとしてキリトから第1層のボスの攻略法を聞いたんだが」

俺がそう言うと2人は真剣な表情になる。そしてキリトから聞いたことをそのまま伝えると、2人は少し考えた後に口を開いた。

「ふむ、私はパワー型なのでスピード型のヤハトとイー・ディイスにボスや取り巻きを攪乱してもらつた方が良いですね」

「分かつた。私達は先ずボスじゃなく取り巻きのコボルドを倒す方が優先しよつか」

イーデイスの言葉に俺は頷く。正直ステータス的には高い方だが、リスクを考えるとボスよりは取り巻きの方が倒しやすい筈だ。それに・・・

「俺はさつきの件でヘイトが集まつてから取り巻きを押し付けられそうだしな。まあ、ボスを倒したい訳じやないし楽だからいいけど」

「・・・・そうですね」

「あー、まあ想像つくなあ。あのキバオウつて人に、出しやばるな。つて言われそう・・・」

2人は苦笑しながら言つた。あの捻れた正義感とプライドの所為であるもやつとボールみたいな髪型になつたんじや・・・ともかくあのもやつとボールには絡まれないようにしどこ。怖いし、うるさいし、後怖い。

そして俺達が軽い確認を終えた後にやつとキリトの説教が終わつた。キリトに俺達の取つた宿に戻ることを伝える。するとキリトが辛そうに顔を歪める。大方アスナと2人きりになるのが辛いのだろう。しかしアスナを無理には追い出せない様で困つている。アスナはお風呂付きの宿があるなら出て行くと言つていたが、近くにそんな宿はないし、有つたとしても満員だろう。

部屋の中にいてアイテムの整理をしているとキリトが不思議そうに聞いた。

「なあ、何でヤハトは2人といて平氣そうなんだ？」

俺がアリストとイーデイスと一緒にいるのに平然としているのが疑

問だつたらしい。俺は苦笑して言つた。

「・・・平氣つて、んな訛ねえよ。俺だつて男だしあのレベルの容姿は緊張するに決まつてる。俺としても1人で行動したいしな。でも、色々借りも出来ちまつたんだよ。アーネルブレードのゲットするのも、料理も食わせて貰つてるしな」

最初は断つたのだが、案の定2人の押しに押し切られてしまい、アーネルブレードの入手手伝いや料理を作つて貰つてゐるのだ。断固として断ろうとしたら本当に悲しそうな顔をされるので困る。よつて渉々行動を共にしている。断じて樂ができるからそうしてゐる訳ではないぞ?断じて。最近では目覚ましの役割も担つてゐるので健康的です。・・・はあ、本当レベリングに毎度毎度付き合わせんのは勘弁して欲しい。働くのはごめんだつて言つても聞かねえしなあ「俺が溜め息を吐いているとキリトは胸やけしたような様子だつたので俺は聞く。

「おい、どうした?」

「・・・何でもないよ」

そして攻略の時の立ち回りをキリトに言うとキリトもそう思つていたらしく、賛成した。そして俺達は自分達の泊まつていた宿に戻つた。

宿に着いて、アリスの部屋にて昼食を取る。料理スキルは全員取っているが、熟練度はアリスが一番高い。と言つてもイーディスとの誤差はあるが、ほとんど同じなので変わらない。俺はマツカンを再現する為に取つたスキルなので料理という点では余り使わない。

ソードアートオンラインの料理の仕方は現実と違つてかなりプロセスが簡略化されているので短時間で済むが、その代わり不味くもないし、物凄く美味しい訳でもないという、とても不思議な味になるのだ。その理由は分かっている。俺はテーブルに並べられているアリスが作つたコロッケ（不思議味）を咀嚼して飲み込んだ後に言つた。

「……これ、コロッケなんだが、やつぱり不思議味になつてるなあ」

その声にアリスは何処かムツとした様子を見せる。何でムツとしてるのん？そしてアリスが言つた。

「……仕方ないでしょう。此処には現実世界の塩や胡椒と言つた調味料が無いのですから」

「そちらへん茅場晶彦つて適當だよねー。もうちよつと凝つて欲しかつたよ」

イーディスは頬杖を突いてぶー垂れながらコロッケを食す。女子がそんな不貞腐れた様子で良いのか？と思いつつ、アリスに、こら、肘を突いて食べるにはマナーが悪いから辞めなさい。と注意されてい

るのを尻目に俺はコロッケと付け合わせのポトフを食べて言つた。

「まあ、この世界では攻略がメインだからその辺は手を抜いてもおかしくねえだろ」

そして黙々と食べ終わつて、宿の部屋に取り付けられている簡易キツチンの流し台で皿を洗つた後、俺は自分の部屋でダラダラしていると、登録しているフレンドリスト（関係的にフレンドとは言わないが）にあるアルゴからメールが届いている事に気づく。

『次の攻略会議で段取りと攻略日を決めるらしい。次は明後日ダ』

そう書かれている内容を確認して、分かつた。と返信しておく。俺はメニュー画面を閉じると目を瞑つて思考に意識を落とす。

この攻略が今後の攻略に大きく影響することは間違いない。成功するか、失敗するか・・・不安分子が少しあるが、今はそれを考えても仕方ない。今は問題はそこでは無いと思っているからだ。

それは、今回の攻略で死人が出る可能性があること。絶対な安全は保障されて無いのでどうしようもないのだが、そこでは無くて攻略に参加するメンバーを牽引する奴とそうで無い奴とでは及ぼすであろう影響力が全く違う。村人Aが死んでも『ふーん、可哀想だね』で終わりだが、レギュラークラスの人物が死んだら号泣してしまうのと同じだ。小学4年の時、劇の時に俺が死人の役やつて見向きもしなかつたのに、急遽メンバー変えて矢島がやつたら大号泣になつた。勝手に死人役に組み込んだ中川は絶対許さん。

そんな訳で攻略もそつだが、攻略の主要になるメンバーは生かさなければならぬ。攻略速度も遅くなるしな。

誰も死なない様に動くのが一番だ。だけど現実は、て言うか茅場が作つたこの世界は甘くない筈だ。だからいやらしい設定を施しての可能性は充分ある。だから……

「覚悟しなきゃいけない……誰か死ぬ可能性を」

働きたくないが、最低限の働きはしないと支障をきたす。目立ったくねえが……。そこで雪ノ下達のことを思い出す。

まだ、俺は誰かが死んだ時にそれを受け止める覚悟が出来ていない。覚悟をしないと総崩れした時に死人が出る。その上での敗走は避けないといけない。

帰るために、帰つて彼奴らと話し合つて……次に進むために。この攻略を落とす訳にはいかない。

そう考えていると、夕食を食べる時間になつた。夕食のシチューを作つたイーデイスに怪訝な顔をされる。

「ヤハト君、顔が険しいけどどうしたのよ？」

俺はハツとする。どうやら顔に出ていたらしい。俺は、何でもないと言つた。そしてシチューを食べ終えて部屋に戻る。

風呂に入る氣にもならず、寝具の準備をして寝ようとするとコンコンコンとノックが鳴つた。俺はゆっくりと扉の方へ向かい、静かに扉を開けると。

「ヤハト、入つても大丈夫ですか？」

「……なんか用か？」

攻略の時の考えが頭から離れず、苛立つてしまい思わず低い声で尋ねてしまう。……何やつてんだよ。アリスは別に何も悪いことはやつてないのに。そんな俺に対してもアリスは凜とした様子で続ける。

「いえ、何やら思い悩んでいる様子に見えたので相談に乗ろうと思いまして」

「……別に悩んでないから良い。俺はもう疲れたから寝る」

そう言つて俺は扉を閉めようとするが、アリスではない別の手がドアノブを掴んで止める。俺は睨むように視線を向けた先には真剣な表情のイーディスが立っていた。俺は何だよ、と言い掛けるが、その前にイーディスが言つた。

「攻略の事で悩んでる、違う？」

図星を突かれ、思わず黙り込む。その隙に部屋の中に入り込まれた。

俺は追い出そうとして2人の肩を掴み掛けるが、キリトに『女性の身体に触れたらハラスメント警告がされるから注意しろよ』と最初に会つた時に言われた言葉を思い出し、咄嗟に止める。俺は溜め息を吐いて寝具の敷き布団の上に胡座をかけて座る。

アリスとイーディスも近くに座る。そして静寂な空気が流れ、物音すらしない中、アリスが口を開けた。

「ヤハト……攻略の事で何を思い詰めているんですか？」

「……別に俺は悩んでないって」

「では、何でそんなに苦しそうな顔をしているんですか？」

俺の言葉をアリスは遮る様に言う。力強いまっすぐな瞳に思わず言葉を詰まらせる。そして続け様にイーデイスが言った。

「何か悩んでいるんだつたら話して欲しいんだけど。私たちも力になれるかもしれないよ？」

アリスとイーデイスの姿勢に思わず、あの奉仕部の2人と重ね合わせてしまう。俺は拳を強く握りしめて言う。

「…………どうして、そこまでやるんだよ」

俺は此奴等に違和感があつた。命の危機を助けたからと言つて一緒に付いてきたりするならまだしも、クエストの手伝いや食事を振る舞う事までする必要は無いんじゃないかと。恩を着せるためにやつた訳でもないし、礼もいいと言つてているのに。しかも俺は男子で此奴等は女子だ。離れるのが普通の筈だ。

その言葉に対してアリスがゆつくりと答え始めた。

「…………最初は恩を感じて付いてきたのは確かです。ですが」

「一緒に行動するにつれて貴方の捻くれた性格の中にある優しさや何やかんや言つて私達の用事に付き合つてくれる気遣いの良さを知つていく内に恩義なんて関係なく貴方に付いていきたいと思つたんです」

「…………俺は別に優しくない。唯自分のためにやつてることを勝

手に他人が判断しているだけだ。

「…………俺は別に優しくなんてない。お前の思う様な奴じゃない」

アリスの言葉を否定するとイーデイスが言った。

「ヤハト君がそう思っていても私達は貴方に付いていきたいと思つたのは事実。困ついたら助けたいと思つたの。だから何に悩んでいるのか教えてくれる?」

「…………」

怖い……誰かを信用するのが。信用して裏切られる事ではない。裏切られて勝手に自分自身が失望することが。そう思つているとアリスが俺の手を両手で包んできた。俺は思わず身を引きかけるが。

「ヤハト……貴方が私達を遠ざけようとしているのは分かつてします。そして誰より責任感が強い事も」

「――――――それでも私達は貴方をもつと知りたい。近くにいて助けになりたいんです」

『今は貴方を知つている』という言葉を重ねる。雪ノ下が文化祭の終わりに奉仕部で言つた言葉だ。俺は顔を上げる。そしてアリスの宝石の様な蒼眼と視線が交差する。そこには雪ノ下の様な凜とした瞳があつた。――――いや、違う。アリスは雪ノ下ではない。肩を叩かれ、叩いたイーデイスの方を向く。イーデイスの紅眼に見つめられる。

「でも、ヤハト君は直ぐに距離を置こうとするし、こっちから行くことにするよ」

『待たないでこつちから行くの』文化祭の時の由比ヶ浜の言葉だつた。由比ヶ浜の様な人を包める優しい瞳だ。——いや、違う。イーデイスは由比ヶ浜ではない。

攻略で死ぬかもしれない。それは分かつていた。俺は——俺は、雪ノ下と由比ヶ浜を重ねていたこの2人が、死ぬかもしれないという考えが頭をよぎつてしまつて情け無くも恐かつたんだ。

「……俺は、攻略で誰かが死ぬ可能性があるのを考えていたんだ」

だけど、2人は雪ノ下や由比ヶ浜ではない。遠ざけたかった。どうしてもあの言葉が頭の中で響く。

『貴方のやり方、嫌いだわ』

『もつと人の気持ち、考えてよ』

俺のやり方でいつかこの2人を傷付けて、やり方を否定されて……自分自身に絶望するのが怖い。俺ではこの2人は守りきれない。だからこの2人を戦いから、俺の前から遠ざけたかった。

俺は考えていた事をダムに塞き止めてあつた水を放出するように一気に話した。そしてアリスとイーデイスは呆れたような表情で言った。

「ヤハト、貴方が私達を守らなくても自分の身は自分で守ります。それに、私達はパーティを組んでいるのだから支え合うのが当然なんですから」

「正直、ヤハト君は何でもかんでも自己完結しそうだと思うよ？負わなくて良い心配も全部一緒にたにして、ちょっとは肩の荷を下げたら？自分を大切にしなよ」

解らない。俺は自分自身でどうにかすることしか知らない。他人に頼るやり方を知らない。それでも足搔いて、何とか答えを得ようとこうなったのだから。

俺が2人の言葉に返答を窮していると、ふと抱きしめられる。俺は驚き、抵抗しようと身体を捩ろうとするが、その前に頭を撫でられる。「ヤハト、貴方が怖がるのは分かります。私だってヤハトやイーディスが居なくなつてしまつたらと思うと、とても怖い」

「だけど、その怖さは1人でどうにかしようとしたら駄目です。そんな事をしたら貴方は壊れてしまうから……それを見る方がもつと怖い」

何でお前が怖がるんだとは言えなかつた。アリスの何時もの凛とした絵画のような美しい微笑みでは無く、今にも消えてしまいそうな、儂い微笑みだつたから。そしてイーディスが言つた。

「それに、ヤハト君にも向こうで待つてゐる人達はいるでしょ？その人達もヤハト君が独りで抱え込んで欲しくないと思つてゐるじやないかな」

その言葉で想い出されるは平塚先生と陽乃さんと家族……親父、母ちゃん、カマクラ、そして小町の顔だった。

『お兄ちゃんが真剣にアリスさんとイーディスさんの身を案じるのは

小町的にポイント高いけど、その2人の気持ちを信じてあげる方が小町的にもっとポイント高いかな?』

小町は此処には居ないが、此処に居たのならそう言われるような気がする。平塚先生は励まし、陽乃さんは揶揄いそうだな。

俺は僅かに頬を緩めて小さく言った。

「……………そうだよな。—————ありがとう」

そしてその言葉を言つた瞬間に今までずっと思考し続けて疲れたのか、急激に眠気が襲ってきて瞼が重くなつた俺は眠るのであつた。

声がしなくなつたヤハトの様子を不思議に思い、見てみると静かに寝息をたてていた。緊張の糸が切れたのだろうか。

「ヤハト?…………眠つたみたいです」

私はヤハトをゆっくりと横にして寝苦しくならないように寝かせる。するとイーデイスがヤハトを見ながら微笑んで言つた。

「……こうして寝顔を見るのは初めてだけど、ヤハト君って中々イケメンだよね」

イーデイスの言つた言葉についてヤハトの規則正しい寝息を聴きながら考える。ヤハトは普段は濁つた眼と捻くれた言動も相まって近寄りがたいが、目を瞑つていると世間一般のその辺のイケメンよりはずつと顔が整つていて。それに髪に生えている主張気味のアホ毛は愛嬌があつて可愛い。ヤハトの顔を見ていると、イーデイスがニヤニヤしながら私を見て言つた。

「んー？ アリスつたらヤハト君を凝視して、見惚れちゃつてるのー？」  
「ち、違つ！ 貴女がヤハトの事をイケメンと言つたから考えていただけで……！」

「しーつ、あんまり声を大きくしたらヤハト君が起きちゃうから静かに」

唇に人差し指をもつて来て注意してきたイーデイスに、私は今のヤハトの状態を思い出しても口を噤む。私達の声に反応せず眠り続けるヤハトに安堵して再び小声で話し始める。

「……本当、ヤハト君は色々抱え込んでるよねえ。危なつかしくてかなわないわ全く」

「私達を遠ざけたい様子だつたみたいですが、ヤハトは独りにしたら駄目です。直ぐに無茶して、それをして他人には隠そうとしますから」

この1ヶ月でパーティを組んで行動していくてヤハトという人の成りが分かつてきた。

「この人は樂したいと言う癖に戦う時は前線氣味ですし、タゲ取りで敵の凹になつて引き付ける役を何も言わずともします」

「かと言つて私達が前に出て攻撃を加えていくと動きやすいようにさりげなくサポートに回るし、そのサポートも絶妙だからね」

面倒くさい、ダルい、休みたいと毎日言つて、狩りに行く時も消極的にいざ戦いになつたらしつかりと役目を果たすどころか私達よりも危険な敵と戦う役回りだつたり、撤退の時は『俺は負ける事については最強だし、危険だつたら敏捷極振りだから直ぐに逃げるぞ』と言つているのにいつの間にか私達が撤退するまでの間、時間稼ぎをしたりと、言つている事とやつている事が真逆なのだ。本当に捻くれ者だと思う。

ヤハトは他人を疑つてゐるのに困つていたらまつ先に助けに行ける人なのだ。そして助ける為には手段を選ばない。それが、自分自身を危険に晒しても他人を助けるのだ。

「本当、危なつかしいよ。そして・・・・助けたくなっちゃう」

「・・・ええ、ヤハトには幸せになつて欲しいと思いますよ」

少しほは他人よりも自分自身を優先してその身を大切にして欲しいものだ。死んでしまえば、リセットの効かないデスゲームなのだから元も子もない。私は少し悲しく思いながら寝ているヤハトの頭を優しくゆつくり撫でる。そしてそこで会話は切れ、ぼんやりと窓の外から映る月の光だけが私達を照らす。

するとイーディスが欠伸をして、眠たげに口を開く。

「ヤハト君を見ると眠くなつきちゃつたなあ・・・もう此処で寝ようかな」

「え、それは流石に・・・」

「別に大丈夫だと思うよ？ ヤハト君は寝てるし、もしも途中で起きても1ヶ月も近くに居て行動しているのに手を出すどころか遠ざけようとするぐらいなもの」

イーディスの言葉に私は考える。倫理的に考えて年頃の男女が同じ寝床で寝る事は良い事ではない。しかしヤハトは女性を襲うような人ではないのも確かである。この1ヶ月が良い証拠だ。私は悩みながらも、ヤハトの事が心配で近くにいたいという思いの方が強く、静かに装備を外して薄着の白いワンピースになる。イーディスも灰色の半袖の服と黒い半ズボンになった。そしてイーディスがメニューを操作しながら言つた。

「アリス、ヤハト君に対するハラスマント警告、外しといた方が良いよ」

「・・・そうですね。一々出現しても面倒ですし、解除しましようか」

そして私とイーディスはハラスマント警告ができるシステムを解除して、ヤハトを挟むようにして寝転ぶ。幸い詰めれば布団には3人も入れる。少し心臓が高鳴るが、時間が経つにつれて眠気が来るので私は言つた。

「では、おやすみなさい。イーディス」

「ええ、おやすみなさい。アリス」

そう就寝の挨拶をして、ヤハトの頬をゆっくりと撫でながら言った。良い夢を見られるように願いながら。

「おやすみ。良い夢を見て下さい（ね）ヤハト（君）……」

そして私達の夜は過ぎていった。

## 現実

んんつ・・・・・朝か？日の光が目蓋越しに見えて眩しい。そして何か柔らかいものに触れてるような・・・一体何だ？

俺は疑問に思いながらもゆっくりと目を開く。すると目の前には一面肌色だった。そして何か吐息が聞こえるが何なのかが分からぬ。ん・・・何だこれ？

何かも分からないので迂闊に動く訳にもいかず、視線だけを動かすとそこには完全に予想外の光景があつた。

「んんつ・・・・・すう・・・・・すう・・・・・」

何故か隣で白いワンピースを着たアリスの寝顔があつたのである。・・・ちよつと脳内のキヤパシティを超えたわ。何これどうなつてんの？俺は若干、否かなりテンパつて目の前に映るアリスの顔から目を逸らして反対側に顔を向けると。

「・・・・・すうすう・・・・・」

反対側にはイーディスがいた。・・・・何でこうなつたんだ？昨日は俺はアリス達と話していく途中で寝てしまつた筈。俺は昨日の事を思い出して思考がほんの僅かに冷静になつた時、俺の右横で寝ているアリスが目を覚ましたようで声を掛けてきた。

「・・・・・おはようございます、ヤハト。よく眠れましたか？」

「・・・・・あ、ああ、眠れはしたんだがな。如何して2人が隣で寝ているのか説明をくれないか？」

俺が若干テンパりながらもそう聞くと、アリスは寝起きなのかとろんとした柔らかい瞳で俺を見据えた。鼓動が速くなつた気がするが、態度には出さないように努める。そしてアリスが静かに言つた。

「昨日、貴方が部屋で眠つた後に私達は部屋に戻ろうとしたのですが、貴方の事が心配だったので此処で就寝させてもらいました」

どうやら心配を掛けていたようだ。アリスの言葉にどう返せばいいのか考えているとアリスは俺の頬を触れる。俺は驚いて身を硬直させるが、アリスは頬を撫でながら完全に目を覚ましたのか、凛とした瞳を向けてゆっくり言つた。

「・・・ヤハト、絶対に独りで抱え込まないでください。何かあれば私達が支えますから」

俺はその言葉に戸惑いながらも頷くと、アリスはふつと微笑んで頬を返して身体を起こして立ち上ると未だ寝ているイーデイスを起こし始めたので俺も身体を起こして立ち上ると装備を着て、顔を洗いに洗面所に行つた。

この世界では顔を洗わなくとも日脂といつた汚れは付いていないので顔を洗う意味はないのだが、習慣になつてるので洗いに行く。習慣となつた動きは、それが些細であつてもそうではなくて中々抜けないものだ。

「はあ・・・」

授業に身が入らない。先生に当たられた時も気が付かない場合が多くなった。同級生の友達からも心配されているのだが、言ったところで何かが変わるわけではないので、何でもないと言つて話題には出さない。

お兄ちゃんが『ソードアート・オンライン』に閉じ込められてから1ヶ月が経つた。最近、奉仕部の方でも一悶着あつて色々と悩んでいる様子だつたお兄ちゃんが修学旅行の事で色々あつたんだろうなと思つて事情を聞き出そうとした。

しかし、如何しても話そうとしなかつたお兄ちゃんに食い下がり、その結果喧嘩となつた。そして喧嘩となつて双方共に口数が減つてしまつた。そのまま日々は過ぎていき、ある時期になつてお兄ちゃんがまた悩んでいる様子だつたのでやはり普段は家でダラダラして休日には子供番組を見たり、ラノベを読む時、たまに『フヒツ』と気持ち悪い声を洩らしてしまつた兄だが、やはり自分にとつては唯一無二のお兄ちゃんなので私は喧嘩した状態から仲直りしてお兄ちゃんに話を聞いた。

お兄ちゃんは奉仕部に生徒会選挙のことで依頼が来て、雪乃さんが立候補してしまい、奉仕部の関係が崩れてしまうことを恐れていた。結衣さんも敏感に察知してそうさせないように動いてはいるみたい

だが、著しくないのでお兄ちゃんはどうしたら良いのか相談にきたらしい。いや、正確にはお兄ちゃん自身が動くに値する理由が欲しかったようだけど。普通ならそれは自分自身で見つけなきやいけないのだが、過去に色々あつた所為か、物事に対して何か裏があるので？と常に疑つて理屈や理由を探してしまったスタンスになつたお兄ちゃんは行動するのにも理由を求めてしまう。ただ、こうしたいからと、自分自身の願望を出すことを恐れてしまつたのだ。

糺余曲折があつて生徒会選挙の依頼が解決したようだが、奉仕部の空気は重いままでお兄ちゃんの様子も余裕がない。お兄ちゃんにとってあの空間は自分自身を許容してくれて自然体でいることができる空間だった。あの空間を今の兄が喪つてしまえば中学のあの頃以上になつてしまつたんだろう。

しかし、考えてみれば小町達にも原因はある。勝手に休日に予定を入れて千葉村へ連れて行つたり、義姉ちゃんと騒いでは雪乃さんや結衣さんと一緒にお兄ちゃんを振り回していた。お兄ちゃんが優しいだけで本当は嫌だつたかもしれない。

それに雪乃さんや結衣さんも少しはつきりしていない。お兄ちゃんにあれ程のダメージが残るような言い方をしてしまつたら仲が崩壊してしまうのも領ける。結局修学旅行の原因を聞いてないので原因を知りたいところだ。

そうして身の入らない間々授業を終えて、お兄ちゃんの入院している病院に面会に行く。お父さんもお母さんもなるべく様子を見に来ているようで、偶に一緒に行くことがある。いつもお兄ちゃんを放つておいでいるが、本当はお兄ちゃんのことを大切に想つていてゲームの中に閉じ込められたことを知つた時は2人とも泣いていた。

お兄ちゃんの病室に入る。お兄ちゃんは今も目を覚ます様子もない

く横たわっている。1カ月が経つたからか少し痩せているように見える。私はお兄ちゃんの隣に椅子を置き、お兄ちゃんに話しかける。

「お兄ちゃん、今如何してる？もうクリスマスも近いよ。雪乃さん達にはもう会えた？」

語りかけてはお兄ちゃんの手を握って、生きていることを確認するようになっている。ちゃんと手に血流が回っていてじんわりと暖かい。

「……早く、帰ってきてよ。お兄さんがこのままだつたら受験にも集中出来ないよお……」

嗚咽を堪えて言つていると、ノック音が鳴つた。看護師さんだろうか。そして入ってきた人物を見て言つた。

「……陽乃さん」

「……今良いかな？小町ちゃん」

明るい様子はまるで消え去ったかのような様子で挨拶する元気もないのか、僨くて仄暗い微笑みを向けて来た。

今回の事で1番ダメージが大きかったのは陽乃さんと平塚先生だつた。ナーヴギアを雪乃さんや結衣さん、戸塚さんや沙希さん達といつたお兄ちゃんの知り合いに配つてゲームさせてしまつたから。死地に送り込んでしまつたと自責の念に駆られて、陽乃さんは3日間、部屋から出て来られなかつたらしく、何も喉を通らない状態だつた。平塚先生も相当参つてしまつていて、実家に帰つて休養を取つている。そして陽乃さんは外には出られるが、全く覇気がなく、目にも隈が出来てゐる。

私達は会話もなく、近くのカフェに行つて席に着くと、陽乃さんがメニューも頼まずに話し始めた。

「小町ちゃん、今回貴方の知り合い全員があの世界に閉じ込められてしまつたでしょ？」

「はい・・・」

「それで、私達雪ノ下家もソードアート・オンラインとナーヴギアの開発に関わつてから手を尽くして外部からの侵入でログアウトさせようとしているんだ。その過程でゲームの中の様子を見ることが出来たの」

私はその言葉に思わず、本当ですか!?と立ち上がって聞いた。陽乃さんは頷く。店員さんがこつちに来て注意してきたので、すみませんと恥ずかしくなりながら、もう一度席に座ると陽乃さんは話し出す。

「それで比企谷君は今も無事に生きていて、小町ちゃんは意外に思うだろうけれど彼はゲームの攻略をしようとしているんだ。しかもレベルはトップクラスでね」

その言葉に対して私は意外には思わなかつた。お兄ちゃんは嫌々と面倒臭い様子を見せながらもやる時はきつちり結果を残すからだ。お兄ちゃんが行動する時はやるべき目的がはつきりしているときだ。私は何処か嬉しく思いながら、ふと気になつたことを聞いた。

「お兄ちゃんの事は分かりました。それで何ですけど、雪乃さん達とは一緒に行動していないんですか？」

「うん、一緒に行動するどころか一度も接触することすらないかな。雪乃ちゃん達は混乱状態から抜けるのが遅かつたのか攻略には参加

してないし」

無理も無い。ゲームの中で死ぬと現実世界の自分自身も死ぬなんて、こつちと全く同じだ。いや、モンスターと戦う事になるのであつちの方がもつと怖いはずだ。陽乃さんは続けて言つた。

「それに、雪乃ちゃんは良いんだけどガハマちゃんが1週間前まで引き籠もつていたから、かなり出遅れてるみたい。隼人達のグループの中にも最近までモンスターと戦うことが怖くてフィールドに出られない子が居て戦わない期間が長かつたから」

雪乃さん達の詳細な動きは分からぬけど、グループのメンバーの中に1人でも精神が参つてしまつている人がいると何かの拍子に崩れて、そこからグループが瓦解してしまふ可能性は十分にある。だからそれを避ける為に戦う機会を少なくしていたのだろう。

それしてもお兄ちゃんと雪乃ちゃん達の空気が悪いとはい一度も接触すらないとは思わなかつた。それにお兄ちゃんは1人で行動していたのだろうか？ いくらお兄ちゃんが1人が好きだとしてもこのゲームは完全に初心者なので誰かと一緒に行動していると思うんだけど。陽乃さんにお兄ちゃんと行動を共にしている人がいるか聞いてみる。

「比企谷君と共に行動している人は2人だね。しかも2人共女性で初日から行動を共にしているみたい」

「それは本当ですか!?」

私は驚き、事実かどうか再度陽乃さんに確認する。陽乃さんが頷くので驚きが隠せない状態のままで私は考える。お兄ちゃんが女性と、しかも2人もいる状態で行動している？ 余程の事がなければ、あの兄

のことだ。美人局とかなんとか言つて逃げるはずだ。そうでなくとも今のお兄ちゃんは雪乃さん達とギクシャクしていて、人と行動を共にすることはし難い状態だ。私はその2人の女性について聞くが、陽乃さんは首を横に振つた。

「流石に個人情報までは政府とかから緘口令が敷かれていて未だ掴めてはいないんだ。でも、少なくとも比企谷君はリスクリターンの計算は正確だから大丈夫だと思うよ?」

「まあ、うちの兄はヘタレですからね・・・」

私は欲しい情報を貰つて整理して考える。雪乃さん達と一度も接觸すらないなんて、それどころか知らない2人の女性と行動しているとは流石の小町も予想していなかつた。話しき一度区切つてコーヒーを注文して、コーヒーを飲んで一息ついた後、陽乃さんが再度話し出す。

「そういうえば小町ちゃん、修学旅行で何があつたか聞いた?」

「・・・いえ、殆ど聞いてません。やっぱりお兄ちゃんに何かあつたんですね」

陽乃さんは、私の答えを聞くとお兄ちゃん達の修学旅行の出来事を話し出す。お兄ちゃん達が受けた依頼、振られない告白の支援、グループの現状維持。そしてその上でのお兄ちゃんへの雪乃さん達からの解消法否定。まあ雪乃さん達に何か言われて落ち込んでいたのは察しはついてた。私は長考する。お兄ちゃんの方法を考慮して、雪乃さん達の言動を知つて、グループの依頼者の依頼を吟味して。

そして私はゆっくり陽乃さんに言つた。

「……お兄ちゃん達は依頼を受けるべきじゃなかつたですね。元はと言えばグループの恋愛事情ですし、結衣さんも応援したいのは分かるけど、この依頼は絶対に受けない方が良かつたです。最初に依頼してきた戸部さんも恋愛に関して振られない告白の支援とかふざけてんのかと思いますし。海老名さんつて人もグループの現状維持を関係の無いお兄ちゃんや雪乃さんに頼むなつて思います。葉山さんに至つてはリーダーなら自分で責任を持つて言いたいです」

「お兄ちゃんは何でもかんでも1人で抱え込みすぎだし、雪乃さんも出来ることが殆ど無い事が分かつていて筈なのに結衣さんに流されて受けちゃいけないので受けたのは自分なのに殆ど何も出来ないでお兄ちゃんの解消法を聞かずに否定してしまってし」

お兄ちゃんの嘘告白で動搖して言つてしまつたのも分かるし、どんな思いで言つたとかも想像出来る。そんな方法を取つたお兄ちゃんも悪いとは思うけど、でもそもそも依頼に反対していたお兄ちゃんを振り切つて受けた依頼だ。それを受けた雪乃さんと結衣さんはお兄ちゃんが如何してそんな方法を取つたのかを最初に聞くべきだつた。最初から否定してはいけなかつた。

「もしも依頼を無事に終えてたらどうなつていたんでしょう……」

私はやがて呟くように言うと陽乃さんはカフェの外を眺めながら言つた。何処か落胆してつまらなそうな声で。

「……多分、遅かれ早かれこうなつてたんじや無いかな？生徒会選挙で比企谷君は修学旅行の時と同じような方法を取りそだもの。まあ、取らなかつたにしても今まで通りにはいかなかつたと思うなあ」

何で、そう言い切れるの？何で、そんなにあの3人の関係を淡々と怒ったような或いは憎んだような言葉を言うの？私は陽乃さんの言葉に驚きと僅かな怒りを抱きながら聞き返した。

「…………どういうことですか？」

「それはね、あの3人は互いに依存し合っているからだよ。雪乃ちゃんはガハマちゃんと比企谷君に、ガハマちゃんは雪乃ちゃんと比企谷君に、そして比企谷君は雪乃ちゃん達と言うよりは奉仕部で作られた空間に、かな」

「…………でもそれはある程度だつたら仕方ないことじゃないですか？」

私の抵抗じみた言葉を陽乃さんは私の方に向き、覗き込むようにして見る。私は心臓を絶対零度の手で驚掴みにされたように身体を硬直させる。まるで指一本ピクリとも動かせない。陽乃さんの瞳の深淵にあるどろどろした何かが蠢いていた。そしてゆっくり、何処までも平坦な声で、だけれども何処までも冷たく言つた。

「…………ある程度じやないから駄目なんだよ。特に雪乃ちゃんの場合は。雪乃ちゃんの本質は依存だからね。1番マシなのはガハマちゃんかなあ。だけどあの子も我儘だから……」

「比企谷君は雪乃ちゃん達には本当に勿体無いよ。もしもあの子が私と同じ年だったら絶対に、ぜーつたいに――――――逃がさないのに♡」

雪乃ちゃんは見限つちゃつたんだから。と陽乃さんは笑いながらそう言つた。私は思わず身ぶるいしてしまつた。この人は本当に3日間引き籠もつていた陽乃さんなのか？家族、それも妹に向ける言葉ではなかつた。同じ人間とは思えない。お兄ちゃんが陽乃さんを魔

王と言つていた理由がわかつた気がする。

私はそれ以降コーヒーを唯、喉に流し込む作業をして会計（陽乃さんの奢り）を済ませた後にそのまま家に帰つて行つた。雪乃さん達のお見舞いに行く余裕は今の私には有りはしなかつたから。

―――『死』―――について考えたことはあるだろうか？

寿命での衰弱死や病気での死、或いは事故や事件に巻き込まれたことによる死、そして自決による自害の死。幸福、喜び、安堵、悲しみ、憂い、哀れみ、焦り、諦め、憤り、怒り、憎しみ、恐怖、嫉妬……。様々な感情が見え隠れするだろう。

そしてそれを感じる人間は残された側の人間だ。先に逝つてしまつた人間には決して分からぬものだ。そして残された人間には少なからず影響があつた人間が死んだ時、どんな影響があるか。良い影響か悪い影響か、それとも――――――――

パリインとガラスが割れたような甲高い不快な音がなる。普段ならそこまで不快に思わない音でも……今回だけは……身の毛がよだつほど身体が不快感を示した。

「…………」

「…………デイア…………ベル…………」

思わず、息を飲んだ。呆氣ない死を証明する音と青いプログラムの残骸、こうも呆気なく死を迎えると思い知らされる。何も残らず、生きた証があつたのかどうかも定かではない程曖昧に感じる。最初から何もない。死体、其処で死んだという証明する視覚情報がない。覚悟していた筈なのに肝心なところで身体が動かなくなる。

そして俺は恐怖という感情がせり上がる。此処で死ぬという恐怖。残された家族へ何も言えずに、何も残せずに死んでしまう恐怖。彼奴等に此処にいたかどうかも知られないで消えて青いポリゴンエフェクトに戻るかもしれないという恐怖。

恐怖…………

目の前が歪み、剣を握っているのか離しているのか、立っているのか座り込んでいるのか、表情が動いているのか動いていないのか、身体のあらゆる所がぼやけて何も感じない。感じられない。

『君、不真面目で最低だね』

『君が傷つくことを痛ましく思う人間がいることにそろそろ気付いた方がいい』

・・・・・ 何も、感じない。

『どうしてそんなやり方しか出来ないんだツ』

・・・・・ 何も、動かせない。

『・・・ 小町が相談に乗つて上げようと思ったのに、もう勝手にすれば?』

・・・・・ 何も、思えない。

『貴方のやり方、嫌いだわ』

『もつと人の気持ち、考えてよ!』

・・・・・・・・・ もう、何も聞こえない。何も見えない。

何も、何も何も何もナニモなにもナにも  
も・・・・・・・・・

『貴方を知りたいのです』

・・・・・ 何も感じない、何も出来ない、何も動かせない、  
何も聞こえない、何も見えない筈なのに。

『こつちから行く事にするよ』

何かが入り込んでくる。真っ白か真っ黒かも分からぬ目の前に金色の長髪と灰色の長髪が見える。そして蒼い瞳と紅い瞳がこつちを見据えた。

『未だ終わつてないでしよう（よ）』

・・・・俺に期待なんてすんな。お前らを守ることは出来ねえよ。

『自分で自分の身は守ると言つたでしよう？』

『それよりもヤハト君は前を向いて、闘つて欲しいんだけど』

前を向いて闘え、とか強者の理論だろう。俺みたいな陰湿で、卑怯で、最低なぼつちには無理だ。

『陰湿で、卑怯で、最低なやり方でもいいです。貴方のやり方でやつて下さい』

『前を向いて闘えるなら、それでも良いんじゃない？私達は君を否定しないんだし』

良いのか・・・・？そんなやり方でも・・・・。

『ええ』

『うん』

・・・・・分かつた。陰湿で、卑怯で、最低なやり方でやつてやる。ヒーローなんざ俺には力不足で出来ねえし、この状況を切り開ける（ご都合主義みたいな力もないが、せめてヒール役は担つてやる。

ヒールと言う配役は俺の、比企谷八幡の、十八番なのだから。ぼつちの俺なりに抗わせてもらうか。

朧げな感覚が鮮明になってきた。脚に、腕に、剣を持つ手に力が入ってきた。目の前の敵――『イルファング・ザ・コボルドロード』を泥々と濁つた瞳で睨みつけるように見据える。それと同時に深紅の瞳で俺達プレイヤーを睨め付け、腹の底から雄叫びを上げた。

『グルガアアアアアアアアアアアアアツ――!!!』

未だ戦いは終わってない。俺は今も茫然としているキリトの前に立つ。それにキリトは反応した。

「ヤ・・・・ハト・・・?」

「茫然と突つ立つてゐるだけなら引つ込んでけ。邪魔だ」

「そ、それh「突つ立つてゐる間に他の奴らもディアベルの二の舞になるぞ?」ツ!」

「お前は、ディアベルに託されたんだろ? 憎え自分勝手な頼みだがな」

ボスに単身で突つ込み、レイドの連携を崩して、そして今現時点でこの場を混乱と恐怖の渦中に突つ込ませて死んでいつたディアベルに、ボスを倒してくれ。と自分で無理だからその役目をキリトに押し付けた。

「そんな役目は俺はごめんだね。だから俺のやり方での敵を倒す」

そうしてキリトに振り向く。キリトはゆっくりと立ち上がりつて剣を握る。そして俺の腐った眼を力強く見返して言つた。

「俺も、死にたくないから……生き残りたいから、闘う。闘つて、勝つて元の世界に帰るんだ！」

そして俺の横に並び立つ。するとその更に隣に紅いフードットケープのフェンサー、アスナが、そして俺の左隣りにグレーのフードットケープから覗かせる金髪蒼眼の少女、アリスと灰色の髪の紅眼の少女、イーデイスが立つた。

「私も闘う。パーティーだし」

「仲間を支えるのがパーティーですからね」

「支えるけどあんまり無茶はしないでよー？サポートが大変なんだから」

ボスを見据えながら言う女性陣に苦笑しつつ、俺はキリトに視線をやる。キリトは頷いて深呼吸をした後、力強く宣言した。

「……行くぞッ！」

そう言つた瞬間に俺達はボスに向かつて全身全霊を掛け、駆け出した。

彼は進んで灰を食い、彼女らは見失う

駆け出した俺たちに向けて、『イルファンング・ザ・コボルドロード』が吠えて、手に持っている刀『野太刀』を振り落としてくる。俺たちはそれぞれ横に跳んで太刀による攻撃を躱した。そしてキリトが大声で言つた。

「A G I型のヤハトとイーディス、アスナはボスを攪乱させてくれ！絶対にソードスキルの攻撃は受けるなっ！！S T R型の俺とアリスで捌いて重い一撃を入れる！」

『了解!!』

キリトが言つた言葉に俺たちは頷く。バランス型で恐らくはレベルは10を超えていたであろうディアベルがたった3撃で殺されたのだからスピード型の耐久力が無いイーディスとアスナ、そして特に俺はソードスキルを受けてしまえば一撃で終わる。俺は、静かにこの場において最速の自信があるスピードでボスに間合いを詰める。

ビュウッと風を切る音を立てて、俺はボスの膝に向けて三連撃片手剣ソードスキル【シャープネイル】を青いエフェクトと共に放つ。

「グオオオオオオオ!!」

攻撃は直撃して、苦痛で悲鳴の様な雄叫びを挙げるボスに向かつてイーディスとアスナが【パチカル・アーク】と【リニア】を放つて追い討ちをかける。そしてボスが反撃として太刀でソードスキルを使おうとしてくるので、俺達はキリト達と入れ替えるように後ろに跳ぶ。

「スイッツッ！」

「ハアアアアツ!!」

アリスとキリトが飛び出してボスがソードスキルで攻撃を放つ動作をする瞬間に【ホリゾンタル・アーク】を放つてソードスキルをヤンセルさせる。ボスは体勢を崩して膝を付くので、俺は前に出て突進型ソードスキル【ソニツクリープ】で攻撃を加えておく。

ちらつと後方を見ると、未だディアベルが死んでしまった事を受け入れられていない様子で、キリト達の他のプレイヤー達は動き出さない。戦わないんだつたら退避するかぐらいしてくれませんかね・・・ボスのライフは後1ゲージの七割くらいか。ヒットアンドアウエイ戦法が通用する間は良いが、せめてタンク役が欲しい。かなり神経使うし、しんどい。働きたくないのになあ。

そのままボスは体勢を整えて太刀を振るうので俺は後ろに跳んで躲す。そして横から回り込んで攻撃を入れてタゲ役を受け持つ。そして俺は大声で言つた。

「タゲ役はやつてやるからキリト達はその間に攻撃しろ!」

その言葉にキリトとアスナは驚き、アリスとイーデイスは悲鳴の様な声を漏らした。

「そんな!無茶だ、ヤハト!」

『ヤハト（君）!?』

大丈夫だ。俺のスピードはキリト達の中でも最速だ。ボスの攻撃を受けるな。と言われるならば防御ではなく回避すれば良い。敵モブに捕まらない様に紙装甲にしてまでステ振りしたのだ。今使わな

いでどうする。多分ボスの攻撃では捉えられない。俺はゲーム特有の疲労のない事を利用してボスの周りを駆け回る。ボスの背中をキリトの方へ向ける様に立ち回る。

「ヤハトの為にも早く終わらせるぞ!!」

キリトがそう言い、一斉にボスの無防備な背中にソードスキルを直撃させる。一斉に攻撃を直撃させた事で一気にボスのライフが削られ、五割と四割の境目まで来た。これなら行けるとそう思った。

しかし、まるでその油断を待つていたかのように、ボスが動き出した。飛来する太刀を躊躇すが、予想外の速さで切り返しが来た。俺は何か反応して剣で受けるが、吹き飛ばされる。その光景を見てアリスとイーディスが悲鳴を挙げる。

「ヤハト（君）ツ!!」

そして駆け寄つてくる。しかし運悪くボスの攻撃射程内に入つてしまつた所為で死を運ぶ凶器が2人に振り落とされようとする。俺は思わず今後は絶対に出さないと言えそうな程の大声で言った。

「馬鹿野郎ッ!!俺のことは良いから後ろに退がれえええ!!」

しかし咄嗟の行動に人が反応を切り替えることが出来る訳もなくアリスとイーディスは後ろに跳ぶことも出来ずに硬直する。2人に確実に迫る『死』を見て俺の頭は真っ白になつた。

・・・・やめろ、これ以上俺の自分勝手に2人を巻き込んで絶望したくないんだよ。一度とあんな思いを味合わせられたくないんだよつ・・・・

小町、母ちゃん、親父、戸塚、材木座、川崎・・・由比ヶ浜、雪ノ下。彼奴らと同じで此奴ら2人も大切なんだよ。だから、動け、動いてくれよ、俺の身体。こんな所で動けないなんて理屈を押し通させるな。俺らしい卑怯で陰湿で最低な屁理屈やり方で間に合わせる。

「つ！おおおおおあああああ！」

まるで雄叫びの様な声で身体の硬直を打ち消して立ち上がる。そして駆ける。今までの中でこれ程、一分、一秒、一瞬が長く感じられたことはなかつた。

走る。疾る。そして2人を抱え込んでボスの飛来する太刀を躱す為に飛び込んだ時に脚に太刀が触れかけそうだったが、無事に躱してボスの攻撃は地面に当たりガシャアアーンと轟音がやけに響いた気がした。

「・・・・はあ・・・・はあ・・・・い、生きてるか？」

俺は体力を消耗していないのにも関わらず息切れしながら呆然と俺に押し倒されている2人に問いかけるが、反応が返ってこない。俺は申し訳ないと思いつつ、2人の頬を叩く。

「ハツ！ヤハト（君）!!大丈夫（ですか）!?

俺は2人を放して起き上がると漸く2人が反応を返したので俺はすぐさま武器を持ち直してボスの方へ向いて言つた。

「とりあえず話しば後回しだ。まだボスは死んでないからな」

今はキリトとアスナが持ち堪えている。俺はボスの間合いを詰めようと動き出しが、その時、アスナがボスの攻撃によつて吹き

飛び、追撃されかかっていた。やばい！キリトが叫んでボスの攻撃を逸らそうとしているが間に合わない。俺もこの距離ではどうしようも出来ない。そしてアスナに攻撃が当たるとした時、何者かが間に入つて攻撃をガードした。

「グッ！遅れてしまつて申し訳ない！いつまでもダメージディーラーのアンタ等に壁役張られたらタンク役の名が廃る!!ボスの攻撃は俺たちで何とかするからアンタ等は攻撃に専念してくれ！」

ボスの攻撃を受け止めたのは最初の攻略会議の時にお礼を言つてきたスキンヘッドでガタイの良い黒人がリーダーであるパーティーパーだつた。アスナは礼を言つて下がり、俺はキリト達と合流する。

「ヤハト達とアスナ、無事か!?」

「ああ、何とかな・・・・タンク役が動き出してくれて助かつた」

正直、動き出してくれなければこの中の1人は確実に死んでただろう。キリトが頷く。そしてアリスとイーディスが俺に言う。

「ヤハト、今後絶対あんな無茶だけはしないでください！次はいかなる理由があつても許しません!!」

「お願ひだからヤハト君は自分の身を大切にして欲しいの。君が死にそうになつた時、本当に怖かつたから・・・・」

「・・・・すまん」

アリスとイーディスに懇願されて俺は素直に謝る。俺が勝手にやつた事に2人を巻き込んでしまつたのだから当然だろう。キリトとアスナも頷く。そしてキリトが言つた。

「とりあえずタゲ役はタンク役がやつてくれるから俺達はその間にソードスキルを叩き込むんだ！」

『了解（おう）！』

そして再び五人でボスに向かつて駆ける。

「フツ！」

「ハアアアアツ!!」

最速である俺が最初に【ソニックリープ】を加える。そしてボスの仰け反つた背中に回り込んだアリスとイーディスが同時に【ホリゾンタル・アーク】を放つ。

『ガアアアアアアアアアツ!!?』

「セアアツ！」

「ヤアアツ！」

そして苦痛で雄叫びを挙げるボスに向かつてキリトとアスナが抜群のコンビネーションで【ペーチカル】で切り上げ、【リニア】での間を補う様に突き、【スラント】で振り下ろし、切り裂く。ボスのゲージはレッドの数ドットにまで削られる。後一撃入れられたら終わる。しかしボスは最後の最後で悪足掻きにデイアベルを殺したソードスキルである【辻風】を放とうと飛び上がる。狙いは・・・アスナかつ！

あそこまで飛び上がられたら届かない。俺はアニールブレードを

逆手持ちにして、槍投げの様な動作を取る。それと同時にキリトが黒人の背を使って跳んだ。

「終われえええ!!」

そして俺の投剣ソードスキル【シングルショート】とキリトの【ソニッククリープ】が同時にボスに決まり、ボスはそのまま青いポリゴンエフェクトとなつて爆散した。

・・・・・終わったのか？俺の目の前には電子文字が空中に浮かんでいる。その文字は『Congratulation』と『Last attack bonus』だった。そしてその文字の意味を理解した瞬間、俺の身体の力が抜けた。

『オオオオオオオオッ!!!』

他のプレイヤー達の喜びの雄叫びが耳をつんざく程鳴り響く。俺はその場で座り込む。

終わった・・・今日はもう働かねえぞ。一生分働かされたしな。そして座り込んでいるとアリスとイーディス、アスナ、そしてキリトが合流して俺に話しかけてきた。

「お疲れ様です。ヤハト、今日は活躍しましたね」

「本当にね。危ない場面もあつたけど、とりあえずお疲れ様」

「ヤハト、ありがとな。お前が行動してくれなかつたら俺もヤバかつたかもしない」

「・・・・お疲れ様、ヒヤヒヤさせられたわ」

「…………おう、お疲れさん」

素直に労いの言葉を受けとつた。此奴らが居なかつたらボスの撃破は不可能だつたろうからな。そして今度はタンク役を担つていた黒人がこつちにやつて來た。改めて見るとデカいな。

「Congratulation! 見事な指揮、そして剣技だつた。この勝利はあんた達のものだ」

俺達に向けてのお礼に各々頷くなどの反応を返した。ボスを倒すことは出来た。でもレイドを纏めていたディアベルが死んだのはかなりの痛手だ。彼奴にリーダーとしての素質があつたから途中までは何事もなく順調にいけたのだ。助けられるなら助けたかった、なんて甘い考えが一瞬俺の頭を過ぎつた。その時。

「何でや！ 何でなんや!!」

喜びムードをぶち壊す様な怒りの籠つた声が響いた。その声に歓声は止み、その声の主へとこの場にいる全員が視線を向けた。

「何でディアベルはんを見殺しにしたんや!!」

関西弁で怒りの声を挙げるディアベルを慕つていたキバオウ。『見殺し』と言うワードに困惑の声が挙がり始めた。・・・・まあいな。

「あの黒い坊主はボスの武器が違うことを知つとつたやないか！ 何で見捨てたんや!!」

その言葉にキリトへと注目が集まる。ディアベルが死ぬ直前、キリトはボスの武器がタルワールと言う曲刀ではなく刀である野太刀と

気づき、後ろに跳べ。と指示を出したのだが、レッドゲージのバスを攻撃しようとしたディアベルは止まらずに、そのままソードスキルが直撃したのである。しかし、レッドゲージのバスの武器がβテスト時と違う事は警戒していたが、直前まで誰も気付かなかつたし、キリトに非はないと俺は思うのだが。

しかしキバオウのキリトに対する糾弾は止まない。女性陣はキバオウを睨めつける。

そしてその言葉は波紋の様に浸透していく。どんどんキリトを責める空気が出来上がる中、キバオウは更に激昂して言つた。

「違うことを知つときながらディアベルはんを見捨てたんや！ワイ等に詫び入れろやッ！」

『情報を隠してるなんてヤバいだろ・・・』

『分かつてながら見捨てるなんて最低じゃねえか、人殺しだろ』

そんな声が上がり始める。・・・正直に言えば、此奴等はディアベルが死んだ責任をキリトに押し付けたいだけだ。なので同調して責任の矛先を発言力の弱いキリトに押し付ける。

ああ、全くもつて反吐がでる。少しも自分に責任があると思わず、自分は正しいと思う傲慢さが。まるで鏡を見せられている。修学旅行で正しいと思い込んだやり方をして、彼奴等に否定された様に。

感情論には感情論でしか決着が出来ないと体育祭の時に学んだ。今回も感情に寄る決着でしか解決しない。

—————悪い、雪ノ下、由比ヶ浜。やつぱり俺はこのやり方

しか分からぬ。

「……k 「はあー、お前等馬鹿なの?」!」

キリトが何か言い始める前に俺はワザとらしく溜息を吐いて言った。その言葉に全員が俺に視線を向ける。

「何やど・・・もういつへん言うてみいやわれえ!!」

キバオウが俺の挑発によつて怒りを爆発させる中、俺は変わらずに言つた。

「・・・何度でも言つてやるよ。馬鹿じやねえのか? そいつの悪口を言つてる奴。此奴に見殺しにされた? 見殺しにされたつて言うなら何での時お前等が助けに行かなかつた?」

その俺の言葉に一瞬言葉を詰まらせる。集団の中で行動している奴の行う事は責任の分散だ。皆で頑張つたけど出来なかつた。だから仕方ないと。責任の在り処を分散させ、結果からくる罪悪感や悔しさを分散させる。そうすることで何時も通りにまた行動していく。今回はたまたまキリトが生贊にされた。意見が通されずらい人間の方が責任を押し付けやすいからだ。

「で、でも其奴は刀の事を知つてたじやないか! 最初から言つておいでくれれば・・・」

俺はまた溜息を吐く。そしてその言葉を言つたシミター使いにこう返す。

「事前情報がこの一回限りの戦闘で全て揃つてゐるわけねえだろうが。気付いたのは本当にデイアベルが動き出した直後だ。そして此

奴は後ろに跳べ。と指示していたにも関わらず、ディアベルが後ろに跳ばなかつたからだ」

レッドゲージに入れば敵の戦い方が変わるのはこの場にいる全員が分かっている。あの時ディアベルはタンク隊が前に出て確実に防御すべきところを敢えて単独で攻撃しようとした。それはつまり何かを狙っていたと言う事だ。そして心当たりもあるが、死んでしまつた人物に死体蹴りの様な事はしても仕方ないので敢えて口には出さない。

「あんた達が責めて良いわけはない。何故なら行動に移すことが出来なかつたんだからな」

キバオウは悔しげに顔を歪めながら黙り込む。感情論でしか決着が付かないと言つたが、その感情論の綻びを突いてやれば良い。そうすることで行き場のない感情は自分のところに帰つてくる。しかし、それはあくまで相手の理性が残つていた場合だ。

「だつたら情報屋の『鼠』の情報は殆ど意味が無いじゃないか!!俺達はその情報を元に行動してるんだぞ!!」

シミター使いは論点をずらしにかかる。どうしても自分の責任とは思いたくないようだ。その言葉に女性陣がキレかかる。

「貴方、本当にいい加減に・・・!」

激昂しかけた女性陣を俺は手で制す。感情論を感情論で返せば泥沼化する。なので出口を作つて流してやればいい。俺は言った。その言葉を。

『鼠』の情報は俺が脅して独占してたんだよ。俺はヨテスターだから

な

その言葉に全員が固まる。キリト達は何を言っているんだと言う顔だ。俺は続ける。

「まあ、だから刀である攻撃を知つてたし、あんなに冷静に戦えたんだけよ。此奴等は俺が利用してただけだ。あんまりにもあんた等が滑稽だからネタばらしした訳だ。んじゃ、アクティベートしておいてやるからさつさと第一層で待っているプレイヤー達に言つてこい。『私たちちはβテスターのおかげで攻略出来ました』つてな」

そう言つて俺は呆然となつた空間を抜ける。これで良い。キリトに行つたヘイトとアルゴに行くであろうヘイトを回収する為にキバオウを黙らせたが、こうすればキリトやアルゴに意味のない悪意が向けられる事は無いだろう。彼奴等がいれば攻略は進む。

そして俺は重い足取りで階段を上つていく。その後ろから階段を駆け上がつてくる足音が複数。俺は剣に手をかけておく。そして駆け上がってきた人物達が声をかけてくる。

『ヤハト（君）!!』

俺は声の主が分かつたので剣に手を掛けるのはやめて振り向かずに言つた。

「何の用だ？ アクティベートならしておくつて・・・」

「何であんな自分から敵になるような言葉を言つたんですか！」

アリスのその言葉に俺は一瞬階段を上つていく足取りを止めかけた。しかし、俺は静かにこう言つた。

「…………これが一番効率が良いからだ」

「ふざけないで」

そう言うと今度はイーデイスの怒声が聞こえた。

「効率が良い？ 確かに効率は良いかもしないわよ。だけど、そんな方法で解決していたら、何時かアンタは押し潰れるわよ」

「……はつ、俺はボツチだ。一人で行動していくなんぞ当たり前だし、今までこうやつてきた。惡意には慣れてんだよ。この程度の事は」

その言葉にアリスが俺の腕を掴んで言つた。

「ヤハト……私は貴方に前に言いましたよね、一人で抱え込むな。と」

俺は答えない、答えられない。しかしアリスは続ける。

「貴方が、独りでいることに慣れていたとして、惡意を背負い込むことが出来ているとしても……私達はその方法が最善だとは思いません」

「……」

「ヤハト君、君が惡意を受け持つて誰かに恨まれるのに慣れていてもね。君のことが大切な人にとってはとても辛いよ」

イーデイスの言葉が俺の臓腑を削つた。平塚先生に言われた言葉を思い出す。

「もちろん私達にとつてもそれは同じなんだよ」

分かつてゐる。それはもう重々承知してゐる。でも、誰かが貧乏くじを引かなければならぬのだ。そしてそれを此奴らに押し付けるわけにはいかない。此奴らと攻略組のスマーズな連携を通して通させるかによつて

今後の動きは大分と変わる。βテスターに負けるわけにはいかないと、奴等は必死になるはずだ。そしてモチベの上がつた状態で攻略に挑めばクリアまでの速さは増しに増す。

そう考えて、俺はメニューを開いて『パーティーを離脱しますか?』の欄の下にあるY e sを押した。

「・・・・俺はパーティーを抜ける」

『!?』

その言葉に驚愕したのか声を出せないアリスとイーディス。そして駆け上がつて付いて来たであろうキリトとアスナ。俺はそのまま続けて言つた。

「お前らの所為で一人で悠々自適に送るはずだつた生活がパーティーだ。やりたくもないレベリングにも付き合わされるし、戦闘は足手纏いのお前らを俺が尻拭いしなきやで散々だつたよ」

俺は振り向いて、冷たく、うんざりした様子で言つた。胸がズシリと痛むのを感じながら。

「礼も良いつて言つてんのに押し付けようとしてな。いらんつて断んのにどんだけ気遣つたか」

悟られるな。俺はヒールらしく此奴等を嘲う。

「正直に言つてやる。俺はお前らが鬱陶しくてしようがなかつた」

「だけど、俺もボス戦までは不安だつたから仕方なく組んでたが、そんな必要はなかつたわ」

そこまで言うとキリトが俺のところまで肩を怒らせながら来て、胸倉を掴んだ。

「ヤハト、お前ツ！」

「はつ、おいおい暴力に頼んなよな。そつちから仕掛けたんだ。こつちも正当防衛でやるぞ？」

俺のにやけ面にキリトの顔が悔し氣に歪んで、俺はキリトの手を振り払い、そのままアクティベートのために全力で駆け上がった。

その間にフレンド登録させられたアリスとイーディス、そしてキリトの連絡先を消した。キリトにはあるメッセージを残しておいた。アルゴは・・・一応、置いておくことにした。

これで良い。これで俺は攻略組の敵になつた。1人は気楽でやりやすい。他人に気を遣わずに済むからな。やはりボツチが最強なのが証明された。

俺が勝手にやつた事に彼奴等を巻き込んで悪意に曝すわけにもいかない。それに、今回の戦いで分かつた。俺は彼奴等に依存していたのだと、このままでは危ないと判断した。

・・・彼奴等を死にかけさせたしな。

だから、独りでいい。俺はアクティベートを済ませて、第二層の入り口に入った。

その時の水晶に映っていた俺の顔は目が更に腐っていて、頬に水滴が付いていた。

## アリアは続き、コーラスへと

ビュンツと風を鳴らしながら地を駆ける。そして牛型の敵モブを三連撃ソードスキル『シャープネイル』で弱点を突いて攻撃すると、リアルな断末魔を上げながら青いポリゴンエフェクトに還つて塵となつた。それと同時に自分の周りにレベルアップを意味する光のエフェクトが出た。

「…………これでやつと十八か」

そう咳き、着ている黒いケープを整えながら、アニールブレードを腰の鞘に納める。未だ第二層で並みの敵モブでは経験値が上がりにくい。優に数百を越える敵モブを処理してやつとレベルを十八に出来た。働くのがモットーで効率良く最低限の努力で最大限のメリットを得るのが理想なのに何でこんなレベルリングホリックみたいな真似してんだろうな……

そんなことを思考しつつもソロプレイをやりやすい様にして、ステータスをAGI寄りに割り振る。これで素早さを上げて誰にも追いつかれないように動ける。これぞぼっちの真髄つてな。

第二層に上がつて数日間、今の最前線となつた此処で、今後樂をする為に必要なことをやつていた。つつてもひたすらレベルリングしてスキル習得とステ振りをしているだけだがな。

「…………つと、来たか」

他のプレイヤーが近づいて來たので直ぐにその場を去る。今の俺はS A Oではちょっとしたお尋ね者になつてゐる。腐つた眼とチートーと $\beta$ テスターを併せたビーターでゾンビーターとかつて文字ら正在被编辑着てゐる。本当にゾンビだつたらデスゲームでも生き返れるからな？後、俺は $\beta$ テスターじゃないんだけど……まあ、あの場で $\beta$ テスターとか言つた所為だけども。

俺がお尋ね者になつた日の後日、第一層の攻略組のリーダーであるディアベルが死んで、攻略組が一分状態になつたというのを隠れて聞いた。一つはあのモヤつとボールが率いることになつた”AINクリツド解放隊”こと通称《ALS》。もう一つがリン何とかとかいう

見た目がディアベルに似たプレイヤーが率いる”ドラゴンナイツブリケード”こと通称『DKB』。何方もディアベルの意志を引き継いだギルドらしい。

リン何とかという奴は知らんけどあのモヤつとボールが $\beta$ テスターであるディアベルの意志を継ぐのは予想外だった。ディアベルが $\beta$ テスターだつて知つたらどう思うんだろうか……まあ、如何でも良いけど。

「…とりあえず、レベルはこれで良いな。んで、今度は必要な武器とかアイテムとか取り揃えておくか」

多分現時点の全プレイヤーの中でレベルは俺がトップだろう。これは自信過剰の可能性はあるが、トップじゃなくとも同等が数人程度だと思う。その中で回避一択でAGIに極振りをしているんだから、スピードでは俺を勝るプレイヤーは居ないわけである。レベルとステ振りはこの世界の絶対だ。決して裏切りの無い事実。……努力は夢を裏切る事はあっても、自分を裏切る事は無い様に。

「……はつ、自分を裏切らないね。何の為の努力なんだかな……」

第二層の迷宮区から通常フィールドに在るプレイヤーの生活圏内に向かう中で呟く。……駄目だな。やつぱり一人だと独り言が増えた。こんな状態の俺を小町が見たらキモいよごみいちゃんとかゴミを見る眼で言ってくんのかな……何それ死にそう。戸塚にも引かれたら本気で青いポリゴンエフェクトに還るんじやなかろうか。

「戸塚か……如何してんだろうな。黒鉄宮に行つて生存を確認しつくかな」

戸塚に川何とかさん、材木座。葉山達グループ、そして雪ノ下達。材木座や葉山達グループは兎も角、戸塚に川何とかさん、雪ノ下達は何故この世界に来ているのだろうな。由比ヶ浜は未だ納得出来そうな想像が出来るが雪ノ下はゲームをする奴ではないはずだ。

……いや、俺が彼奴の何を知った気になつていて。そんな押し付けの思い込みで何度も失敗しているというのに。

だが、雪ノ下達の事だ。葉山も居るし、あの初日の混乱からは脱しているだろう。葉山と雪ノ下を先頭にグループで行動することが今

の時点では最善の選択だ。俺みたいなスペシャルなゾンビーターは除いてな。それに、そんなグループが崩壊するような事は全員が危惧するはずだ。葉山が正攻法で如何にかするだろう。異分子が居なければ上手く回るメンバーだしな。

そう思つて森を走り出ようとした時、僅かな声と断続的な金属同士の擦れたような音が横の方から聞こえてきた。この層には敵モブは牛に、ワスプと言つた蜂型、武器は無いし、攻撃手段に金属製のモノもない。しかし迷宮区に行けば大剣を持った半人半牛のトーラスが居る。もしやトーラスが湧く地点が在るのか？

……巻き込まれないように迂回しよう。モンスタートレインされれば堪つたものじやない。幸い『隠蔽』スキルは発動中だ。スピードワゴンはクールに去るぜ。と言わんばかりにその場を離れようとする。

しかし、金属同士の擦れた音と声……否、悲鳴が不運にもこつちに接近する方が速かつた。

「くうつ!?

十メートル程前に出てきたのは、濃い紫のポニーテールの女性プレイヤー。手には両手斧型の武器の『アイアン・サイス』を持つていた。転げながら出てきたプレイヤー。しかしそんなことが気にもならぬ程焦つていて、このゲームでの命そのもののHPバーは黄色と赤の間であつた。そして、女性が転げながら出てきた場所から唸り声が聞こえてきた。

『ブモオオオオッ!!』

そして地響きと雄叫びと共に出てきたのは大量のモンスター達。しかもトーラス族が混ざっている。彼奴迷宮区のみに湧くんじやねえのかよ。

「くつ……こんのお！」

女性プレイヤーは顔を齧めつつも、体勢を立て直して絶対絶命な状況でも諦めないようで、紅いエフェクトのソードスキルを鎌に走らせて、敵モブに向け横へ切りはらう。何体かのモブは吹き飛び、ポリゴンエフェクトに変わるが、それであつても相手は感情のないNPC。

怯むことなく、女性プレイヤーに攻撃を加えていく。

「く、う……回復が、間に合わない……！」

鎌を楯の要領でモンスターの攻撃を防御するが、それでも少しづつHPが削られてしまう。逃げようにも囮い込まれるような状況になってしまい、逃げられない。

そんな状況になってしまったのは第二層へ来てレベリングしていった時の事だ。第一層が突破されて、絶望に包まれていたこの世界に一筋の光のニュースが瞬く間に広まつた。

そのニュースは情報屋の『鼠』の新聞記事によつて出回つた。その時の記事の写真に女性プレイヤーの知り合いの名前が有つたのだ。その知り合いに会いたくて、必死にレベリングをして、最前線のプレイヤー上位のレベルまで引き上げて第二層に来たのだ。

第二層を見て回りながら敵モブを狩つて、レベリングを行つていた。

しかし、何処かのプレイヤーにモンスタートレインを押し付けられ、逃げながら数を減らす為に攻撃をちよくちよく加えているのだが、如何せん数が減つていてどうには思えない。

ワスプの毒デバフ付きの針攻撃が來たのでサイドステップを踏んで躰すが、サイドステップをする場所に牛型モンスターの突進が来てしまふ。咄嗟の事で鎌で受けようとする。

その時、運悪く足場の悪さで躡いて防御が出来ずに突進によつて吹き飛ばされてしまう。

「キヤアッ!?」

吹き飛ばされて木に叩き付けられた。叩き付けられた衝撃でダメージは無いが一瞬だけ意識が飛び掛ける。そして現実は残酷でNPCのモンスターはその隙を逃してはくれない。立て直す暇も与えず女性プレイヤーを追い込み、取り囮んだ。

「……もう、駄目かな……………ごめんね

明日奈」

モンスターに取り囮まれ、最早覆しようの無い絶望に、力無く、逢いたかつた知り合いに向けて謝つた。女性プレイヤーの紅い瞳から

薄らと光るモノが流れた。牛型モンスターが突進してくる。

その光景を目にする人物は居なかつた、居ない筈だつた。その咳きを聴くまでは。

『ブモオオオオツ!?』

「…………えつ…………？」

自分の命の終わりを思つていた女性プレイヤーは来るであろう攻撃に思わず眼を瞑つていたがモンスターの悲鳴の叫びが聞こえ、来ない衝撃に薄つすらと眼を見開く。すると迫つてきていたモンスターは倒れ伏し、ポリゴンエフェクトを散らして還る。

『キシャアアアア!?』

『ブモオオオオツ!!』

そして次の瞬間、モンスターの大群のいたるところから悲鳴が挙がつた。何やらダメージを受けているらしい。その状況に混乱していると、微かに緑の光が反射している。

「…………ソードスキル…………？一体誰が…………？」

そう女性プレイヤーは呟くと、モンスターの大群のタゲが女性プレイヤーではない誰かに変わり、大群はそのまま離れていく。急転直下の展開に状況を把握出来ずにいた女性プレイヤー。放心して、状況を把握しようと視線を彷徨わせていると自身の足元の前に3個ほどの回復ポーションが置かれていた。

「ポーション…………いつの間に……」

ポーションを恐る恐る手に取る。自身のHPは赤ゲージの十数程度だった。この状況からしてやはり誰かに助けられた。けれど何故わざわざモンスターの大群を肩代わりして、回復ポーションまで置いて行つたのだろうか。よほどのお人好しなのだろうか？そんなことを女性プレイヤーは考えながら、アイテムメニューを開くと自前の回復ポーションを取り出す。そして回復ポーションを飲んで、HPが赤から黄、そして六割程まで回復する。

「…………折角だし、飲んでおこう」

そう呟いて、置かれていた方のポーションを恐る恐る飲む。効果は自前の物と変わらず、状態異常も無かつた。HPも満タンまで回復

し、それを見た時にふつと肩の力が抜けた。

「はああ……助かつた」

命の危機を脱して、思わず安堵の声が洩れる。今程の危機はこの世界がデスゲームに変わった直後以来だ。あれだけの緊張感を味わう羽目になるなんて……

けれど、本当に誰が助けてくれたのだろうか？あれだけ大量のモンスターが居て、一匹残らず攻撃を加えて尚且つ、ソードスキルの光エフェクトが見えるだけで姿を見せない程の敏捷性。少なくとも相手の方がレベルは上で、敏捷性を比較にならない程高い。

「……御礼も言えないなんて」

唯一の手掛かりになりそうな物は足元に置かれていた残り二本の回復ポーションだけ。それも武具アイテムでも無いので、所有者の名前も出ない。

「……残しておこ」

もしもこのポーションの持ち主に会つたら、御礼しよう。そう思つて、メニューを操作して回復ポーションを保存しておく。そしてこの層の『圈内』である。『ウルパス』へ向かうのだつた。

「……これで終わり、かつ」

そう言いながら黒いケープをはためかせつつ、タゲを奪い取つたモンスターの大群の最後の一匹を橙色の片手剣単発ソードスキル『スラン

ント》によつて上段から斬り裂いて、ポリゴンエフェクトに還した。

「…………つはあ～……」

モンスターのポリゴンエフェクトが散るのを見送ると、片手剣を腰鞘に納めて大きく息を吐いた。

「…………何でタゲ奪つたんだろ…………」

経験値も大して貰えないのに。労力に見合つた経験値くらい欲しいもんだ。筋力値をそこまで振つてないからレベル差が有つても、二、三発は打ち込まないといけない。そういう面では敏捷値に極振りのデメリットだ。9：1じやなくて8：2に割り振り変えようかね……

「ポーションを置いてきたが、自前の有つたよな絶対……」

…………まあ、目の前でポリゴンエフェクトに還られて夢見が悪くなるよりはマシだけど。それに最後に咳いてた言葉の事もあるし、回復ポーション三本程度で済むなら易い。それにしても……

「”明日奈”、ねえ……只の偶然の一一致か……？」

その言葉が女の名前でこの世界にいるプレイヤーの中に居て、尚且つ本の少しだけ面識がある奴は俺の知る中でもたつた一人。だが、あの咳きがこの世界の中の奴じゃなく、現実世界の”明日奈”という人に向けられたのだとする可能性も捨てきれないし、この世界の中でも同姓同名のプレイヤーがいるかも知れない。

まあどつちにしろ俺には関係の無い事だろうが…………それはそれでとして、サブウエポンを片手剣からダガーに変えてみるのもありかもしれないな。デメリットの攻撃力の低さは攻撃力を手数で補えば、スピードを活かせる。今更ステータスの割り振りは変えられんしな。

…………アイテム買いに行くか。そう思つて足を《圈内》に向けて運んだ。

「セヤアツ！」

ダツ！と脚を踏み込んで、走る。そして持っている片手剣を構え、牛型のモンスターに狙い澄まし、上段と下段からの十字斬りのソードスキル『バーチカル・アーク』を放つ。それは吸いこまれるように直撃し、敵モブの悲鳴の後に、命を散らした。ふつと息を吐いて、深く被つた灰色のフードマントルの中から周りを見渡す。そのフードからは輝かしい程の黄金色の長髪のサイドテールの髪を覗かせる。「アリスー！ちょっと手伝ってー！」

そんな声に反応して振り返るともう一人の紅いフードマントルと紅い瞳の人物が十数体程の敵モブを剣技を持って捌いている状態で助けを求めてきた。全く、何でモンスタートレインをしているのですか…イーディスは。

「タゲの取り過ぎですよ……はあ」

呆れながらもそのまま観ている訳にもいかないので、直ぐに加勢に入つて、敵モブを殲滅する。最後の一匹を斬り払い、青い光を放つて爆散するのを見送ると同時に息を吐いた。そしてイーディスはフードから灰色のポニーテールの髪を揺らして顔を出しながら謝つてきた。

「ごめん。敵モブのタゲ取りの時にソードスキルが当たっちゃってさ」

「全く、タゲ取りの時はくれぐれも慎重にして下さいと言つたじやないですか」

私も灰色のフードから顔を出してイーディスを注意する。いくら

敏捷値にステータスを割り振っているとはいえ、人海戦術を取られてしまえば逃げ切れないのに。自分達のレベルが十五程あるからまだ対処できる数だつたけれど、油断して命を落としてしまつたら目も当てられない。

「タゲ取りつて案外難しいわね……」彼は平氣そうな顔でこれをやつていたのね

「…………」

「あ、ご、ごめん……考え無しだつたわ」

「……いえ」

イーデイスの申し訳無さそうな表情と声にゆっくりと首を横に振る。”彼”という言葉で思い出すのは第一層でこの世界のプレイヤーほぼ全員からの敵意を持たれて、私とイーデイスと組んでいたパーティを抜けた眼の濁つたアホ毛と猫背が特徴的な捻くれ者。

彼がパーティを抜けてしばらく、第二層が解放されたので、マツピングと階層ボスについての情報クエストを調査していた。もちろんレベリングも忘れていない。

彼が居なくなつてというものの中では戦闘面で、彼がどれだけ重要な役割を担つていたかを痛感していた。彼の行つていた敵モブの絶妙なヘイト管理は私たちには難しく、数の調整などに苦労していた。先程のようにしくじつてトレンインをしてしまう。

……いや、戦闘面だけではない。彼が居たことで表現が難しいが、たつた一ヶ月だが、彼と行動を共にすることが苦ではなかつた。むしろ安心感があつた。絶対的な根拠がない何となくだが、彼と一緒に居れば大丈夫だと思える。

捻くれ者の彼は吊り橋効果だろ。と言うだろうけれど。それでも背中を預けあえると思つていた。

第一層で彼が何のつもりで周囲を敵に回す発言をしたのかを彼が抜けた日から考えた。キリトの批判とアルゴの批判を自分が受け持ち、彼らの批判を無くし、それと同時に攻略組に発破を掛ける為だったのだと思う。攻略組が崩壊すれば、この世界から脱出するのは不可能だから。

彼が敵になる事で確かに攻略組は彼への対抗心で纏まつて指揮が高いとは思う。この手段は効率から見れば最適であると言わざるを得ないかも知れない。けれど最適であつても正しいとは思えない。だからこそ彼に言わないといけない。

「……あ、キリト君とアスナだ」

そこまで思考の渦中にいた私はイーディスの言葉によつて意識を戻してイーディスの視線を追えば、第一層で攻略に協力してくれたキリトとアスナがこちらに向かつて来ていた。

「よう、アリスにイーディス。久しぶり……って言う程時間経つてないか」

「二人が元気そうで良かつたわ」

「ここにちは、キリトとアスナも元気そうで安心しました」「まあ一人程のプレイヤーがそう簡単にやられはしないだろうけどね」

そう言えば二人は少し照れくさそうにしていた。第一層の攻略から二人はパーティを組んでいる様で、最初に会つた時とは違い、かなり打ち解けている。まあ、アスナは照れくさいのか否定するが、この世界に夢中なキリトが飛び出す場面で抜群なサポートをしている。

攻めはキリトで支援はアスナの安定しているパーティだ。彼がこの二人が攻略を推し進めることになると呴いていた意味が良く解る。恐らくレベルも今は私達に追いついているだろう。

そんな事を思いつつも二人と情報を共有した後、話題は変わつてキリトが神妙そうな表情で言う。

「……アルゴに依頼していた件だが、また空振りだつたらしい」

「……そう、ですか」

「……」

キリトの言葉に私は重く言葉を洩らし、イーディスも眉を下げて視線を下げる。アスナも憂鬱そうに息を吐いている。情報屋の『鼠』アルゴへの依頼をしていることは、ヤハトの捜索である。パーティから抜け、フレンド登録も無い為に『黒鉄宮』の生命の碑での生存確認ぐらいしか手掛かりが得られないでの、アルゴに依頼しているのだ。

しかし、レベル差も有る上に一人もスピード極振り型のステータスの為、場所を特定出来ても直ぐに撒かれてしまう。

いのか歯痒い そら沙んでいるとアフナが言った

るでしょうし、居たら縛つても取つ捕まえて文句を言えば良いの  
よ」

「縛つてもつて……」

「あはは……過激過ぎじゃない？」

アスナの言葉に私達は苦笑する。でも確かに彼は目を離せば何処かへ行つてしまう人だ。逃げ足も速いし。とりあえず彼の腕を掴めば簡単だろう。私のステータスなら彼は振り解くことは出来ないのだから。

そしてそのまま場の空気を変えようとしたのか、アスナが更に続け  
る。

「そうだ。アリスさんとイーディスさんも良ければ武器素材のアイテ  
ムを取るのを手伝ってくれないかしら？キリト君も一緒にやつてる  
から四人でやれば直ぐに終わらせられるだろうし。もちろんお礼は  
するから」

「…丁度私達もレベリングをしていたところですので構いませんよ。  
イーデイスは大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫よ。ただ少し回復アイテムを補充しておきたいからその後でお願い出来る?」

アスナが言葉を続けようとして、その後ろから彼女のネームが呼ばれる。ハツとして振り向くと、そこには一人の紫髪を括つてポニー テールにしているイーディスと同じ眼の色合いの女性。プレイヤーが居た。

ひゅつと息を呑んだ音が聞こえた。その方へ向ければアスナが、果然とした様子でそのプレイヤーを見詰めていた。顔には驚愕と混乱が

ありありと出ていた。もしかして知り合いだろうか。そしてアスナは呟く様に言つた。

「…………深澄…………？」

その呟きの後にアスナはその深澄と呼んだ女性の方に駆け寄り、抱き締めた。

「深澄っ！良かつたっ……良かつたっ……黒鉄宮で名前を確認するぐらいしか出来なくて……生きてて良かつたよお…………」

「…………ごめん、ごめんっ。明日奈……私、私…………」

そうして肩を寄せ合い、涙ぐむ二人の方へ行つて、キリトが恐る恐る言つた。

「…………あー、ちょっとと…とりあえず屋内に移ろう。此処じや目立つ」人の視線は今は少ないが、ちらほらと他のプレイヤーが出てくる前に移つた方が良いだろう。そんなキリトの言葉に反応して、ゆっくりアスナ達を連れてNPCの飲食店に入つた。

そして飲食店への道中でほんのちょっとだけ落ち着いたアスナと”深澄”と呼ばれるプレイヤーは隣席、キリトとイーディス、私が対面で座ると、アスナ達のタイミングを見計らつてキリトが言つた。

「落ち着いたなら聞きたいんだけど、君はアスナとパーティを組んでいた……」

「…………覚えてたんだね。うん。剣士君の言う通りだよ。前はありがとう」

どうやらキリトとも面識がある様で、お礼を言つて頭を下げる。そして今度は初対面の私達を見て、申し訳無さそうにして言う。

「自己紹介が遅れちゃってごめんなさい。私はミト。隣のアスナとはリアルで知り合いで友達なの」

なるほど、と頷きつつも私達も自己紹介を行う。

「私はアリスと言います、宜しくお願ひします。ミト」

「私はイーディスよ。宜しく。隣のアリスとはパーティを組んでいるわ」

お互いのプレイヤーネームを明かした後に一区切りとする様に会話を抜け、事情を聞きたがっていたアスナが聞いた。

「それで、みす…じゃなかつた。ミトは今まで如何してたの?」

アスナの言葉にミトは気まずそうな表情を浮かべるとゆつくり口を開いた。

「アスナとのパーティを解消してからは、一人でレベリングをしてた。そして第一層の攻略会議があつたでしょ。それに出席した時にアスナ達を見かけたけど、アスナは剣士君と組んでたし、あの時には声をかけられる勇気もなかつたから適当なパーティで組んで第一層の攻略に参加したんだ。でも、攻略の時には出しやばつたら私はβテストターだから疑われてしまう」

ミトの言葉に私とイーデイスは目を見開く。どうやらミトもキリトと同じ立場だつた様だ。

「実際、ディアベルつて人がああなつてしまつて、情け無いことに怖気付いちやつてさ。ボスを倒しにアスナ達の加勢出来なくて、βテストターの事で糾弾されて、それでも何も出来なかつたことが悔しくて、私に出来る事はこの世界の攻略ぐらいだから、第二層ではもつと動けるようにしようとレベリングを続けてたんだ」

膝に乗せている手を拳にして、そう言つたミトの表情は悔しそうな感じの中に怯えと申し訳無さが詰まつてゐるようと思えた。βテストターの責任、自分への苛立ち、第一層の攻略での不甲斐無さ、それらが彼女に伸し掛かつているものなのだろう。

「別にミトは何も悪くないよ。始まりの街で右往左往しているだけの私を助けてくれたから今の私は此処にいるんだもの」

「それに、君は今も攻略を諦めずに戦つてゐるんだ。それだけでも充分だと俺は思う」

アスナとキリトの言葉に私とイーデイスも頷く。この命のかかつた世界で屈せずに前線に出て戦うだけでも壮絶な勇気を要する事だ。私達も彼がいなければ、世界に絶望して今も始まりの街で震えていた可能性だつてあるかもしれない。

するとミトの強張らせていた身体の力が少し抜けて、表情が少しだけ弛んだ。

「……ありがとう。これは必ず結果で返すよ。……借りが増え

ちやつたかな

ミトの小さな咳きにアスナが反応する。

「良いよ、これくらいなら。それより借りが増えちやつたかなつて？」

「ああ……うん、実はアスナに会う前にも他の人に助けて貰つてさ。かなり危ない状況だつたんだけど」

そう言えば、アスナが慌てて心配するのをミトが大丈夫と宥める  
と、ふとそうだ。と言つて私達全員に聞いた。

「私を助けてくれた人にお礼を言いそびれちやつたんだけど、あの時、モンスタートレインにあつてたんだ。かなり大量の数だつたんだけど、タゲを一瞬で全部外されて助けられたの。そんな芸当、貴方達と同じレベルかそれ以上のレベルが無いと厳しいことだし、第一層の攻略にも参加している人ぐらいだろうけど、そんな芸当が出来る人つて知つてる？」

そう言われて知つていて且つ、そんな芸当が出来る人物なんて思い浮かぶのはたつた一人。そして私達が捜している人物。キリトが言つた。

「そんな事を可能とする奴は、ヤハトしか居ない。第一層の攻略の時に居たのなら俺の横にもう一人が居た事を憶えているだろ？」

キリトがミトに確認するように言うと、ミトは直ぐに納得した。

「確かに剣士君と一緒に戦つっていた人がいたね……攻略後に敢えて悪口を言つて、悪者になつた人だつたつけ。彼の敏捷も相当だつたわ。あの人か…」

ミトの呟きに対して、彼の居場所が知りたい私達、特に私とイーディスは情報を得る為に聞いていく。

「すいません。貴女が助けられた場所は何処だつたか憶えてますか？」

「場所？ 場所はフィールドの森が生い茂つてた迷宮区に近いところだつたかな

「どんな格好をしていたかは解る？」

「……いや、姿は見られなかつたかな。助けられたつて解つたのもモンスターのタゲを外されて、ポーションが置かれていたからだから」

場所は解つても格好が分からなくなると、目立つことが嫌いな彼のことだ、直ぐにその場から移動しているだろうから、殆ど意味をなさない。その事を理解しているミトは「めん」と言うので、気にしないでくださいと言う。

「……なるほど、大体の事情は察したよ。アリスさんとイーデイスさんはその彼のことを探しているってことでいい?」

事情を察したミトに頷く私達。ヤハトではない可能性もあるが、遠回しなやり方でミトを助けたのは捻くれ者らしい。無茶をしていなければいいけれど……私達の知る彼のことだ。捻くれながらも誰かを助けているのだろう。

けれど、誰かを助けている過程で彼が無茶をしてしまうことが往々として有ることは知っている。これから攻略には彼の存在が不可欠だ。なので、彼の居場所だけでも特定しておきたい。面倒くさがりの彼が攻略をサボらないとは限らないし、私達も言いたい事が山のようにあるのだから。

「アスナとキリト、武器素材の入手をお手伝いしたら、今度はヤハトの搜索に付き合つて頂けますか?」

私の提案にアスナとキリトは勿論と言うように頷く。するとミトが口を開いた。

「そのヤハト君、私も探すけど、もし良いなら私もついて行つていい? ヤハト君の手掛かり、私は殆ど知らないし」

勿論アスナの武器素材の搜索にもアスナが良いなら手伝うけど。と言うのでアスナは嬉しそうに頷く。それを見てキリトも少し微笑みを浮かべている。

そして今後の攻略へ向けて私達は動き始めた。

## 不穏な影は何処までも続く。

デスゲーム開始から一ヶ月以上が過ぎた。第一層の攻略成功が知らされた後、攻略へ向けての希望を見出した攻略に参加していなかつたプレイヤー達が徐々に安全な『圈内』を出て、フィールドに足を踏み出し始めた。

この世界のシステムを把握出来ていない者は攻略の先駆者達が生んだ攻略本が無料で提供された為にそれを基に今後この世界での生活を学んで、モンスターとの戦い方やシステムでのやり取り、金銭面でのやりくりを行う。

そして、ソロで生き抜く者、パーティを組んで堅実に行く者へとプレイヤーの選択肢は二分化していた。

それは私達も例外ではなく、現実ではあり得ない程に当たり前になってしまった死の恐怖と戦いながらこの世界と向き合っていた。

第一層の死刑宣告とも思えるこのゲームをデスゲームに変えた開発者の茅場により、私達総武高校から参加した生徒全員は混乱と恐怖にしばらく支配され切つてしまふことになった。

まず由比ヶ浜さんはショックで二週間は宿の個室で閉じこもり、葉山君のグループの女子達、特に三浦さんは葉山君から離れなくなり、離されればパニックに陥ってしまう状態になり、それを見て海老名さんもケアにほとんど時間を割かざるを得ない状況になり、男子も生活のやりくりの為にコルの工面に四苦八苦していた。

そして後輩の一色さんも同じくショックを受けてしまい、城廻先輩がケアを請け負ってくれたが、やはり前の様子までは中々回復していない。

不幸中の幸いなのは、弟妹の居る川崎さんのケアを戸塚君と材木座君が懸命に頑張ってくれたのと、川崎さんの精神力が想像よりはずつと強く、回復してコルの工面に三人で奔走してくれている事だ。自分で精一杯でしょうに、支えになつてくれるのはありがたく思う。

そして私、雪ノ下雪乃と葉山グループのリーダーである葉山君はこのグループでの生活状況について報告し合い、それぞれのケアを行い

ながらコルの工面について集団で泊まれる格安の宿で話し合つていた。

「……そろそろコルの残金が苦しくなってきたわね……幸いゲームの中だから餓死は無いけれど、食事を取れないのはかなりのストレスになるわ。もう少しいい狩場でないと。私達だけでは賄いきれなくなる」

「ああ、そうだね。でも第一層の最効率の狩場はもうかなりのプレイヤーが占拠していて真面に入れないし、しかもチームとはいえ俺と雪ノ下さんでレベル4…その次に戸部達と川崎さんと材木座君と戸塚君がレベル3で、姫菜と城廻さんといろはがレベル2で、結衣と優美子がレベル1だ。レベルが五以上の敵に遭遇してしまえば厳しい」

「…そうね。連携もまだまだレベルが上の敵を相手するには厳しいもの……でもせめてこの集団のモチベーションの維持だけはしておかなければこの状況で知り合いの離脱や離反は深刻な問題になるわ。特に由比ヶ浜さんと三浦さんにはそれは避けたいわね」

今私の状況を説明すると、『圈内』の外のフィールドに出ているのは由比ヶ浜さんと三浦さんを抜いた状態でパーティを組んで戦っている。しかし積極的にモンスターと戦うのはもちろんNGで、集団で囮い込み、3体以上出現した場合には徹底が鉄則となつていて。集団行動が得意ではない私も独断行動だけは絶対に取らないことを意識している。此処で誰か一人でも減つてしまえば瞬く間にこの集団で保つてきたきりぎりの精神状態は崩壊してしまう。

“攻略組”以外のプレイヤー達は私達と同じ難所に陥っているのだろうけれど、それは逆に言えば、誰しもが躊躇難所で拱いたままでいてしまえば私達はこのゲームが終わるまでずっと“攻略組”には追いつけない事への裏返しだろう。

どうにかしてこの状況を打破して、私達全員の戦力の強化をして最前線に行けるようにならないと…現実世界には戻れない。まだまだ私にも葉山君達にもやり残したことがあるのだから。

そう思いながら、今後の活動について思考を加速させていると、私達がいる宿の一室に慌てた様子で一色さんが入ってきた。

「た、大変ですっ！大変ですよっ！雪乃先輩、葉山先輩っ」

「……慌てた様子で如何したのかしら？一色さん」

「如何したんだ？ いろは」

このSAOでは本名は御法度ではあるけれど、そんな注意をする事も憚られる程に必死な表情の彼女はノックもなく入室した途端、手に持つている一枚の新聞の記事の切り抜き机の上に広げた。

「この新聞を見てください！」

その新聞は情報屋の『鼠』発行の物だ。そう言われて私は葉山君と怪訝に顔を見合わせて、一色さんの言う通りに新聞の記事の切り抜きに注目する。そして書かれた大見出しに二人で驚きの声を挙げる。

「なっ！『第一層を踏破！？』これは、確かな情報なの？」

「『見えた希望の一歩』……これが事実なら本当に希望が見えてきたかもしれない…！」

「何時もの情報屋さんの関係者さんが興奮したようにタダで他のプレイヤーにも配布していたので本当だと思います！」

私の言葉に一色さんは頷く。これは直ぐにこの場にいない人を呼んで情報共有する必要があるわね。

そう考えた私達はこの場にいないグループの人達を呼んでもぐさま事情を説明した。

「え…やつた！凄いよゆきのんっ！大ニュースだよ！」

「これは喜べることだね…まだまだだけど、現実世界に残して来た親と弟妹達にも逢える可能性も出てきたよ」

「まだまだ絶望するには早いつてことっしょ！隼人！結衣！姫名！戸部含む男共！あーし等も負けてらんないね！」

「確かに良いニュースだね。でも良い結果だけでは済まないか…」

「ディア×キバの片方欠けちゃうなんて…」

「マジつベーしょ！…これはパーティ開くべきじゃね？」

「それな！」

「だな」

「わあ…！…これはアインクラッド？の全プレイヤーも喜ぶねえ！はるさんにも伝えたいよ」

「凄いよ。攻略組の人達、僕らも頑張つて追いかけないとね！・ね、材木座君！」

「けふこん、けふこん、戸塚氏の言う通りであるな！我もさつき他のプレイヤー達がお祭り騒ぎしていた様子を拝見したが、これは納得であるな！」

反応はそれだけれど共通しているのは歓喜。

その情報がもたらした影響は、私達全員の士気も大きく高める着火剤として作用する。この事を励みにして私達も少しでも早く行かなければ…

すると不意に材木座君が新聞のある一面を見て驚嘆の表情と声を出した。

「なつ!?・これは…!?諸君等、此処を観ろ！」

そう言いながらその記事の一面のフォト機能で撮られた画像を指すので私達も見てみる。その画像は第一層の迷宮区のボスフロアで、ボスが倒された後の所を撮つたものだろう。

レイドパーティを組んだプレイヤー達の歓喜している。その中心に位置する一見では私達と同年代に見える少年少女達。

黒ずくめの片手剣使いの美男に、流れる亜麻色の長髪と赤いフードが取れたケープが特徴の刺剣を持つ美女、美麗な容姿と黄金色の長髪が特に印象的な片手剣を鞘に納める美女、その隣にいる灰色でポニーテールで括つた長髪が特徴的な片手剣使いの美女。

彼等が中心に位置するということはボスを倒したのも恐らく彼等。けれど今のところ材木座君が驚くほどの要素がこの画像があるとは思えない。

材木座に疑問を聞こうとして、画像の切れ目に写つてている人物を見て私は息を呑んで呟く。

「……ひ、き、がや君…？」

『えつ!』

切れ目の方に写つてているので、姿が完全に見えている訳ではないが、特徴的な癖毛とその眼に映るモノを腐食させそうな眼が充分に見える程には、はつきりと写つていた。

「ひつ、きー……？ 何で……？」

私と同じように呆然と咳く由比ヶ浜さん。それを見て三浦さんや海老名さんが心配して寄り添う。戸部君達が騒いで、一色さんに黙らせられた。

他人の空似はこれほどにあの男の顔つきと一致しているのであり得ない。何故彼がこの世界にいて、攻略組と同じ所にいるのか、彼もトッププレイヤーの一人なのか幾重もの自問自答を繰り返す。

如何して貴方が此処にいるの…？ また貴方は無茶をしているの？ また私達を置いて自己完結で問題に向かっているの？

比企谷君を見て言い表せない感情が溢れる。その様子を葉山君が複雑気に比企谷君の写っている所と見比べていた。

……あの男が此処にいるのであれば、ちゃんと話さないといけない。私と由比ヶ浜さんの本音を、依頼で来た一色さんの生徒会選挙後には言えなかつたから。

しつかりと向き合うのだ。また奉仕部……いえ、私と由比ヶ浜さんと彼のあの心地良い空間に作り直すこと。そして全てちゃんと話し合いを終えたら私は彼に……

そう私と由比ヶ浜さんはお互いの顔を見る。その眼には今までにないものがあると私でも分かる。

衝撃、呆然、疑問、彼がこの世界に囚われていたという事実への動搖、此処に居る私達と合流出来ていない事への寂しさ、また彼が先行つてているという哀しさ。置いて行かれたという心細さ。

：けれど、彼がいるという安心感、また彼に会うことへの渴望がそれらを上回つて由比ヶ浜さんの眼の輝きを灯していた。そしてその眼で私を見つめた彼女がゆっくりと咳く。

「…やろう。ゆきのん、ヒツキーに会つてまた三人でちゃんと話しあうの。そして奉仕部で、ヒツキーの帰りを待つている小町ちゃんと報告しよう！」

その言葉には今迄のどの言葉よりもずっと強い決意が宿つていた。

……やっぱり由比ヶ浜さんは強い人だ。揺れることはあつても断固とした決意をした時の彼女はどこまでも真っ直ぐで、誰よりも行動

力がある。彼女は意志が弱いと謙遜するけれど、この時が彼女の真骨頂だろう。

「……そうね。ちゃんとあの男と話し合つて、また三人揃つて現実世界に帰らなければ、小町さんも哀しむでしょうし。あんな男でも待つてくれている人は少なくともいる訳だから」

「うん…此処で燻つている訳にはいかないもん。私にはママもパパも、ゆきのんにもお母さんやお父さん、陽乃さんがいるし！」

「……驚いたわ由比ヶ浜さん。貴女、燻つているなんて言葉知つていたのね」

私が驚いた様子で言えば、由比ヶ浜さんはそれくらいは知つてゐるよ！と少しムツとした表情で突つ込みを入れると、そのやり取りに私以外の人達もおかしそうに笑う。

久しぶりにこの世界で何気ないやりとりが出来た気がする。そのきつかけになつた張本人に再会するために私達は今迄よりも更に気を引き締めて、この世界に立ち向かう。

そして第一層の攻略後から更に時間が経つて、私達のレベルが平均七と同じラインまでに上がつて私と葉山君がレベル九に。由比ヶ浜さんと三浦さんと川崎さん、材木座君が八に到達して、そろそろ今の最前線である第二層に進む事を検討している時期の事。

私達の連携の取りやすい陣形やコルに関しての財政面の確認を行つていると、葉山君のグループである戸部君が自信のある様子で切り出した。

「ちよつち意見と言うか提案があるんだけど言つて良いべ？」「何だ？カケル」

そう葉山君が話を聞く姿勢になつた事で全員の注目が戸部君に集まる。

「だべ、ちよい俺つちさあ、とつておきの情報をゲットしてさあ。ハヤト君達にも言つとこうかなつて」「どつておきの情報？」

「ああ、ビッグもビッグつしょ！今の俺たち達に必要な凄えもんよ！街を歩いてたらさ――――――」

「……能書きが長いわ」

重要な情報を関係の無い前置きまで話されてはこの状況でされることは非常に困るのだけれど。

そして戸部君の言葉遣いによつて非常に分かりにくい説明になつたので、自分なりに理解しやすい要約をする。

戸部君が街を歩いてレベリングやレアなアイテムがあるフィールドエリアの情報を探していると、ある男性プレイヤーが声を掛けてきて、コルに困つていて使わずに余つた回復ポーションなどを買つて欲しいと言つてきたという。

そのポーションは通常N P Cが売る相場の価格よりも高かつたのだが、男性プレイヤーが本当に困つてゐる様子だったので、回復ポーションを買うと男性プレイヤーは喜んで、情報屋にも出回つていない貴重な情報を教えてくれたらしい。

曰く、好奇心で第一層の迷宮区の奥の方にまで行つた所、第一層には私達のレベルで挑むには丁度良いレベル上げが出来そうな敵が出現したというのだ。レベル六の男性がチラツと確認して直ぐに引いたら余裕で逃げられたので、挑んでみては？と言われたらしい。

その情報がどれほどの正確性が確保されているかが分からぬ。御礼と言われたとしても信用していいかどうか：

「……その男性プレイヤーから貰つた情報を信用できるかしら？」

「……ああ、御礼とはいえ、もう少し裏付けが欲しいな」

私の呟きに葉山君が同意する。川崎さんや材木座君、一色さんも頷く。すると三浦さんと由比ヶ浜さんが言つた。

「でも高値のポーションを買わせといて嘘は無いつしょ。あーしは何かはあると思うけどね」

「そーだよ。普通に親切心かも知れないよ？」

「……三浦さん達の意見も否定出来る根拠がない。私は戸部君に男性プレイヤーのどの様な印象を受けたか聞けば、戸部君の様な騒がしこ軽……気さくな印象だつたらしい。それでも見落としているような

違和感があるのだけれど、そこまで思考して戸部君が言つた。

「あー、でも証拠つづーか、その人が直接に案内してくれるって言つてから何も無い訳ではなさそうだべ？」

「そうなのか？カケル、フレンド登録とか、連絡手段はあるのか？」

葉山君が聞けば、戸部君はあー…と苦笑しながら返す。

「それがさー…その人は他のプレイヤーにもこの情報を知られて狩場を他のパーティに占領されたら勿体ないって言つてつから、明日の昼になつたら迷宮区の入口で待つていてくれるつてよ」

戸部君のその言葉に、男性プレイヤーの言葉が一定の根拠が存在する可能性が出てきた。その言葉にも私の違和感を消すものではない。

けれどもその思考の途中で葉山君が言つた。

「…とりあえず分かつた。ポーションを買った御礼としてわざわざ対価でその情報を教えてくれたんだ。皆、ひとまずそのプレイヤーに全員で会つてみないか？」

そう提案する彼に私は待つたをかける。

「待つて頂戴。対して検討する時間を取らずに判断するのは悪手ではないかしら？」

「けれどユキノ…下さん、俺達のレベル的にもレベルングが出来れば第二層の最前線に直ぐに向かえるし、俺達全員のレベルだったら大抵の敵モブは倒せる。備えとしてポーションなど出来るだけポーションを用意していけばいい」

「……」

その言葉に反論しようにも、自分が感じたのはタダの違和感。反論するには葉山君の言葉以上の理由が必要。

言い淀んでいるとグループの三浦さん達が葉山君を支持した。

「あーしはハヤトの意見にさんせー。つーか、ユキノシタさん不安つづーなら、それこそ何かあれば、案内人の奴を叩き潰せばいいつしょ」

「うん、ゆきのんならレベルも上だから出来るよ」

その言葉に海老名さんや川崎さん、材木座君以外がうんうんと頷く。……三浦さんにそう言われるとは思わなかつたわね。

その言葉により私は違和感を抱えつつも、葉山君の意見に従う事にした。

そして当日、私達は陣形と装備を念入りに確認して時間になつて全員で迷宮区に行つた所、戸部君の言う通りに男性プレイヤーがいた。その男性プレイヤーは曲刀：所謂シミターを装備していて、軽鎧を着込んでいる。近づいて来た私達を見て言つた。

「おお、昨日の御礼のお約束を覚えてくれたんすね！こんな大所帯だとは想像してなかつたっすけど…！初めまして、自分のネームはモルテって言います。よろしくっす」

戸部君の言つたように気さくな印象であるが、何処か胡散臭さがある。外見からして年上だろう。

「はい、よろしくお願ひします」

葉山君が微笑んで応対する。その間に私はモルテと名乗つたプレイヤーの挙動を観察する。特に怪しい仕草があるわけでもないけれど、このプレイヤーに対しての違和感が増していく。

「おお、イケメンっすね。周りの皆さんもルックスが高い人が多いなあ。こりや有名になりそうっすね」

そう言われると何人かは照れるような反応をするが、私を含めた何人かは警戒しているままだ。

「やつぱり自分は信用されてないみたいっすね…まあ仕方ないっすけど、とりあえずは約束通りレベリングに良い狩場に案内しますよ」

そう雰囲気は余り残念そうにしていない彼は先導役に立つて迷宮区に入つた。

「…」

迷宮区に入つたのは私達の方針上ほとんど無く、奥まで行くのは全員が初めてだ。攻略組が攻略後に公開した迷宮区のマップは見たが、一致させるのには時間がかかる。迷宮区には他のパーティもちらほ

ら居た。

そして私達は大きなフィールドがある大扉の前にまで案内された。  
そして案内役の人は言う。

「此処つす。自分が敵モブを見たのは」

此処は……と案内された場所について思考をしていると戸部君が  
言つた。

「おお～、此処にレベリングに良いモンスターがいるんだべ！ モルテ  
さん！ 案内してもらつてありがとう～」

「お手柄だな」

「それな」

「アンタもちゃんとやれば出来るんじやん。ちょい見直したよ」

「カケル先輩も意外とやる事やつてたんですね」

勇足で大扉を開こうとする戸部君の後に続くようだ大岡君や大和  
君、三浦さんと一色さんが着いていく。如何やら御礼の事を完全に信  
用したらしい。

「ははは…そんな急いで扉を開けなくとも。改めてありがとうございます。  
モルテさん」

「いえいえー、約束事ですし、じゃあお邪魔にならないうちに自分は行  
きますね」

そう言つて踵を返してモルテさんは広間から去ろうとする。その  
時の表情は全て見えなかつたけれど、口角が上がつていた気がした。  
その時に強烈に嫌な予感がしたので私は呼び止めようとしたが、そ  
の前に戸部君達が大扉を開いて入つて行つてしまい、それを追うよう  
に葉山君を先頭に由比ヶ浜さんや川崎さん、海老名さん、材木座君に  
戸塚君、城廻先輩も着いて行つてしまう。

駄目…この部屋に入つては駄目。けれど間に合わない。私はモル  
テさんを呼び止めるのを諦めて私以外が入つていつた大扉が閉じて  
いく隙間に飛び込むように入るしかなかつた。

入る時にひゅうっと風が吹いた気がしたけれど、扉の動きによるも  
のかしら…

そして、ギイイイ…ガチャンッと大扉は閉まりきると同時に暗闇に

包まれていた広大な通路状の部屋に灯りが点いて窓枠のステンドグラスが輝く。

そしてその奥にいたモンスターを見て私達全員が呆然と絶望、後悔に呑まれてしまうことになる。

「あ、あ……あれはっ……！」

「そ、んなつ……、有り得ないっ!!」

その事実と向き合わされると血の気が引いて身体中が震えて、身の毛が屹立つと同時に奥にいる巨大な体躯と鋭い眼光で私達を射竦め、咆哮を挙げた。

『グオオオオオオオオオッ!!』

そのモンスターのネームは数日前にアインクラッド上の最大戦力の攻略組が死闘にて犠牲を出して屠った筈のフロアボスの《インファング・コボルトロード》とその取り巻き達だった。

その咆哮を合図として、取り巻き達こと《ルインコボルト・センチネル》が私達に殺到してきた。ボスの方はその場から動かない。

案内役の男がM P Kをする為に私達を案内したという事が理解出来てしまつたが、動機が分からぬ……

けれども不幸中の幸いか。最初から違和感などで案内役の男を警戒していた私は呆然としている葉山君達よりも早く冷静な思考を取り戻せた。

落ち着きなさい、雪ノ下雪乃！罠にかかるてしまつたけれどまだ間に合うわ。ボスが動かないということは攻略組の攻略過程と同じ可能性が高い。

攻略組と同じ方法を取れば未だ：：そう思いながら第一層のフロアボス攻略された後の公開情報を脳を冷静に回転させながら刺突剣を抜いて声を張り上げる。

「全員武器を取つて陣形を組み直して!! 罠だつたけれど此処の攻略法はわかっているのよ！ 攻略時より人数は少ないけれどレベルは適正。落ち着いて各個撃破するわ」

「そうだ。雪乃ちゃんの言う通り、落ち着いて対応するんだ！」

私の声に続けた葉山君の声で皆武器を取つて陣形を組み直して、取

り巻きのモンスターと激突する。

「はああっ！」

上段から振り下ろしてきた棍棒を身体を逸らして避けながら、突きを見舞う。すると取り巻きの身体がのけ反った。瞬間にボスに目を向けてもボスは動かない。

やはり攻略法は同じ可能性が高い。取り巻きの攻撃も余裕を持って躲せるから落ち着いて撃破は可能ね。

「「「でやああ！」」

「「「はああっ！」」

「「「やああっ！」」

他の人も冷静さを取り戻せたのか、分断して取り巻きの攻撃を上手く躱しながら、陣形を整えて連携しながら攻撃を上手く加えられる。

『グギヤアツ！』

時間を要したが、敵の動きに身体が慣れていくと発動したソードスキルを叩き込んでいき、何とか取り巻き達を倒す。が、ここまで前座ね。

取り巻き達を倒した事が合図となつて、ボスが片手斧と盾を手に動き出した。その様子を見て全員が硬直するが、私は再び言つた。

「恐れないで！後にはどちらにせよ引けないのは同じ！ボスの動きを落ち着いて見て。葉山君！」

「嗚呼！防御力が高い戸部達は持つての盾で攻撃を捌いて、ボスの攻撃の硬直後に一気に戸部達以外がソードスキルを叩き込むんだ！！絶対単独で行動せずに、攻撃を受けた離脱してポーションを飲んで回復してくれ。残りはフォローしながらタゲの分散！」

『おう（うん）！』

両手剣を構え直した葉山君の指示に硬直から立ち直つた由比ヶ浜さん達は再び陣形を組み直し、戸部君達はタンク役として動き始める。私を含めて慢心の色は一ミリも無い。

『ゴアアツ！』

狙い通りボスが戸部君、男子達に間合いを詰めて攻撃を加え始め

る。戸部君達は吹き飛ばされない様に人数で固まつて盾で攻撃を防ぐ。しかし表情は辛そうだ。

「ぐうつ…お、おんもつ…隼人君達、今つしょ！」

斧による叩きつけを武器や盾で防ぎ、攻撃の隙間を縫つて間合いを詰めてソードスキルを戸部君達タンク役以外が一気に叩き込む。

『はあつ！』

『グオオ!?』

ボスの悲鳴と同時にライフゲージが一気に削れていく。そして最後に攻撃を加えた人間に狙いが移る。狙いは三浦さんだ。

「ちよつ、こつち!」

距離を置いた三浦さんに間合いを詰めるボスを見て、葉山君がフオローをしにソードスキルで攻撃を加える。

すると狙いは葉山君に変わり、葉山君は後ろに飛ぶと言う。

「皆、スイッチだ！」

葉山君に狙いが移つたので、私達は入れ替わる様に突貫するとボスにソードスキルを加える。

『グオオオオオ!?』

先程よりもダメージが大きくなり無しか悲鳴の大きさも増しているようになる。

そしてライフゲージと神経をすり減らしつつもボスの動きに慣れたら私達は一本分になるまで減らす。私達はポーションの回復で七割以上は有る。

しかし、真の正念場はボスの行動が変化してからだ。ボスが雄叫びを挙げた後に片手斧と片手盾を放ると、背中の巨大な刀に手をかけて、突進のモーションに入つた。

「ツ全員、距離を…」

『グルアアツ！』

取つて。と言う間もなく、強烈な向かい風の衝撃が身体を打つて、ボスが猛然と間合い刀を紅く刀身を輝かせ横へ薙ぎ払う。

『「うああつ!?』』

「戸部、大岡、大和おつ！」

タンク役を担っていた三人が軽く吹き飛ばされる程の攻撃に葉山君が声を荒げてフォローに向かう。その他の人もフォローに向かうが、ボスは狙いを変えて一色さんに眼光を向けた。不味い……

「ひつ！」

「させない！」

一色さんに接近していくボスの背後に向けて駆けながらソードスキルを放つ。

『ギアア!?』

不意の一撃でボスはのけ反つたが、反撃として攻撃した私を睨んで刀を持つていない腕で叩きつけてくる。

「あああ！」

「雪乃ちゃんツッ！」

「ゆきのん!!」

直撃はしなかつたけれど、ボスの叩きつけの衝撃に吹き飛ばされて私のライフゲージが半分以下に削っていく。

そしてボスは壁辺りまで吹き飛んだ私に狙いをつけた。けれど攻撃を受けてしまったことで身体が痺れて金縛のように動かない。これはスタン攻撃……！

『グルルツ……』

動かない私を見て抵抗が出来ないことを悟ったように獲物のトドメを確信して唸つて嘲る。そして巨大な太刀の刀身を輝かせてソードスキルを放つ振るおうと急速に接近してくる。

「…ツ!!」

『雪ノ下（さん）ツ!!!』

「雪乃先輩!!」

「雪乃ちゃんツッ!!!」

そう皆が悲鳴を挙げてボスに攻撃を加えようと接近するけれど、明らかに間に合わない。その事を嫌でも察したのか、由比ヶ浜さんの絶叫が響く。

「ゆきのーーーんツッ!!」

その悲鳴が響く中でも容赦無く、ボスは私の眼前に迫つて太刀を振

り下ろした。

振り下ろされる死への一撃がやけにはつきりと見えるけれど……電脳世界で走馬灯は見ないようだ。……ごめんなさい皆。

ごめんなさい、姉さん。すみません、平塚先生。

ごめんなさい、由比ヶ浜さん。……ごめんなさい――

「……比企谷君……」

そう咳き、迫る死に思わず目を閉じる。

その瞬間、強い風が吹き抜けると私は謎の浮遊感に包まれて風に飛ばされた感覚に陥った。

ガシャアアアアンツツ!!!と太刀の叩きつける音が響いた。

……

……

…………太刀を叩きつけられた筈なのに衝撃を受けた感覚が無い。「ゆきのん!」

「ツ」

聴ける筈が無い声が聞こえてきて慌てて目を開く。すると由比ヶ浜さんが涙目で私を呼びながら回復ポーションを飲ませようとしていた。

「んぐっ」

ポーションを飲まされて赤ゲージ寸前のライフゲージが戻っていく。そして向こうを見て他の人がボスと戦っている。ライフゲージが九割以上に戻つて由比ヶ浜さんが涙目のまま言つた。

「良かつた……ゆきのん。本当に」

「私は……」

あの状況からどうやつて……私を誰かが助けたのは間違いないけれど、このパーティでの状況を開拓出来る程のステータスは誰もい

ない筈。

『グウオオオオオオ!!』

ボスの悲鳴が響くので眼を移せば赤ゲージに突入していた。加勢に行かない。思考を一度止めて再び私は武器を手に取つて死闘の決着の為に向かっていく。

そして：直ぐにボスの断末魔が響き、青い粒子となつて消失した。消失して私達は歓喜の声を挙げる人と神経をすり減らして上がつている息をへたれこんで整える人と反応はそれぞれだけれど、共通しているのは安堵だった。

「やつたね、ゆきのん。私達、ボスを倒したんだよ!?」これで私達も最前线へ行けるよ！」

喜びを表す様に抱きついてきた由比ヶ浜さんを受け止めながら頷き、私はホツと息を吐いた。

けれども私が無事だつたのは何故？ そう思つて辺りを見ようとしてひゅッと風切音が聞こえて、その方向を見てもるのは、部屋のオブジエクトだけだった。

「……彼奴等だけでボスを倒せるとはな。センスの塊過ぎるだろ。攻略組に来るの早すぎだわ」

そう呟きながら歓喜の声を背に階段を全力で駆け上がりつて第二層へ移動する。

紺色のフードケープを揺らして溜息をついた。ゲームの仕様で現実と違つて風が吹いてもフードの中を晒されないから助かつた。ばれないように部屋の角の隅のオブジエクトの影に隠れていた上にパーティだからか知らんが『看破』スキルを持つていないのでつて見つからずには済んだ。

雪ノ下を運ぶ時もステータスの関係上、見えない速度で走つて離れ

たから見えてないだろうし、運んだ雪ノ下を見つける直前まで全員がボスの方に釘付けだつたからその間にまた端の隅まで走つて離れたおかげで誰にも悟られることもなかつた。直ぐに見つかるように由比ヶ浜の横に運んだのがギリギリだつた。

それにして雪ノ下の無茶をシスコンの魔王が観たら卒倒しそうだ。そんな姿を見てみたい気もするが、(物理的にも社会的にも)殺されそうだからやつぱ良いか。後由比ヶ浜にも。あれ多分しばらくゆる百合らしく、くつ付き続けるんだろうなあ。

遠い目になりかけるも思考を再び切り替える。懸念すべきことが出てきたからだ。

フロアボスの再出現、そしてMPK、否PKを意図的に行うプレイヤーが存在すること。隠れて聞いていたが、モルテだつたか。そう遠くない内に攻略組の障害になることは容易に想像出来る。

「……とりあえず『鼠』に依頼しておくか……」

はあ：面倒な事しか起きんなあ。働きたくないのに…せめて攻略に集中させて欲しいもんだ。

まあ、攻略の障害は現実世界への帰還の障害だ。つまり小町との再会の障害なら、動くしかない。

「モルテ……ね。こつちも地道に探るしかないか」

そう呟き、着いた第二層のファイールドを駆け出した。

雪ノ下達がイレギュラーな戦闘を行う前の時刻に、キリト達も武器強化詐欺事件の解決に動いていた事を俺は知らない。

そしてその次の日に第二層ボス攻略が始まる。